

研究紀要

第 10 号

(目 次)

論 文

東京大都市圏と私の研究史

—生活経験と地理学—……………山 鹿 誠 次… 1

》疾風怒濤《 を背景とした戯曲

『ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン』に展開される

ゲーテ的主題を中心に 〔試論1〕に基づく〔試論2〕

(作品分析を中心に)……………柿 原 啓 志…(1)

心の交換—あるペトラルキズムのコンシートをめぐって……………滝 口 晴 生…(23)

段丘礫からみた相模川の河成段丘(その2)……………米 澤 宏…(45)

近年の製造業における研究開発部門の立地動向……………和 田 一 誠…(54)

紹介と書評

石母田 正著

『中世的世界の形成』を読む……………新 井 孝 重… 13

1986

獨協中学校・高等学校

東京大都市圏と私の研究史

—生活経験と地理学—

山鹿 誠次

はじめに

私の人生を回顧してみると、私の生活は東京大都市圏の発展と歩調を共にしてきた。居所が日本橋—荏原—浦和—小金井と変り、勤務先が文京区—世田谷—小金井—草加と遠心的に移動し、いま再び文京区に戻ってきたことも、そのあらわれである。研究のテーマも東京大都市圏の中から身近な問題を取りあげ、それを一般化する方法で進んできた⁽¹⁾。そこで私の生活や研究の段階と、東京大都市圏の動向を対比し(表参照)、いわゆる自分史を編んでみた。生活経験を通じての地理学という一つの試みである。

I 生いたち期

私は一九一六年(大正五年)、東京下町の間屋街に生れた。父は当時の日本橋区(今の中央区)堀留町で京呉服卸商を営んでいた。そのころの下町では、店主の家族、従業員もすべて店に住み、いわゆる住職一致、併用住宅の形だった。当時の東京の市街

地はおおむね山手線内の旧十五区で、江戸以来の旧市街地をかこむ周辺農村地域が徐々に住宅化した時期にあたり、市内交通はおおむね市電といわれる路面電車にたよっていた。

一九二三年の関東大震災はこの旧市街地を焼きつくした。日本橋の家も全焼し、当時の郊外であった東京府荏原郡平塚村戸越(今の品川区豊町)に移り住んだ。店が復興した後も、住むには郊外の方が良いというので、父は日本橋へ通勤し、私たちが家族は荏原で生活することになった。関東大震災後の東京西部住宅地域の著しい発展期にあたり、芋畑や竹やぶが開かれて一日一日と都市化が進んだ。

この地域の都市化を最も端的に示すものに私の小学校の転校歴がある。住宅が増加するにつれ、学校が増設され、学区が細分される。このため自分の家は変らないのに、学区が変更されて、私は小学校を五校も転校した。杜松—杜松分校—三つ木—宮前—大間窪の五校である。また最も人口増加が激しく、学校の増設が間にあわなかった時には、小学校三年生から五年生までは一日二部授業(午前組、午後組)、二年生以下は一日三部授業(八時—十時、十時—十二時、一時—三時)で、全日授業を受けられるのは六年生だけという時期があった。そのため、一時は隣接の品川町へ越境通学が公認され、前記の転校回数にはそれが含まれている(三つ木小学校)。

所属の地名も、荏原郡平塚村―平塚町―荏原町―荏原区―品川区(合併)と変った。これは山手線外方の都市化で、東京市域が拡張し、旧五郡が東京市に編入されて三十五区となり、その後、区の統合があったためである。このように大都市の拡張を直接に体験したことが、後になって都市地理学、とくに大都市近郊の変容に興味をもつ基盤になったかも知れない。

II 学生および地方居住期(基礎的研究期)

小学校卒業後、私は旧制の第一東京市立中学校(現在の都立九段高校)に入った。ここで浅井治平先生の地理の授業を受け、それが私の進路に大きい影響を与えた。ついで東京高等師範学校文科四部(地理歴史専攻)を経て、東京文理科大学地学科地理学専攻に進んだ。(両校はその後、合体して東京教育大学となり、さらに筑波大学に受けつがれた)

大学の卒業論文は田中啓爾教授の指導により、「東京における水上生活者の生成」⁽²⁾であった。これはかつて江戸をめぐる関東内陸の河川流域や東京内湾の舟運に従事していた人々が、交通の変革に伴ない、明治以後、東京に流入して水上生活者となった経緯を研究したものである。即ち、江戸・明治時代にも、江戸・東京を囲む大都市圏的なものがあり、その一端をとりあげたことになるが、そのころはまだそれ程の意識をもっていたとはいえない。

いわば当時は基礎的研究の時期であった。

第二次世界大戦のため、大学卒業と同時に軍務に就いた。海軍予備学生から教官(海軍兵学校および航空隊)となり、奈良・美保(鳥取県)・江田島(広島県)・針尾(長崎県)・防府(山口県)と、西日本の各地を次々と転動した。戦時中、東京の発展は停止し、疎開などによる衰微があり、さらに戦災による荒廃となった。

一九四五年の敗戦により復員したが、戦災後の東京に帰れず、約一年間、静岡県伊東で生活した。伊東では伊豆半島の自給製塩の研究に従事した。⁽³⁾一九四六年東京の出版社に就職したが、一ヶ月ほどは伊東から東京へ三時間半の遠距離通勤となった。漸く埼玉県浦和市に借間(のちに借家)がみつき転居した。郊外電車は食料の買出し客で鈴なり、池袋や新宿では闇市が繁昌していた。

III 浦和居住期(衛星都市研究期)

一九四七年五月、文京区竹早町にあった東京第一師範学校女子部に就任した。一九四九年四月、東京の四つの師範学校が統合して東京学芸大学に移行し、私の勤務先は同大学竹早分校となった。漸く落ついて研究生活に入れるようになった。

こうして浦和から東京へ通勤しているうちに、自分のように巨

大都市周辺の都市から東京に通う人の多いのに注目した。また浦和の性格が、一般の県庁所在地とかなり異なっていることに気づいた。そこで大都市圏の拡大に伴う地方都市の変質を明らかにしようとして、衛星都市の研究に手をつけた。

まず居住地の浦和について、その発達・生活圏・都市機能・地域構造などを分析、その結果を地理学評論などの学術誌に発表した。⁽⁴⁾ それらをまとめたものが、浦和市教育委員会から「衛星都市浦和の研究」の題で刊行された。⁽⁵⁾ さらに同様の研究を他の衛星都市にひろげ、調査地域を松戸、千葉、川越、熊谷などに及ぼし、東京を中心とする衛星都市群の発達にまよめていった。⁽⁶⁾ 続いてこれを阪神や中京の衛星都市群と比較し、日本の衛星都市の研究へと拡大した。この研究を体系化したものが学位論文となり、一九六一年に理学博士の学位を授与された。論文の要約は地理学評論へ発表した。⁽⁷⁾

衛星都市の発展は第二次大戦後の大都市復興の反映であり、昭和二十年代の顕著な現象といえよう。こうして私の研究分野は都市地理学に焦点をさぼるようになったが、そのため木内信蔵教授（東京大学）の指導を受けることが多く、また地理学一般の研究方法、特に学位論文の作成にあたっては、青野寿郎教授（東京教育大学）の指導を仰いだ。

東京学芸大学は統合計画によって、まず世田谷・小金井の二分

校にまとめられ、最後は小金井のキャンパス一つに統合した。私もその計画にそって、竹早分校から世田谷分校を経て、小金井に移った。学芸大学の統合は東京大都市圏における学園の郊外移動の好例であり、それに合せて私の職場も変転したことになる。そして私の住居もまた、十年間住んだ浦和から東京都下の小金井に転居した。

IV 都市化研究期

私が転居した一九五六年当時の小金井は、まだ東京都北多摩郡小金井町であった。武蔵野の一農村であった小金井村は、一九三七年に町となり、一九五八年に市制施行というように都市化が進行していった。東京の西郊はその前からすでに私の研究のフィールドとなっていたが、改めてこの地に職場と住居をもってみると、さらにこの地域を掘り下げて研究したいという意欲が高まった。ここではまだ一部に武蔵野の面影が残り、かつ巨大都市の膨脹による都市化が典型的にみられる。しかも昭和三十年代は日本の高度成長期であり、巨大都市への人口集中と、その反映としての郊外発展が、きわめて顕著になった時代である。ちょうど私が幼い日、荏原の地で体験した郊外の変容が、数十年の歳月を隔てて、東京の遠い郊外において、一層激しい様相をもって現れていたのである。

そこで私は居住地小金井を中心に、西郊武蔵野の都市化をテーマにして取り組んだ。特に住宅地の発展と都市化の關係は、小金井市を例として研究した⁽⁸⁾。ついで学園町は国立市を例に、工業地は府中市と日野市、病院町は清瀬市を例として取り上げた。これらの研究を集約し、さらに東京の北郊、東郊、南郊などと比較した論文は、「大都市近郊の都市化」として地学雑誌に発表した⁽¹¹⁾。

そのころ、学界でも都市化研究がさかんであり、国際地理学会議東京地方會議(RCJ)や、日本地理学会の都市化研究委員会で活発な研究討議が行なわれた。後者では私が初代主査をつとめて、多くの同僚の方から協力・助言をいただいた⁽¹²⁾。

他方、大都市の中心部については、一九六三年首都の経済的管埋機能の調査⁽¹³⁾、一九六四年新宿副都心研究などに参加し、それをもとに都心・副都心・郊外を合せて大都市圏研究を体系化するこゝとに努めた⁽¹⁴⁾。これらに關係する著書として、「都市調査法」⁽¹⁵⁾、「都市地理学」⁽¹⁶⁾、「東京大都市圏の研究」⁽¹⁷⁾、「都市近郊―武蔵野の變容」⁽¹⁸⁾などがある。また若い研究者と共に行なつた共同研究に、山鹿編の「都市發展の理論」⁽¹⁹⁾や、山鹿・伊藤共編の「東京周辺都市の研究」⁽²⁰⁾がある。

当時、東京大都市圏では日本住宅公団(のちに住宅都市整備公団となる)の発足(一九五五年)を機に団地都市化がみられ、一九五六年には首都圏整備法、さらに一九六四年には東京オリンピ

ックがあつて、東京はめざましい変容をとげた。

V 応用地理研究期

昭和四十年代に入ると、東京大都市圏はさらに拡大し、外方へは大規模なニュータウンの造成、多摩丘陵などへの進出がみられ、内部では面開発、マンションなど、高層化、再開発が進展した。私の研究も、東京の北郊⁽²¹⁾、多摩丘陵⁽²²⁾、三多摩⁽²³⁾など、東京周辺の広い範囲に拡大した。

他方、高度成長のひずみが訴えられ、各都市は社会開発を中心に市政を再検討する必要に迫られるようになった。地方自治法による基本構想の策定も要求された。このため、学者・研究者に協力を依頼することがさかになった。このような社会・行政への協力は、地理学としては応用地理学の部門に属し、私は都市診断・商業診断・計画策定・審議会の参加などに忙殺された。關係した都市は、小金井・加須・行田・秩父・上尾・越谷・大宮・寄居・足利・館山の諸市や、大田区、中央区などであり、私の研究地域は関東一円、いわゆる首都圏に拡大した。私はこれらの研究報告のなかで、その都市が首都圏に占める地理的位置と、都市化の發達過程における歴史的背景を考え、それによってその都市の特性や今後の動向について論ずることにした。

これらの研究をまとめた著書が、「都市の研究と診断」(一九

七三年⁽²⁴⁾である。この研究では経済学、社会学、行政学、都市工学など、地理学以外の分野との協力が必要となり、その交流は都市学会の活動をさかんにした。なお、当時の大都市圏（大都市地域）に関する研究をまとめたものに山鹿編の「大都市地域」がある⁽²⁵⁾。

VI 地理教育研究期

一九七三年から六年間、東京学芸大学付属小金井中学校校長を併任した。教員養成を主とする大学の性格上、地理教育は以前から関係があったが、ここで集中的に取り組むことになった。さまざまな機会に執筆・講演したものをまとめて、「地理と教育」（一九七七年⁽²⁶⁾）を著した。また、矢嶋仁吉・位野木寿一両氏とともに、「現代地理教育講座」全五巻を編集した⁽²⁷⁾。

他方、地理学の研究方向としては、都市地理より視点を広くとり、地誌的・発達史的色彩の研究や、従来の研究をもとにした展望的論文に移っていった。取り上げた地域も中京圏、近畿圏、中国と広がり、地方都市や日本全体の都市分布に関するものもある⁽²⁸⁾。このように広域を対象とし、一般向けにまとめた著書が「変動する都市」（一九七九年⁽²⁹⁾）である。

なお、この時期の前後にもわたるが、日本地誌研究所の「日本地誌」（二十一巻）の編さんスタッフ、小金井市役所の「小金井

市誌」（三巻）の編さん総括委員、建設省京浜工事事務所の「東摩川誌」（五巻）の編集委員などとして、さまざまな地誌・市誌・河川流域誌の編集に関係した。

昭和五十年代になって、都市や社会の動向が大きく転換し、全国的な都市化の波及や、地方中核都市の発展がみられたことも、この期の研究に反映している。

VII 地理教養研究期

一九八〇年、東京学芸大学教授の定年を迎え、獨協大学に転動した。私は東京西郊の小金井から北郊の草加へ、武蔵野線によって通勤することになった。この線は外山手環状線ともいわれ、東京大都市圏の都市化前線にはぼ沿っている。通勤途中の車窓からみる沿線の変容は、私の大都市圏研究にたえず新しい刺戟を与えてくれた。また東京大都市圏では、西南郊から東北郊へと都市化が波及したことも、私の転動方向と軌を一にしている。

獨協大学では地元草加市との共同研究に参加し、大都市圏周辺部の都市化と都市構造を新しい目で見直した⁽³⁰⁾。また新宿新都心の発展をまとめ、大都市圏中心部の再開発を再検討した⁽³¹⁾。他方、東京・中京・京阪神を結ぶ日本のメガロポリスを展望するなど、これまでの研究をさらに広めた。これらの研究をまとめた著書が、「日本の大都市圏」（一九八四年⁽³²⁾）である。一九六四年に初版を

出した「都市地理学」も、この機会に書き直し、新訂版（一九八一年）とした。⁽³³⁾これには昭和五十年代後半から六十年代にかけて、大都市圏の中心部でも、周辺部でも、激しい多面的展開があり、また情報化・国際化の進展など新しい動きのみられたことも反映している。⁽³⁴⁾

獨協大学では教養部に所属したが、一般教育科目・専門科目・教職科目など幅広く担当した。しかし地理学専攻以外の学生が対象であるため、広い教養を主体とした。また同大学が国際化をめぐらしているので、国外の題材を講義内容に積極的に取り入れるため、春・夏の休暇期間を利用して海外旅行をしばしば行なった。中国二回、マレー半島、インドとネパール、イギリスとアイルランド、中央ヨーロッパ、北ヨーロッパ、アメリカ西海岸、オーストラリアとニュージーランドなどである。それ以前に出かけたヨーロッパ一周、合衆国とカナダ、ソ連と中央アジアを加えると、海外旅行は十二回になった。

旅行中撮影したスライド類は、教材として講義にさかんに使用した。また大都市圏関係では、ヨーロッパやアメリカをはじめ世界各地の大都市とその周辺を視察したことが大いに役立った。

おわりに

一九八六年、獨協学園理事、獨協中・高等学校校長に併任され、

文京区目白台にも職場をもつことになった。文京区はかつて学生生活（大塚）を過したところであり、また軍務後の最初の勤務校（竹早）の所在地である。私にとって若い日の思い出の地であり、いわば古巣にもどった感じである。

しかし最近における山手線内区部の変容は目をみはるものがあり、ビルやマンションなど、再開発、高層化は激しさを増している。獨協中・高校自体としても、狭い校地の高度利用のため、半地下式体育館を建てており、将来改築予定の本校舎も地下室の利用など、立体化、高度化が計画されている。他方、都市改造の進む中であって、江戸・明治などの古い伝統的都市景観を保存し、または研究評価しようとする動きもある。⁽³⁵⁾そうした点で、東京の中心部にもどってきた私としても、機会を得て、今後新しい視点で東京大都市圏を再検討したいと思う。

以上のように遅々たる歩みながら、私は自分の身近な地域の問題を土台に研究を積み重ねてきた。またその折々に自分に与えられた生活環境や職務を、できるだけ自己の研究に生かすよう努めた。逆に、その研究を自己の勤務に活用することも考えてきた。しかし回顧してみると、私の非力から過誤や不徹底に終わったことも多く、今となっては、繰り返しのできない人生を悔むのみである。欠点の多い自己の生活を開陳することには、恥ずかしい感もあるが、率直に私の歩んできた道をたどってみた。今日まで何と

か研究を続けてこられたのは、ひとえに多くの恩師・先輩・同僚・友人各位をはじめ、関係各方面の方々のお蔭である。それらの方々に深く感謝するとともに、七十歳を迎えた今後は、これまでの人生を改めてみつめなおしてみたいと思っている。

文献および注

- (1) 山鹿誠次(一九八〇)「都市・地理・教育―私の歩んだ道―」、地理二五―一七。
- (2) 山鹿誠次(一九五〇)「東京における水上生活者の生成」、地理学評論二二―一七。
- (3) 山鹿誠次(一九五〇)「伊豆半島の自給製塩」、田中啓爾先生記念大塚地理学会論文集。
- (4) 山鹿誠次(一九五二)「衛星都市浦和の形成とその生活圏」、地理学評論二四―一一。
- (5) 山鹿誠次(一九五三)「衛星都市浦和の研究」、浦和市教育委員会。
- (6) 山鹿誠次(一九五二)「東京を中心とする衛星都市の発達」、新地理I。
- (7) 山鹿誠次(一九六三)「日本における衛星都市の研究」、地理学評論三六―一三。
- (8) 山鹿誠次(一九六〇)「東京西郊における住宅地の発展と都市化―特に小金井市を例として―」、東京学芸大学研究報告一一。
- (9) 山鹿誠次(一九五八)「大都市周辺における学園町の成立とその性格―東京都国立町を中心として―」、都市問題四九―一六。
- (10) 山鹿誠次(一九五九)「東京都清瀬町の都市化―大都市周辺における病院町の成立」、地理学評論三二―一。
- (11) 山鹿誠次(一九六〇)「大都市近郊の都市化―東京西郊を例として―」、地学雑誌六九―一五。
- (12) 木内信蔵・山鹿誠次・清水馨八郎・稲永幸男共編(一九六四)「日本の都市化」、古今書院。
- 山鹿誠次(一九七三)「都市地理研究のあゆみ」、地理学評論四六―一七。
- (13) 山鹿誠次(一九六五)「首都の経済的管理機能の相互関係」、東北地理一七―一二。
- (14) 山鹿誠次(一九五九)「地理学における大都市圏研究の方法」、都市問題五〇―一二。
- (15) 山鹿誠次(一九六三)「都市調査法」、古今書院。
- (16) 山鹿誠次(一九六四)「都市地理学」、大明堂。
- (17) 山鹿誠次(一九六七)「東京大都市圏の研究」、大明堂。
- (18) 山鹿誠次(一九六九)「都市近郊―武蔵野の変容―」、古今書院。
- (19) 山鹿誠次編(一九六五)「都市発展の理論」、明玄書房。
- (20) 山鹿誠次・伊藤善市共編(一九六六)「東京周辺都市の研究―大都市の類型的な実態分析による―」、大明堂。
- (21) Yanaga, S. (1970) : Urbanization in the Northern Suburbs of Tokyo. Japanese Cities. A. J. G.
- (22) 山鹿誠次(一九七三)「多摩丘陵の都市化―丘陵地理学序説―」、東京学芸大学紀要、二五。
- (23) 山鹿誠次(一九七四)「東京三多摩地域における都市化の動向と問題点」、関東都市学会年報I。
- (24) 山鹿誠次(一九七三)「都市の研究と診断」、大明堂。
- (25) 山鹿誠次編(一九七一)「大都市地域」(講座・都市と国土I)

鹿島出版会。

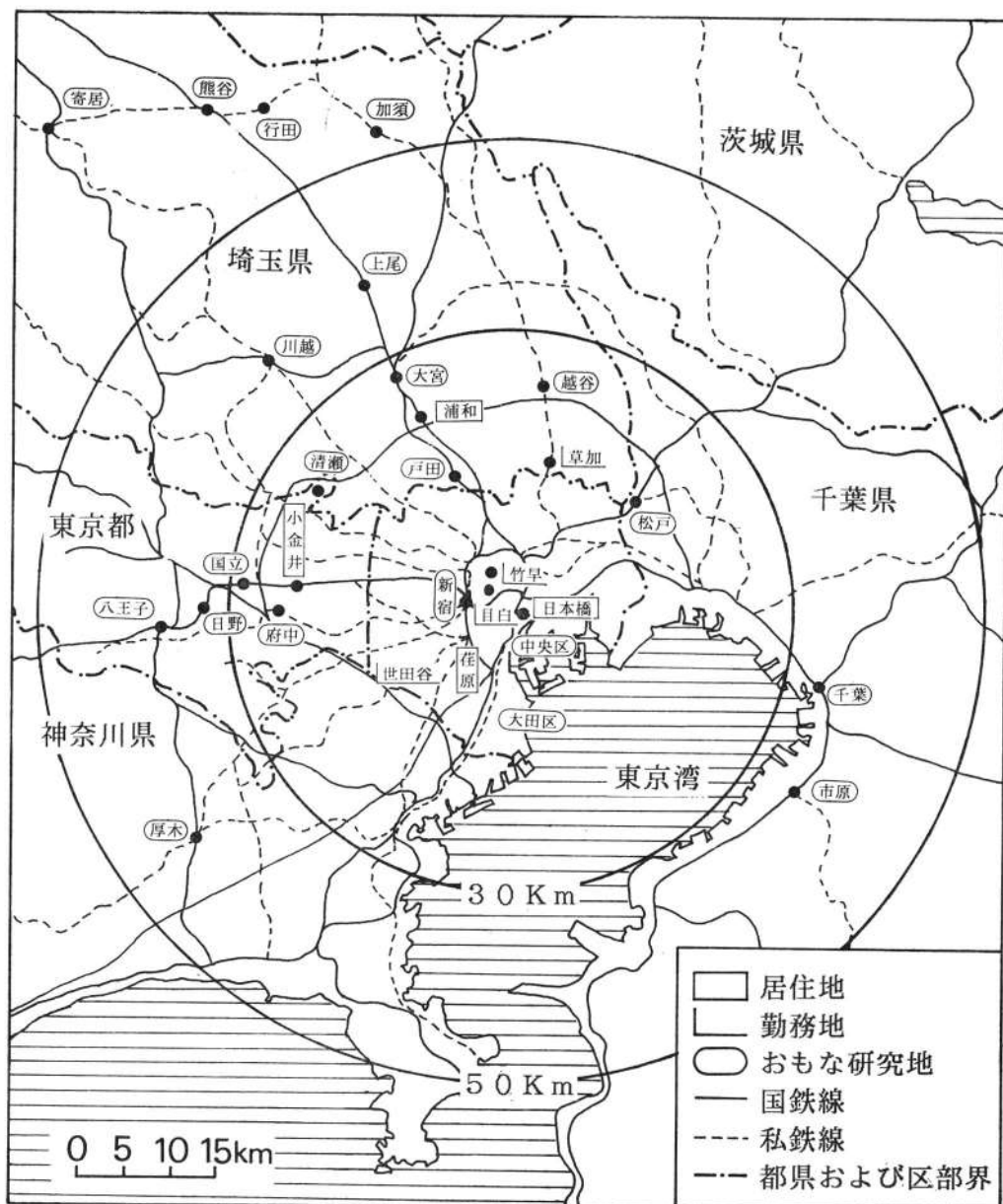
- (26) 山鹿誠次(一九七七)「地理と教育」、大明堂。
- (27) 矢嶋仁吉・位野木寿一・山鹿誠次共編(一九七二・七九)「現代地理教育講座」全五巻、古今書院。
- (28) 山鹿誠次(一九七八)「日本における都市化の動向と都市分布」不動産研究 一〇—二。
- Yamaga, S., Lai Poh Hoeng & Ritman Komara. (1980): The Development and Distribution of Cities in Japan. 東京学芸大学紀要 三一。
- (29) 山鹿誠次(一九七九)「変動する都市」、東京書籍。
- (30) 山鹿誠次(一九八三)「草加の都市化と地域構造」、独協大学経済学部共同研究プロジェクト委員会、高度成長と草加市の変貌、研究報告書。
- (31) 山鹿誠次(一九八四)「新都心新宿の発展」新宿区教育委員会、地図でみる新宿区の移り変わり—淀橋・大久保編—。
- (32) 山鹿誠次(一九八四)「日本の大都市圏」、大明堂。
- (33) 山鹿誠次(一九八一)「新訂・都市地理学」、大明堂。(この書は一九八六年、中国で翻訳出版された。山鹿著・朱徳洋訳「城市地理学」湖北教育出版社)。
- (34) 山鹿誠次(一九八五)「都市地理学の発展と課題」、千葉大学地理学研究室編、地理学の社会化、大明堂。
- (35) 山鹿誠次(一九八六)「東京にみられる江戸・明治—新宿付近を例として—」、教育どほう 四五九号

〔付記〕

山鹿の都市地理学に関する著書・論文のリストは右記(33)の「新

訂・都市地理学」の巻末にまとめて掲げてある。また一九八〇年までの山鹿の著作目録(都市地理学以外のものも含む著書・論文・分担執筆等)は「学芸地理」第三四号(山鹿誠次教授退官記念特集、東京学芸大学地理学会、一九八〇年二月刊)に掲載されている。

(付図) 東京大都市圏における関係地域



同心円は東京を中心として内円は30 km、外円は50 kmを示す。
 居住地、研究地、勤務地は重複するものがあるが、そのいずれかの記号に入れた。

主 要 著 書	東 京 大 都 市 圏 の 動 向
	1923年まで、山手線内の充実時期 1923 関東大震災 以後、山手線外方部の都市化 1932 東京市域拡張（5郡編入）
	1943 東京都制 1945 東京戦災 敗戦直後の荒廃・混乱期
1949 都市と村 1949 衣料資源と紡織工業 1953 衛星都市浦和の研究	戦後の都市化期 区部の充填と都下および隣接県への拡大 戦前への復帰と個人住宅地の発展
1963 都市調査法 1964 都市地理学（初版） 1967 東京大都市圏の研究 1969 都市近郊—武蔵野の変容—	住宅公団（1955発足）などによる団地都市化 西南郊と東北郊の格差減少へ 1956 首都圏整備法 1964 東京オリンピックによる都市改造
1973 都市の研究と診断	外方へは大規模なニュー・タウン造成 丘陵地への 進出 内部では面開発・マンションなど高層化、再開発の 進展
1977 地理と教育 1979 変動する都市	メガロポリスの発達 地方中核都市の発展 新線建設・在来線の線増など
1981 新訂・都市地理学 1984 日本の大都市圏 1987 （予定）旅と風土	大都市圏の多面的展開 多心構造 情報化・国際化の進展

(付表) 生活・研究の段階と東京大都市圏の動向

時期区分	年	生活・研究の概要
I. 生いたち期	1916 ~39	1916 東京日本橋の間屋街に生れる
		1923 関東大震災に罹災、府下荏原郡平塚村（現在品川区）に転居
		1934 第一東京市立中学校卒業
		1939 東京高等師範学校地歴科卒業
III. 学生・地方 居住期 (基礎的研究期)	1939 ~46	1943 東京文理科大学地理学科卒業（論文・東京の水 上生活者の研究）
		1943~45 海軍教官として西日本各地を転勤
		1945 静岡県伊東に居住（伊豆の自給製塩の研究）
		1946 埼玉県浦和市へ転居
III. 浦和居住期 (衛星都市研究期)	1947 ~56	1947 東京第一師範学校女子部（文京区竹早町）就任 浦和市はじめ東京の衛星都市を研究
		1955 東京学芸大学世田谷分校に転属
		1956 小金井に転居
VI. 都市化研究期 (東京大都市圏研究期)	1956 ~65	1957 学芸大学小金井分校に転属
		1958 日本地理学会都市化研究委員会主査 都市化・都市近郊・都市中心部の研究を合せ、 東京大都市圏の研究
V. 応用地理研究期 (首都圏研究期)	1965 ~73	関東諸都市を中心に、都市診断、商業診断、審 議会などに参加（関係都市、小金井・大宮・秩 父・上尾・越谷・足利・館山・大田区・中央区 ほか）
IV. 地理教育研究期 (全国的研究期)	1973 ~80	1973~79 学芸大学付属小金井中学校長併任 地理教育関係の研究
		中京・阪神および地方中核都市の研究 地誌的・発達史的色彩の研究
VII. 地理教養研究期 (海外研究期)	1980 ~	1980 獨協大学（埼玉県草加市）教授 地元草加市の研究 海外旅行9回（以前を含め12回）
		1986 獨協中・高校長（文京区関口町）併任

石母田正著『中世的世界の形成』を読む

新井孝重

はじめに

石母田正氏の著書『中世的世界の形成』は、かつて伊賀国南部の山間地に存在した一箇の荘園の歴史を対象とする研究書である。一つの荘園の歴史をたどりながら「そこに大きな歴史の潮流をさぐりたい」という著者の念願から産み出された研究書である。

本書が発刊されてからすでに四十年にもなる。石母田氏がこの本を書き上げたのは一九四四年のことで出版されたのは敗戦後の一九四六年であった。以来この書物がわが国の歴史学に巨大な影響をあたえたことはいまさら揚言するまでもない。⁽¹⁾戦後の日本中世史学の理論と方法はこの一書からはじまり、これを軸にしてコペルニクスの転回をとげたといっても過言ではないのである。

四十年間の日本中世史学が積み上げた学問の成果はまことに精細をきわめ、しかも多彩な側面に目を向けることによって、過去

のそれぞれの時代像を豊かならしめた。実証的レベルでは石母田氏の達成点をはるかに超え、ためにこの景況は本書を後景におしやり、もはや古典文献の一書にしてしまったかの観をすら呈している。時間の推移とこれにともなう後統諸研究の進歩を考えれば、あるいは当然かもしれぬ。しかし、にもかかわらず、石母田氏のこの書物が読む者の魂を捕捉して離さないのは何故であろうか。読むたびに深い感動をおぼえるのはわたくしだけではあるまい。

おそらく、人の心を揺さぶり、ある種の興奮と頭脳活動の活性をもたらすのは、この本が「華麗ともいうべき」⁽²⁾理論性と体系性をもつことと、戦時下の時代の暗さにたちむかう一歴史家の悲壮なまでの思想的緊迫力がそこにつらぬいているためであろう。

新たなパラダイムが叫ばれ、きらびやかな「社会史」が歴史学の主流を形づくるかのごとき現在、ともすれば「戦後歴史学」なるものの根もとの部分は忘れさられ、ために期待された学の革新よりも、かえって混乱の相をすらみせはじめているのではなからうか。

石母田氏がうちたてた領主制理論は、戦後再出発した中世史研究の有力な指針となった反面、いっぽうでは「極端にいえば一つの公理」にまでなり、若い研究者の頭を拘束したのも事実である。けれどもこれとの真摯な格闘のなかからのみ、中世史の新

たな飛躍がうまれたことはいささかも忘れるべきではない。石母田氏が本書の初版序で、歴史家の必須の精神である大胆さを学問上の単なる冒険から救うものとして、資料の導くところにしたがって事物の連関を忠実にたどってゆく「対象への沈潜」と、従来学問上の達成に対する「尊敬」以外にないことを述べている。この指摘にある先学への「尊敬」は、石母田氏自身の達成点にたいして、われわれが堅持しなければならぬ大切な姿勢でもあるのである。

日本における封建化の主要な途が、「荘園制」を基軸に非「領主制」的な形態をとって展開するものと結論づけた黒田俊雄氏はこの結論に到達するまでの諸論文を「所詮『領主制』理論からいかに学びまたいかにそれを克服するかの辛苦のあとに尽きる」ものであったことを述べている。⁽³⁾

「いかに学びまたいかにそれを克服するか」という石母田氏の業績を対象化する作業は、今日もなお、否、今日なればこそ、緊要なる課題であると思うのである。道理の感覚がおとろえ、不道徳が跳梁するような不安な時代にさしかかった現在、石母田氏の業績は、そこにある哲学・思想までふみ込む全体として学ぶべき対象となりつつあるのではなからうか。

近時、『中世的世界の形成』は岩波文庫の一冊となった。⁽⁴⁾この文庫を読むにあたっていまさらながら、右のごとき想いを深くし

たわけである。

『中世的世界の形成』のポリリュームは原稿用紙に換算して七〇〇枚余におよぶという。⁽⁵⁾石母田氏はこの叙述のなかで何を明らかにしようとしたのであろうか。ここでは不用意に「領主制」なるシェーマを先見的に考えるのではなく、まずは石母田氏の思考の脈絡をたどりながら、主要となる論点をつかみ出し、その理論的特質をその後の中世史研究の動向と照しあわせながら観察することにつとめたい。

本書の構成はつぎのごとくである。

第一章 藤原実遠

第一節 所領の成立

第二節 経営と没落

第三節 領主と東大寺

第二章 東大寺

第一節 黒田庄の成立

第二節 古代的論理

第三節 二つの法

第三章 源俊方

第一節 家系

第二節 武士団の成立

第三節 中世の敗北

第四章 黒田悪党

第一節 古代の再建

第二節 中世的世界

第三節 終末

第一章で石母田氏は、伊賀国の大領主藤原実遠を、彼が「平安時代という農村の歴史において変動の多かった時代を体現し」（二一ページ）たものと考え、この地方の歴史は「この長者の叙述から始めなければならない」（二一ページ）とする。実遠の所領構造の観察は平安期的大土地所有の形成とその経営様式が固有する矛盾の究明へとむかい、さらにかれのあとにくる東大寺の支配を見通すことになる。

a 石母田氏は実遠の所領分析から筆を起す。石母田氏の所見によれば平安時代の大領主がもつ中心的所領はいかなる構造をもっていたのであろうか。

実遠の所領は二十八箇所にのぼり、伊賀郡十六処、阿拝郡六処、名張郡五処、山田郡一処というように伊賀国四郡にわたって広く分布していた。かれの父大蔵大夫清廉の代には山城・大和・伊

賀にまたがる大所領を構成していた。石母田氏はかような歴大な所領がA入耕地のみからなる所領Vと、B入耕地ならびにそれをめぐる広い荒蕪地原野を含み込む所領Vの二類型に区分されることを指摘したうえで、実遠の本拠地である南伊賀名張地方がB型の所領形態をとって存在していたことを明らかにした。そしてB型の所領が律令国家の禁制する「民要地」を侵害することによって形成されたものではあるものの、根本的には律令体制下における人民の私的所有権そのものの低劣な地位に野地占定、「民要地」侵害の根拠を求めたのである。

平安時代の大土地所有の成立の基底的根拠が人民の私的所有権の未発達にあるとしたことは、村落結合の弱さを示すものであり、著者はこのことの論証にかなりの紙幅をとっている。すなわち奈良時代のわが国においては、他民族において通常村落の果たすべき機能が戸によって果たされていたこと、「百姓治田」に対する村落の側からの共同体的制約はなく、村落が一箇の法的主体として完成していなかったことなどをあげ、村落の規制のないままに「村落民の個別的な占有と開墾による入会地の分割私有が進行すれば、そこに村落Ⅱ共同体としての外部の力に対する入会地の防衛は著しくその力を減ぜざるを得」（三八ページ）ず、それゆえ名張郡においても「村落の土地に対する権利」はせいぜい国衙の進止に属する刀禰によってしか主張しえなかったと結論づ

けるのである。

入会地Ⅱ荒蕪地原野の上からの囲い込みをB型所領という形をとって可能としたのは、独立的な土地所有者として土豪の侵攻に對立し得るほどの村落の基礎をもたぬ南伊賀名張地方の後進性に外ならなかったとするわけである。

こうした独立的な農民の未成熟な状態に對応する所領の經營が田屋を設けて、郡内の百姓を従者として駆使する直接的經營であった。著者は、この直轄地における徭役労働の収奪Ⅱ直接的經營を古代家族の經營様式の必然的發展であると考へる。実遠の時代、この私営田經營様式は深刻な矛盾のうえに存在し展開していた。矛盾を内蔵する私営田の構造について著者の所論を要約列挙するとつぎのごとくなる。

一つは古代家族の構造の變化。古代家族の經營は保有地を基礎とする奴婢・家人の經營の成長と寄口の獨立化によって、隸属民は主人の經營とは獨立に自己の保有地を經營する「百姓」に転化する。このため「領主は百姓の經營地と私業を彼らの生活資料を得るに必要な限度にこれを圧迫しようとし、百姓は自己の保有地經營の集約化拡大に努めるのであって、兩者の相反したかかる努力の對立が、平安時代の私営田の歴史を貫」(五四ページ)くことになるのである。

二つには、私営田を存続拡大しようとする領主の傾向が新しい

労働力を強く欲求せしめたこと。家人奴婢が自己の保有地と私業をもって獨立の經營をもつようになると、「彼らを『頭を尽して驅使』しえない事情が強くなるから、そこに發生して来る領主制の矛盾が、領主をして没落しつつあった班田農民を労働力として吸収せしめる」(五五ページ)のである。こうした欲求は新たな労働力としての對象が獨立性の強い公民系統の百姓なるゆえに經營の内部にある古代家族的なものを揚棄し、家人・奴婢的なものが百姓に転形してはじめて実現可能となる。ところが領主は經營内部の百姓を家人・奴婢におしとどめ、直接經營のための労働力として隸属せしめようとするから、所領を拡大し公民的なものを組織する段階には、かえってこの矛盾は公民系百姓との間にまで拡大せざるをえないことになる。

かような矛盾を包蔵せる私営田の存在構造のゆえに、領主実遠は、「当国の猛者」とならざるを得ず、その經營の維持は、かれ個人の力量と才幹とに負わねばならなかったとするのである。

実遠の没落は余りに急であった。あえて加地子領主への途をとらず「古代領主の伝統につながら最後の領主として没落した」(六三ページ)のである。実遠がのこした讓狀の末文に記した「然るに年老乱の間、或いは荒蕪、或は牢籠」という言葉について、著者が「平凡で短いが、当国の猛者として鋭意經營に努めた先祖相伝の所領が荒蕪してゆくのを見る傲岸な老人の晩年の感懐がそこ

にこめられているように思う」(六三ページ)と述べているのは「古代領主の伝統につながる最後の領主」にたいする著者のイメージをみごとに表現したものである。

b

東大寺は、藤原実遠の領主制の没落を促進し、かれの有つ領主権を奪い、とることによってこの地方の支配者としてたち現われる。石母田氏はこの動きを注目し、所領の寄進を通じて実遠が領主権のなを喪い、東大寺がいかなる支配権を獲得したかを解明する。

そのさい長久二年(一〇四一)にみられた実遠による名張郡周智郷田島四〇町の東大寺別当深観への売進(実質的寄進)を分析の対象とし、そこで明らかにした実遠の寄進の特殊歴史的な意味についての所論は一つの創見と云うべきである。

一般に所領寄進は、東寺領肥後国鹿子木荘の場合に典型的にみられるごとく、領主権の主要な部分(所務・雑務・検断……:対農民直接支配権)が寄進者に留保され、被寄進者の受けとる領主権の内実が、所領からの所当の一部を収取する権利にすぎないのを通則とする。著者はこうした所領寄進にみられる特質的現象を、「形式的には被寄進者が領主であるにもかかわらず、内容的には寄進者が領主権の保持者であるという形式と内容の不一致」(六九ページ)にあるとする。

そして、かような特質的現象が平安時代中期以降地方に成長し

た在地領主の歴史における主導的地位を掌握する過程においてみられるのであるから、没落する私営田領主実遠の場合には、寄進の内容が右のごとき現象とはなりえないとするのである。反対に実遠の場合、かれの領主権の後継者藤原保房が加地子を取る権限しか保持していなかったことを考えれば、被寄進者たる東大寺の側に領主権の主要なる部分が移動しており、実遠の側ではここで所領百姓に対する直接的支配権は失なわれたという結論に導かれるのである。

かくして著者は、東大寺が住民にたいする領主権を掌握したと見るわけである。これにいたるまでの東大寺の動きは、実遠の所領のなかに黒田荘民が自作するという形態をとって実遠所領に結びつき、実遠の古い経営形態をもってしては組織しえない住民を東大寺の側が獲得する過程にはかならなかった。

石母田氏は藤原実遠の所領寄進をめぐる事態の評価をつぎのようにするのである。

ここでは一般所領寄進の如く寄進者の領主制がその基礎になっているのではなく、反対に解体しようとしている領主制の上に東大寺の領主権は構築されて来るのである。(中略)東大寺の進出が実遠の没落の時期に開始されていることに注意すべきで東大寺はかかる在地領主制の廃墟の上のみ自己の欲する構造と形態の所領を形成すべき可能な条件を見出すこ

とが出来た(七五ページ)。

東大寺の住民に対する「進止」権は、住民に対する直接的絶對的支配であるから、進止権を有しうる主体はただ一つでなければならぬ。

こうした著者による東大寺支配の絶對化への認識の延長線上に、保房の三人の子実誓・中子、保源らが受け継いだ実遠の領主制の残存物Ⅱ私領主権をあいっいで東大寺が接収したことの意味をみるのである。「東大寺は、土地所有権、住民に対する進止権の外に加地子取得権もここで獲得した」(七七ページ)のであり長承三年(一一三四)七月に作成された矢川・中村・夏見の公畠取帳は、東大寺と実遠との領主権のための闘争が東大寺の勝利のうち終結したことを物語るものとした。

二

第二章で石母田氏は、柚工Ⅱ寺奴の土地保有者としての成長とかれらの公田へ進出する動きに着目した東大寺が、いかなる論理の貫徹をもって名張郡のほぼ全域にわたる大荘園を成立せしめたのかを説明する。

a

東大寺別当光智が板蠅柚の拡張をはかって東北方にある薦生牧を包含しようとしたのは天曆頃と推定される。このころの東大寺

の所有せる三、四六三町六段一五〇歩という広大な田地は、その内容にいたっては見開田僅かに二一二町五段一二五歩にすぎないという状態にあり、伝統的な荘園が数多く散在していた大和においては、藤原氏の台頭にともなう絶えまない興福寺の圧迫と侵攻にさらされ、東大寺の経済的基礎はその極限にまで凋落していった。こうした辺境と中央にみえる衰弊と圧迫の形勢において、畿内周辺が東大寺所領再建運動の中心として浮びあがってきたのであって、光智の板蠅柚拡張工作はかような時代状況から発したのであった。

光智のこの拡張策は、在地刀禰の抵抗によってその不当性が曝露され挫折する。これ以後の東大寺は「不法な土地占拠ではなくして、私領主の所有する正しい証券の獲得と開発形式による国衙への合法的態度を守りながら」「在地農民との正常な結合の方向へ向うことになる」(八六ページ)。

こうした黒田荘成立の前史においてもっとも基礎的事件は長元六年(一〇三三)の板蠅柚の荘園化であった。黒田荘の歴史と発展の構造は二五町余の小さな本免田黒田本荘の理解から出発するわけである。

板蠅柚の歴史は百人近くの柚工の入植からはじまる。かれらは当初より自己の食糧に宛てるべき零細な田畠を保有していたのであって、本免田二五町余はもとかかる柚工の生活の基礎であ

った。この点で石母田氏は、柚工が自己の食糧を自給するところの独立の土地経営者であり、その生活形式が家族的であることを指摘するいっぽう、かれらのこうした性格が東大寺との関係においては問題にはならず、あくまでも寺家に材木を貢進する奴隷の集団として現われることを強調する。

しかし奴隷としての柚工の、保有地と家族および村落生活が旺盛な生活力を生みだし、やがて自己の保有地の経営において単に自己の家族の生活資料のみならず、それを超過する剰余生産物をもその保有地から生産しうるようになる、柚工の所有地は「所領」として編成されるようになる。すなわち柚工の労働生産の増大が柚から荘園の転化と、名の成立をもたらすのである。かくして特殊な職業に従事する柚工の集団は、厳密な意味での農民に成長を上げて公民との区別をなくしたのである。

b

板蠅柚が荘園化する基礎過程として展開された柚工の農民的成長は、同時に東大寺が公田の村落を支配する基底的条件でもあった。そのさいに板蠅柚から転化した黒田本荘の本免田たる性格は、黒田荘の歴史が出作地（公田）の歴史へ移行する過程で無意味になるのではなく、かえって新しい意義をもってくる。すなわち本免田二五町余の荘園から二〇〇町近い公田を侵略する過程において鋭く対立した国衙との関係で、本荘の本免田たるの性格は意味

をもってくるのである。

黒田荘の歴史は国衙との抗争に満たされており、これに勝利することによって、名張郡域をおおう大荘園は形成される。勝利のための東大寺の努力と執念がここで観察の対象になるのである。

何人も疑い得ない明白な公田を寺領とするために、東大寺はあらゆる不法と奸策と偽造を行い、国衙と中央政府の間隙や国司交替期をうかがっては策謀し、法廷の対決においては白を黒という式のたぐいのない雄弁と狡猾さを示した。……東大寺は個々の事実を捏造し前後矛盾した事柄を主張することには些かの躊躇も示さなかった（一〇六ページ）。

この叙述には、二世紀にわたる国衙との抗争にみせた東大寺のすさまじいまでのパトスと迫力がにじみでている。しかし国衙との抗争をめぐる観察で著者が発見したのは、単なる不法と捏造の事実ではなく、そのなかに一貫せる東大寺の独自の論理であった。

これが「寺奴の論理」といわれるものである。東大寺にとって荘民との関係は直接的隷層関係が絶対的第一義的であり、荘民とは寺奴または一円進止の土民でなければならなかった。この大前提にたてば、その保有する出作地での家地・畠地は東大寺の単一所有に帰するはずである。このことが合法的に承認されるならば畠地と田地とは寺奴の保有地たる点で本質的には如何なる差異もな

く、出作田全部が寺家の単一の所有であるという結論までには、論理的には、何の飛躍も必要ないというのである。これを要約すると、

寺奴に対する直接的人身的所有を基礎として、家地畠地に対する独占的支配を媒介とし、獲得の経路如何を問わず庄民のすべての土地を寺家の所有であるという結論にいたって完了する論理（二二八ページ）である。

「寺奴の論理」は律令法につながる古代的法理であるのに対し、公田を支配下におく国衙の法理は慣習法にもとづく領地の法理（居住地決定主義）であった。二つの法理の激突に勝利し東大寺は三〇〇町にのぼる公田を寺領化するのに成功するのである。

ところで国衙の法理についての短いが、その後の研究に大きな影響を与えたつぎの指摘は紹介しておく必要があるだろう。すなわち「平安時代の国衙領には律令制に基礎をおきながらそれを修正しつつあった特殊な慣習法の体系が形成されつつあった」（二九二ページ）ということである。

もともと律令法は調庸が直接人身に賦課されるごとく、その根本の精神は居住地に拘わらざる個別的人身支配にあった。しかしこの時代になると慣習法としての居住地決定主義が国衙法の一要素となっていたという。

かような慣習法の成立の基礎は、国衙の主体在庁官人が在地領

主で、国衙領はかれらの共同の私領になっていたことに求められるというのである。かれらは国衙領に居住し、その土地を耕作する農民に限り、国役を負担する義務をもつという現実的な慣習をつくりあげた。

国衙法にまつわる右の理解は、その後の中世史研究に多様な視角を提供するものであった。ことに在地領主の領域的支配体制がいかなる経路をたどって確立するかといった問題の設定とその究明は「公権」・「在家」・「負名」・「中世的郷」・「別名」などの分析を通してなされたのであるが、これらの視角のほとんどすべてが、石母田氏の右理解から発したものと⁽⁶⁾いって過言ではないのである。

東大寺の法についての石母田氏の理解は、東大寺と黒田荘との歴史的な関係を明確にするうえでもっとも核心的な部分に位置づけられている。本書における東大寺が荘民にとっていかなる存在であったかを、おそらく法についての叙述が一番はつきりと表わしているであろう。

東大寺の法の特質は「徹底的に論理に基づく」ところにあり、かような法の論理的性格はその避けえない一面として「抽象的であり形式的で」あった（一五〇ページ）。

東大寺は現実の社会関係と生活連関を無視し、それらの上のみずからの原理をかぶせ、そこから現実にたいして法を適用しよう

とする態度をつらぬいた。それは「法によって事物の連関を断ち切ろうとする」(一五二ページ)のものであった。

東大寺は「寺奴」にかわるべき「作人」なる身分を作ったが、この身分も東大寺の法の世界においては現実には民間に成長していた複雑な社会関係の分化(Ⅱ荘内の階級秩序の形成)を何ら表現するものではなかった。東大寺のもので荘内に生起する領主・地主も名主・下作人も一律に「作人」と固定され、表現されたところに、「事物の連関を断ち切(る)」東大寺の法の抽象的であり形式的である性格がよくあらわれている。

石母田氏はいう。

寺奴Ⅱ袖工が村落社会を形成し、村落の内部から地主、領主を発生せしめて、新しい村落秩序と領主制が在地の生活の原理となった段階においてもなおかかる形式的抽象的な法理をもってそれを律しようとした。(一五一ページ)。

またこうも述べている。

東大寺の法思想は立法者たる自己の意志を絶対的なものとして貫徹しようとするものであり、(中略)東大寺と庄民の間には生きて、生活的な連関はほとんど存在しない、(中略)庄民が自己自身の法を形成しそれによって生活を秩序立てるにいたった時代においてもなお絶対的なものとして貫徹しようとする。それは生きて、生活の血のおそらく、一滴さえも通わな

い、論理と抽象の世界である(一五三ページ)(傍点―筆者)。

土地の風習・慣行・歴史から切り離され、「生きて生活した人間的な連関」をもつことなく、具体的特殊な在地性から解きほなたれているという意味では、かかる東大寺の法は都市的なものとも性格づけられるという。以上で石母田氏が考える東大寺の法が在地との関係でいかなる性格と特質をもっていたのかは大体明らかになったものと思う。ここでは、東大寺の法が在地の新秩序から無関係に自己をつらぬこうとする存在であり、抽象と形式の世界のなかでのみ生命をもつ都市的な法であったことを確認しておくべきよい。

それでは荘民のなかから発生した現実の新しい生活秩序はいかなる法のすがたをとるか。荘民のなかに生まれる法についての石母田氏の見解は「地主、領主の成長がその法の形成の基礎過程をなす」(一五六ページ)というところからも明らかのように、在地領主制の運動と緊密に結びついているところにその特徴がある。すなわち、在地の法はこの場合、「領主の法」として現われるわけである。「領主の法」は石母田氏の構想のなかでは「東大寺の法」と一対をなすものであった。「領主の法」の特質は以下のようなものであった。

① 地方的農村的である。……抽象的形式的な古代法ではなくして、在地民の生活と階級関係の多様性を表現する具体的

な法の世界であり、長い伝統と慣習とに支持され、地方民の
共同の法意識として生きている法である（一五七ページ）。

② 厳しい規範を伴う。……東大寺の法の如く上から制定されるのではなく、在地の階級分化そのものが新しくつくり出した法であり、したがってそれは領主的支配のための法であると同時に、その生きた規範である（一五七ページ）。

領主は危急のさいには農民の保護や救済につとめるし、村落の共同生活の中心である鎮守や寺の維持のために、その他種々の日常の世話のために、農民に対して広汎な義務を負ったのであり、領主の法理は具体的特殊な集団生活から離れない性質をもっていた。

こうして石母田氏は抽象的・形式的な都市の法にむかって具体的特殊な農村の法を対置するのである。かくして「板蠅杣から黒田庄への発展は、かくの如く二つの異った法の世界を形成して行った」（一五七ページ）というわけである。

二つの法によって代表された東大寺と荘民の關係は、兩者の法の基盤となる「古代的権力としての寺家」と「中世的な力としての在地領主」の対立であり、黒田庄の歴史を叙述する石母田氏は、まさにこの対立を軸とする在地領主制の発展の觀察に全力を投入するのである。こうして氏は中世を一身に体现する在地領主

源俊方に目を向ける。

三

第三章で石母田氏は、古代権力としての東大寺に直接抗争して敗北した源俊方とその武士団に注目する。古代的世界から中世的世界へと社会を变革する唯一の運動力が在地領主制というウクラードであって、その政治的形態が武士団であると考える以上、この運動力の本体に肉迫してのみ日本封建制の形成過程とその歴史の意味が解きあかされると考えるのは当然であった。

a

源俊方一族の歴史は数代まえの近国からはじまる。近国一統の代々変わらない居所が築瀬村であったのは、近国の祖先丈部為延なるものが同村の開発にあたり、ためにここが近国一統の根本所領となっていたことによる。そして近国は根本所領たる築瀬村を拠点とし、開発領主的な一族を背景としてその棟梁的地位にあっていたのである。

近国は名張一郡の郡司になることによって、村の開発領主から一郡にわたる権勢者になり上がった。近国の拠点築瀬村は名張郡公領のなかでもっとも東大寺の影響力の稀薄な地域であり、国衙の牙城であった関係もあって、同村の土豪近国を郡司に補任することは、国衙の対東大寺の政策上もっとも必要にして妥当な処

置であった。大社寺王臣家の侵攻による国衙の危機が、近国の郡司就任をもたらし、政治的権威をたかめることになった。

かかる政治的権威と声望をうけつぎ、東大寺との最後の抗争を展開し敗北したのが三代目の俊方であった。東大寺は一円寺領化のための障碍となっていた築瀬保を武力占領し、ここに蟠踞せる俊方の殺害をはかった。これを機に俊方とその一族は公然たる武力抗争に入る。しかし、東大寺の一撃のもとにあえなく敗北していった。俊方の武力抗争の敗北によって近国以来のこの一族の歴史は終結する。それにとりなり国衙の東大寺への圧力も急速に減退の兆を示し、東大寺の名張郡における勝利はほぼ完成した。以上が源俊方をめぐる在地情勢の沿革である。

b

それでは、東大寺との武力抗争を展開しえた近国一統の社会的存在構造はいかなる特質をもつもので、そこにどのような歴史的意味が見出せるか。かような問題関心から石母田氏は中世武士団の分析に入っていくのである。

そこでまず注目されるのが、近国一統が四代にわたって一貫してその居住地であった築瀬村と切離し得ない結合をもっていたことである。そこには実遠のごとき所領の厩大さはないものの「村落の生活と伝統の中に成長してきたものの根強い在地性を見るこ

とができる」(一七二ページ)。

つぎに注目されるのが彼らの武士的な性格である。俊方が安元元年(一一七五)黒田荘の顛倒をこころみて本荘に攻めこんださい、かれは三人の子息と二、三十人の随兵、さらに十方の盜賊および殺害の輩をひきつれていた。武士的性格とは背後に社会集団を随伴しているところにあるという。

ここで石母田氏は武士の概念を明確にする。

歴史上「武士」と呼ぶところのものは単なる職業的身分としての「侍」のみを意味するのではなく、また自ら武装し私兵を蓄えている領主や名主のみを指すのではない。……

勝義における武士の概念のなかには、通常武士のもつ公的性格、武士が政治的に外部に代表する社会集団の存在を暗黙のうちに含めているのである。それがあつた場合には所領

といわれ、或る場合には同族団や村落といわれる……(一七

三―一七四ページ)

俊方が武士的であるというのは、かれが「所領と一族とを含み彼の故地でありかつ全体としてその支配に属していた築瀬保という村落」(一七四ページ)を背後に有っていたからである。かれが東大寺から防御しようとしたのは、かれの背後にもつ築瀬の領主権であった。ここで石母田氏の論旨のうえで大切なのは、俊方が築瀬村という共同集団をその一員として、あるいは代表として護ろうとしたのではないということである。

俊方は「無数の糸によって築瀬村に繋っていた」（一七五ページ）存在であり、一瞬たりといえども「土地を離れては考えることさえ出来ない」（一七六ページ）深い在地性をもちながら、なおかつ在地Ⅱ村落を超えた階級にみずから分離させた存在であった。かれは「村落の政治的代表者ではなくして村落の政治的支配者たるが故に村落を防衛するのが死活の問題であった」（一七五ページ）のであり、まさにかれが全軍事力を動員して東大寺から護ろうとしたのは村落を超え敵対する領主権に外ならなかったのである。

この領主権を基礎づける領主制の根本構造は、領主と所領住民の対立が明確化されたところにあるとされる。だからこの支配権を維持・存続・拡大するために領主層は新しい統治の方式と組織の創造に向わざるを得ず、そのためかれらの族的結合は、一箇の武装した戦闘組織のすがたをとるのである。

俊方のもつ武士の性格とは大体いじょうのように説明されるであらう。これをさらに要約するなら、武士の性格の領主とは、「所領」の基本的形式、すなわち単なる排地的土地の独占ではなく、内部に自営農民の占有と対立するところに特質をもつ土地所有の形式に基礎をおく存在であり、それゆえに戦闘的組織は武士団としての形態をとる在地領主であると言えよう。

ところで俊方の在地領主としての歴史的位置づけが、名主その

他の一般農民との比較においてなされたさい、つぎのように記していることは注意しておく必要がある。

名主は単に村落の構成員たるにすぎず、その内部から独立的な領主を形成する母体となり得ても、それ自身政治的意義をもち得なかった（一七五ページ）

俊方がこの地方の政治過程に入り得たのは彼がかかる名主的階層から分離し、したがって村落の外部に立つ官人及び領主になったからである。名主が成立することの客観的歴史の意義と、それが現実の歴史過程において果たした政治的意義とは区別して考えねばならないのであって、……名主はさしたる歴史の意義をもち得なかった（一七六ページ）

（その他、一八五〜一八六ページ参照）。

石母田氏によれば、あくまで名主は村落の構成員に過ぎず、この地方の政治過程に入りえた、つまり政治的意義をもちえた人間は村落の外部に立つ在地領主であった。したがって、この場合政治史の対象は在地領主に限られるべきで、直接的には名主「百姓」を視野に入れることはないのである。

石母田氏のかような理解は、その後の中世史の研究の方向において、かず多くの視角から批判し克服すべき対象とされた。おそらく石母田史学の理論的核心部は、ここに⁽⁷⁾あるのであって、この部分の厳密実証的な批判は石母田氏のつくり上げた枠組みの全体

にせまるまでの意味をもっていた。

戦後の歴史学は社会経済史的側面での進歩がいちじるしく、「田堵富豪層」「旧名体制」「荘家共同体」「政治的共同組織」「座的構造」「散田作人層」といった諸問題を究明することによって、中世成立期の農民と村落の存在ならびに構造の実態がきわめて鮮明になってきた。その結果、荘園制のもつ社会構成からみた位置づけが、従来のように旧体制（＝古代権力体制）といった認識のもとに、中世封建制成立の過程のなかで克服されるべき対象であると位置づけるわけにはいかなかったのである。

かくして、自立度の高い名主たちは早くから自分たちの土地を名田として保有し、このことを基盤として村落的共同体をつくりだしていたのではなかったか。ヨコの結合をはかる農民の政治的力量（畿内の）在地武士の領主化を阻んだのであって、かかる中世封建社会の骨組みは荘園制にこそあったのではなかったか。そして、領主制という運動基軸は、農民結合のまえについた副次的なものでしかなかったのではないか、等といった学説が出るにおよんだ。⁽⁸⁾

c 南伊賀では全体として在地武士団の勢力は著しく微弱で、かつ統一を欠いていた。しかし平安末期の源平の争乱にさいし、黒田荘の武士が二人源平争乱の歴史的事件に参加したことは、南伊賀

の孤立的世界が克服されて北伊賀へ、そして中央への道が開かれたという点では画期的であった。

一人は紀七景時。かれは黒田新荘の下司であった。平氏西走后、北伊賀の平氏の残党とともに謀叛を企て陣没した。もう一人は、平保行。かれはこの争乱で源氏のために忠節をつくし、所領安堵の下文を將軍より受けて御家人に列した。この二人がそれぞれ平氏と源氏に分れてむすびついていたごとく、南伊賀の武士は統一を欠いていた。

しかしかれらの行動は、黒田荘という〈古代の法〉がつらぬくところをうちやぶり武門の棟梁と封建的関係をとりむすんだことは、やはり注意すべきことであつた。つまり、東大寺の古代の法のもとでは、荘民はあくまで寺家進止の作人でなければならず、かれらは私領をもちえぬのと同じく、外部と主従関係を結ぶことが許されるはずがなかった。この禁制をふみやぶって、黒田荘の武士は合戦に参加し、政治的冒険へとわが身を投じ、御家人へ列していったのである。

ここでの南伊賀の武士の「抑圧せられていた世界」(二四二ページ)からの呼応は、東大寺の報復をうける。景時戦死後その所領は、東大寺のものとなされ、康行の子康兼は所領没収されたうえ、荘内を追放された。従来「日本歴史の圏外にあつた農村武士が、一族とともに各地の森林や谷間から呼応し」まさに「中世の開始

を語る歴史的壯観」が展開されはじめたとき(二四二ページ)、この在地の動揺はそれに対応する上からの政治がなかったために、「無意味な一挿話」(二五四ページ)と化してしまった。

情勢は封建領主階級にとって決定的に有利となっており、そのうえにたつ將軍頼朝の果断さえあれば、領主階級の全国的な勝利が展望されたのである。しかしかれはこの決定的瞬間において、動揺をし、躊躇し、退脚したのである。「源平争乱を契機として南部伊賀に起った新しい体制へのすべての期待は、頼朝の保守的退嬰的政治のために裏切られた」のであり、東大寺の「勝利は今や必至のものとなり……暗黒な裁判と政治の支配はもはや避け得ないものとなった」(二五七ページ)のである。

実遠の没落、源俊方の敗北、そして頼朝の保守的政治のために中世(Ⅱ封建革命)は三度敗北した。

四

第四章で石母田氏は、黒田荘の直接統治がいかなる政治的形態をとって編み出され、その直接的統治にたいする荘民の反抗が何故に悪党というかたちでしか展開しえなかったのかについて論じる。この章でとりあつかう悪党の把握と評価は、石母田史学の理論的枠組みから導き出されている。だから中世悪党の研究の深化は逆に、石母田氏の理論的枠組みを大きく批判し総括しうる切り

口の部分となった。

a

黒田荘の直接統治は東大寺による預所の設置によって実現された。預所は「庄園統治の危機の産物」であり、「危機に対する統治者の本能の発現」ともいうべきものであった(二七七ページ)。ではこの「危機」とはなにか。本来東大寺の支配を成立せしめ安固ならしめる客観的根拠は、荘民が「東大寺の権威を絶対的なものとしてそれに依存帰服している」(二六三ページ)精神的状態にることである。しかしたえまない荘民の階級分化と領主制の発展は、荘民をして「東大寺の支配を唯一絶対なものと考えず」(二七一ページ)に自己の都合によっては他の勢力と結ぶことすらするほど政治的に成長させることになる。このことが真実の危機であったのである。

荘民の意識の進歩は、たとえば在地の慣例や法に通じ、解文の一つも書ける下級役人(納所書生)の縁者が柚工とともに荘民となってきたことなどにもよるものであって、こうした径路から農民が文字を使用するようになるとかれらの意識は急速に開明されたのである。こうなると東大寺は伝統的な権威のみに頼る従来の統治組織(政所と荘官組織)は役に立たなくなり、何らかの新しい強制手段を見出さねばならなかった。これが預所制であるという。

最初に預所に補任された東大寺威儀師覚仁は武装した悪僧を率いて、直接に在地荘民のまえに立った。かくして東大寺の直接的な武装統治は荘民の悪党化をまねき、ついにいずれの側にとっても勝利の望みのない闘争のために「相互に精力を消磨し、疲労困憊」(二九八ページ)をふかめる昏迷の時代へと入っていくのである。

ところでそれまで従順ですらあった黒田荘民のうえに武装統治をもつてのぞんだ覚仁について、石母田氏がつぎのように述べているのは、歴史的位づけはともかく、中世成立期寺院権力が生み出した一箇の激越な個性の持主を描出している点でみごとである。

彼は伝統的に問注所における雄弁家の多い東大寺僧侶中でも、才幹ある弁論家の一人であるとともに、……庄園統治が……在地における行動によってのみ解決されることを見抜いていた政治家であった。(中略)雄弁と政治的才幹、強力と仮借しない統治によって、東大寺庄園の危機の解決に大きな寄与をなした悪僧覚仁こそ、この時代の東大寺の精神の体現者であり、奈良時代以来の庄園経営の正統な伝統を汲むものであった(二七八ページ)。

b

直接的武装統治の形式は法的、制度的措置であるゆえ、その

みでは荘民を把握し得るものではない。したがって法的、制度的措置が機能するためには、新たに荘民を寺家に繋ぎとめる紐帯が必要であるとする。ここに神人が注目されることになるのである。

この神人の本質は、「大仏の奴婢」「雑役免の作人」といった荘民の古代的依存觀念にもとづいて東大寺が組織したものであって、精神的にも現実的にも寺家から離反しようとする荘民を「古代的原则によって組織し替えようとしたところの人的身分的關係」(二九九ページ)であったとする。神領内での神社と百姓の対立が神人と荘民との觀念上の相克となるとき、「古い牧歌的な神領Ⅱ神人Ⅱ神民の神領」は庄園領主の政治の対象となる。このとき「神人は神々の権威に寄生し、百姓を抑える墮落した執達吏に変化して来る」(三〇四ページ)。

「かれらは用もないのに群を組んで庄家に來り、美食を要求し、種々の名目で米錢を徴収し、降魔の相を現わして百姓を調伏せんとし、有力者に対しては追蹤怯懦、百姓に対しては猛悪なる人間であった」(三八七ページ)。神人のかかる腐敗ほど東大寺の政治の腐敗をあらさまに示すものはない。このところで石母田氏が「政治の頹廢以上の道德の頹廢を端的に表現するものがありうるであらうか」と問いかけ、

統治者の道德が人民の自身の道德として転化されないとすれば、人間の歴史はより単純に、より苦惱少なきものであった

であろう。黒田庄民の負担したものは、所当と課役のみではない。庄民は道徳的頹廢をも一部分東大寺と分かち合かねばならなかった(三八八ページ)。

と述べる。そしてこの頹廢の分有は庄民が黄衣の執達吏、貪欲な刑の執行者とされたことのみをいうのではない。

平安時代以来村落生活のなから除々に形成されて来た新しい秩序が否定され、在地民は納得の行かない南都の悪僧と神人の暴力が支配する世界の暗さが長い時代にわたって覆っている時には、それはその世界の住人の心をも蝕んで行かずに

はおかないであろう(三八八と三八九ページ)。

こうして本来「健全」なはずの庄民にたいして及ぼした東大寺の頹廢的、不道徳的感化がいかに深刻な害悪となって、歴史を出口のない袋小路へ導いていったかを黒田悪党の敗北から論じるのである。

c

悪党の意義は、東大寺の統治形態の有つ矛盾から発した政治的帰結でありながら、東大寺の統治に歴史的決算を与えるものではなかった。石母田氏によれば、「庄民がもはや寺家の統治を欲しなくなったことを明確に表示すると同時に、東大寺自体に庄民をもちや統治しえないという事実を意識せしめたこと」(三九三ページ)あった。そうじて東大寺支配の解体的作用として悪党の

意義をみるわけである。

しかし、悪党はみずからの悪党たる性格を揚棄しないかぎり、東大寺の統治に歴史的決算を与え、これにかわる在地の新たな秩序と支配を確立することはできなかった。結局、悪党は無意味な殺害と、目標のない抗争、頹廢的山賊行為によって黒田荘の内部に混乱と無秩序をもちきたし、東大寺の支配力を弱めはしたものの、「悪党はそれ自体としては無秩序のなから何物も学ぶことも成長することも出来ず、庄民のために歴史的なものは何も遺すことは出来なかったのである」(三九八ページ)。

こうした悪党の限界は、「多年外部の世界から遮断せられて東大寺の支配に慣らされた」(四〇三ページ)黒田荘民の孤立性ともつながるもので、本質的には同一の性質に根ざすものであった。かれらは、地域の連合はなしえても、ついに外部守護勢力に封建的勢力に身をゆだねることができなかった。在地の動乱が見出そうとした歴史的結末としての安定が守護領の確立にあったにもかかわらず、かれらはいかにそこへの参画をなしえなかった。

そして永享十一年(一四三九)の黒田荘民の起請文にみるごとく、庄民は守護の課役を免れたことを感謝し、寺門の御恩を子々孫々忘るべからざることを誓約したのであった。石母田氏はい

板蠅柚の寺奴の血と意識が、中世の地侍の中から完全に消え

去っていたとは誰もいい切ることは出来ない。子々孫々同一土地において同一支配者を載き、同一の神仏を礼拝する場合、数世紀は数十年に等しいのである。地侍が悪党であることをやめ、庄民がみずからを寺家進止の土民であると考えることをやめない限り、古代は何度でも復活する（四一七ページ）。

こうして暗鬱なる古代の世界は、外部からの征服のない限り存続しなければならなかった。石母田氏はつぎのように述べて本書を終えねばならなかった。

われわれはもはや蹉跌と敗北の歴史を閉じねばならない。戸外では中世はすでに終り、西国には西欧の商業資本が訪れてきたのである（四一七ページ）。

五

石母田氏が本書において明かにし、また読者に訴えようとしたことがらは二点あると思う。一つは①「歴史的に与えられた社会的機能をすでに果し終えた一箇の統治形態」（二九〇ページ）がなおも存続しようとし、また存続しうる世界とは、いったいいかなる人間の社会であるのか、このことを解き明かすことであり、もう一つは②古代から中世への変革の推進力が領主階級の成立と発展にのみあることを説明することであった。

①と②の問題関心を正しく位置づけるためには、なによりも「本書は自分にとってあらゆる意味で戦争時代のものである」（初版跋）という石母田氏自身の言葉のもつ意味から出発する必要があるだろう。

a

①については、第四章「黒田悪党」のところでそのおもな叙述がなされている。その論旨はすでに述べた通りである。黒田荘の歴史に彫り刻まれた陰影はまさに歴史的生命を終え、なおかつ存続する古代権力を下から支える荘民の意識にほかならなかった。

石母田氏がみた黒田荘には「あるべき」健全なはずの荘民はついに登場することなく、孤立と頽廃の淵に沈んだ地侍の出口のない抗争しかなかった。それはまことに暗い世界であったのである。

この暗さは、石母田氏自身がこの書物をものした戦時体制下における時代の暗さを考えねば理解できない。すでに石井進氏が岩波文庫版の末尾に付した「解説」でそのあたりの事情を石母田氏の学問研究の軌跡と絡めながら詳細に述べている。またこれよりまえ太田順三氏も本書の構想の時代的背景を「荘園と『地域的一揆』体制—石母田正著『中世的世界の形成』をめぐって—」（佐賀大学教養部研究紀要第十二巻一九八〇年）なる論文で関説している。⁹⁾

両氏の所論ですでに掲げているわけであるが、石母田氏にとっ

て当時の「最大の課題」は天皇制の問題であった。「日本人が思想的にも、実践的にも解決することなしには、他の問題の解決もあり得ないと確信すればするほど、天皇制に呪縛されたようなこの時代の状態からの解放の道筋が、いかに日本人にとって困難で複雑であるか、天皇制という怪物をいただくわれわれの国はなんという不可思議な国であるかと自問自答しながら」石母田氏は突き破りたい壁のまえに立っていたのである⁽¹⁰⁾。

戦前の石母田氏は「天皇制の問題を媒介にして、研究者としての自分と人民との関係を設定していた」が、そのさいかれとその周辺研究者が「人民から孤立しており、そのうえその人民そのものが天皇制にとらえられたままで」いたという関係をみておく必要がある⁽¹¹⁾。さもなければ、「地侍が悪党であることをやめ庄民がみずからを寺家進止の土民であると考えことをやめない限り、古代は何度でも復活する」(四一七ページ)という黒田荘の暗鬱は感得できないであろう。

熱狂が理性のうえに覆いかぶさり、理不尽と虚偽と暴力が道理と真理をおし潰す時代、「暗黒のなかで眼をみひらき、自己を確乎と支えてゆくためにはわれわれは学問の力にたよるほかになかった」という石母田氏の感懐⁽¹²⁾には、時代の流れに抗し、あくまでも誠実かつ折り目たたく生きようとした一歴史学者の孤高の思想をみるができる。

ところで頽廢の社会を一身に体现したとする中世悪党をめぐる評価については、それが石母田氏の中世社会像の根底にかかわる問題だけに、その後の日本中世史の学界に大きな影響をのこした。

一九七〇年に「悪党の評価をめぐって——日本中世研究史の一面——」⁽¹³⁾と題してその影響の総括をこころみた網野善彦氏は、石母田氏の『中世的世界の形成』が中村直勝、清水三男両氏の泥臭く、雑草のようにエネルギーな庶民的な世界に悪党を觀ようとする史風をきびしく批判し、史的唯物論の立場からする古代末期以降の時期における「科学的把握」と中世成立の「法則性」を究明しようとするものであったことを確認した。

そのうえでこの本が中村・清水両氏が明らかにしようとした「悪党」の一面を切り落とした上に立てられたとすれば、それは日本の社会の基底に存在する、見のがすことを許されぬ「なにものか」を、鋭利なメスで切りおとした上に立てられた「法則」であり、「科学」であったことなるう、と網野氏は指摘したのである。

この「なにものか」は網野氏自身の研究成果である『日本中世の非農業民と天皇』(岩波書店一九八四年)その他⁽¹⁴⁾で明らかなく、非人、散所、供御人、遊女、芸能民、海民、漁民といった無縁、公界に生きる人々の非農業的な世界にはかならなかつた。

ここに石母田氏以来の領主制理論を基軸として、悪党の「前進」か「頽廢」かを論じる視点に向ってまったくあらたな視点を対置したのである。網野氏のかような新領野からうちだされた中世史像は、おそらく石母田氏がのこした影響にもっともラジカルな形をもって総括をこころみたとみることができるのである。

いまは網野氏の学説について可否を論じる余裕も力量もない。ただここでは石母田氏の理論と体系が「見のがすことを許されぬ」部分を切り落としたうえに組み立てられているという重大な問題提起だけを注目しておきたい。

b

石母田氏の理論と体系とはいかなる構造と特徴を有つものであったのであろうか。ここでは網野氏のように石母田氏が「切り落とした」部面から領主制を批判するのではなく、前節②の命題そのものをもつ問題を明らかにするなかで、黒田莊研究に必要な視点と方法を探りたい。

②の命題、すなわちへ古代から中世への変革の推進力が領主階級の成立と発展にのみあるとする命題は、石母田氏の理論の根幹となる部分であった。これがいわゆる「領主制」（あるいは「在地領主制」）理論と呼ばれるところのものである。これを探求し主張することに①を除く一切の学問的目標がおかれていたことは、本書の第一章がまずもって私営田領主「藤原実遠」から起

筆されていることに端的にうかがわれる。石母田氏にとって、東大寺と国衙との本格的な抗争の幕開けとなった天喜事件は、領主制の運動起点にはなりえず、したがって叙述の対象ではなかったのである。

領主制理論の内容は、すでに各章の論旨を紹介するなかで明らかにしたのであるが、この理論のもつ問題性（限界性）を浮き彫りにするために必要な骨子を再度述べればつぎのようになる。すなわち、日本における封建制は古代奴隸制（≡総体的奴隸制）の内部から生起する封建的ウクライドとしての領主制によって形成される。領主制になう運動の主体は、古代家族的内部構造を揚棄して、「所領」内部の農民の占有と対立してのみ自己を実現する武士にはかならなかつた。だから古代から中世への時代の推移は、武士階級の運動と構造における発展の度合から測定しなければならず、当然わが中世社会の分析の方法は古代的貴族階級の荘園制支配を領主制が破壊し、うち破る道筋としてのみ定立されるのであつた。

さてかかる領主制理論は黒田莊におけるいかなる研究方向を規制することになるのだろうか。

まず第一にこの理論からは東大寺自体の構造分析の研究方向は大きく規制されることになる。歴史の運動力にかかる領主制にすぎた構想上の枠組みが伊賀国黒田莊の農村社会にあてはめられた

とき、東大寺はまさに古代ローマ法的な論理と抽象と形式をふりかざす、「血の一滴さえも通わない」古代の権力そのものであり、東大寺がもつ内部構造とその運動、変容あるいはそれにともなう政治・経済・文化にわたるもろもろの事象——預所制、神人定置、惣寺集会など——までがすべてこれ領主制との敵対を軸とする古代の「対応」でしかなかった。東大寺はあくまで奴隷制的構造をもつ荘園に基礎をおく、「数世紀にもわたり一貫して古代的な」存在であったのである。

第二に「名主」百姓への目が閉ざされてしまうことになる。すでに**三**の**b**で石母田氏の「名主」百姓の考え方はのべた通りであり、そこにある問題性から幾多の批判と克服されるべき学説が提出されていることも明らかにした。石母田氏によれば、「名主」は「村の役人として或いは富裕者として村落生活の中心であり、村民よりやや広い程度の土地を家族的労働をもって経営する地主」（一八六ページ）と規定される。傍点を付したところの「村民」が何を指すのか不明確であるのだが、いずれにせよかれらは家父長制的奴隷制を基礎とする家族経営（Ⅱ家父長的名田経営）の所有者であることは間違いなく、農村住民のすべてはこれに属するか、さもなければこの家父長的名田経営のもとに包摂された奴隷的直接生産者に含まれていたはずである。

こうした農村住民の理解は当時の研究水準に規定された当然の結果であり、やむをえないことは勿論であるが、かれらの理解が中世荘園農村の「名主」百姓を政治的意義の有ちえないものとす規定の原因となっており、かれらが直接経営（Ⅱ家父長的名田経営）から分離してのみ——すなわち領主化してのみ——政治過程に参入することが可能になるという把握の方法を規定づけていることは、客観的な論理構造の特徴としてやはり注意しておく必要がある。この論理構造からは、どうしても「田堵」「名主」らのみせる主体的な特殊荘園制的政治行動は理解できない。

第三に「荘園制」の研究視点が領主制の枠のなかに位置づけられているかぎり、きわめて限定されたものとならざるをえない。これは第一・第二の問題点のなかにすでにその根源をみることができであろう。すなわち、領主制理論からは、東大寺は一貫して中世（Ⅱ封建制）の対立物でなければならず、それは荘園在地から切り離された存在であった。そして在地からの対立物と火花をちらす接点が唯一武士的勢力だけである（「名主」百姓は政治的意義をもちえず）とするならば、東大寺と荘民がとりむすぶまさしく荘園制的な社会の構造体系はみえてこないのである。

したがってここでの寄人運動は寺領拡張と「寺奴の論理」を説明するものにはなりえても、荘園制の固有する人間と土地にたいする編成原理、あるいはこれを源泉とする寺院勢力の巨大な武力

組織の登場は観察の対象にならない。この場合に示唆的なのは、源俊方の存在形態であろう。かれとその一統は「古代権力」にたちむかう在地領主の典型として描かれているわけであるが、かれの親父親俊が長瀬莊田を兼作し、龍穴寺の別当覺儼律師の房人となつてゐること、かかる長瀬ならびに龍穴寺との関係を俊方が「伝得」してゐるのも事実である（東大寺文書、正治元年九月日、龍穴寺所司陳狀）。龍穴寺は興福寺の末寺であつて、「古代権力」の一角を構成してゐることは言うまでもない。

またかれは興福寺の東金堂春日御塔の寄人でもあつたといふ。ようするに莊民の存在形態を、領主制を純粹に保持しながら、独自の村落的完結的な世界のなかにとじこめておくことは、莊民がもつかわめて多様で複雑な「莊園制」の人と土地の編成原理をみえなくすることにはなからうか。

「莊園制」を寺院と在地とが無数の糸によつてむすびついた一箇の社会の構造体系であると考へなければ、平安時代末期の大衆蜂起の周辺部に動き回る「武勇の輩」とか「戦士」とよばれる俗体の兵士どもは、観察の対象にもなりえず、正しく位置づけることもできないと思ふのである。

石母田領主制理論は結局第一に東大寺権力の実態を平板なものとし、その分寺院研究の方向性を出しにくくしたこと、第二に東大寺との矛盾点が唯一在地領主にあるために「名主」百姓はその

下にかくれてしまつた。それゆゑ名主級農民の独自の研究（村落研究 e t c）の方向性を出しにくくした。第三に第一、第二に規定されて、「莊園制」社会そのものの研究がいちじるしく一面化された、という三点の問題性をその内部にはらんでいたものと思われ。

c

では石母田氏が打ち立てた領主制理論は、いま現在のわれわれに向つて何を提起してゐるのであらうか。

歴史の推進力をウクライドとしての領主制におき、一切の新しい時代的傾向を武士的なものから説明する理論は、それ自体がきわめて緻密に組み立てられ、完璧なまでの一貫性をもつために、戦後歴史学の枠組みとして長い生命力をもちつづけてきた。そしてこの理論を軸にして、なおかつこの理論に抜けおちていた問題（たとえば、都市と農村の交通、農民の政治的達成として村落、農民闘争と領主制発展の諸段階等々）が研究の対象とされることによつて、中世史像はより豊かなものとなつて存在しつづけてゐる。⁽¹⁷⁾

しかしわれわれは石母田氏のつぎの言葉をつねに問い返す必要はあるのではなからうか。かつて鈴木良一氏との論争のなかでかれは、領主Ⅱ武士階級の古代貴族に対する対立的、進歩的なものだけを強調したが、「書かれた時代における支配的な潮流、すなわち天皇制的王朝時代を回顧讚美して中世を暗黒時代或は國體

に対する反逆の時代として見る傾向にプロテスタとして、歴史の進歩の鉄則を明かにするために「必要であったと述べているのである」⁽¹⁸⁾。この点、さきに指摘した「本書は自分にとってあらゆる意味で戦争時代のものである」という氏の述懐と重なるであろう。黒田悪党を敗北としか描けなかったのも、武士的なものを唯一進歩的なものと強調したのとも「戦争時代のもの」たる所以であろう。

こう考えると、石母田氏の武士的なもの（：領主制）は、昭和一〇年代の時代と切り結ばれた強烈な緊張関係に発するものであって、したがってこの時代状況なればこそ、領主制論は巨大な意味をもちえたのではなからうか。空襲が本格化し米機動部隊が本土にせまりつつある状況、そのなかにあって破局をみすえる石母田氏がおそらく死を覚悟しながら「年少の友人たち」に、「われわれの祖国の古い歴史がけっしてそれほど貧困なものでないことを学んでくれることを希望し（た）」⁽¹⁹⁾のは意味ぶかいと思ふ。氏にとって「貧困なものでない」という確信こそ、領主制の理論に支えられたものではなかつたらうか。

領主制の意味をかように解すると、黒田俊雄氏が一九六四年段階において、領主制理論の提起した「十五年前の思想的課題」が歴史学にそのまま期待されているかどうか疑問を呈し、もはや、この理論が単なる「段階規定」の「形式的範疇に矮小化したかに

みえる」と論じたのは領主制理論そのものが有つ歴史的な意味をまことに的確に示したものである。

学問研究における現在の立場をつらぬき、ナチの兇弾にたおれたマルク・ブロックの死を石母田氏が「歴史家が死ななければならなかった不幸な時代、歴史家も死ぬことができた幸福な時代、このような時代にわれわれも生きているのだということ以外に、何を語り得ようか」とつぶやくように書いている。⁽²¹⁾石母田領主制理論からわれわれがもし学ぶとしたら、この理論につらぬかれた強靱な魂（：思想性）ではなからうか。この魂こそ石母田理論の目に見えない核であって、これは一見領主制論に関係のない右の言葉にもっともよく表出されていると思うのである。

- (1) 竹内理三氏が『伊賀国黒田荘史料』一（吉川弘文館刊）の序で、「本書の出現は、敗戦にうちひしがれたわれわれ歴史研究者に、電撃的な衝撃を与え、立ち直る自信を与えたのである。そのことは同時にこの黒田荘自体のもつ重要性が、われわれ日本人全体にかかわるものであることを意味する」『土一撓と内乱』（日本民衆の歴史2三省堂一九七五年）と述べたのは、この書物が日本歴史学になげかけた影響のほどをもっとも端的に物語っていると思う。
- (2) 稲垣泰彦「領主と農民」（『土一撓と内乱』日本民衆の歴史・2、

三省堂)

- (3) 黒田俊雄『日本中世封建社会論』序論(一九七四年)
- (4) 岩波文庫版は石井進氏ならびに千々和到氏によって、丁寧な引用、史料の校合、刊本史料の文書番号の付記、引用著書論文の該当頁数の付記、校訂注の付記などがほどこされ、ているので一層読みやすく、また本書からの史料検索がしやすくなっている。
- (5) 石井進 岩波文庫版「解説」
- (6) 戸田芳究『日本領主制成立史の研究』(昭和四二年)、大山喬平『日本中世農村史の研究』(一九七八年)
- (7) それゆえに鈴木良一氏が「敗戦後の歴史学における一傾」(『思想』一九四九年一月号)で、古代から封建への転換において領主階級を過大に評価し、人民の原動力としての役割を軽視しているという批判は、単なる感覚的なものとどまらざる性質をもっていたのである。
- (8) 黒田俊雄『荘園制社会』(昭和四二年)
- (6) 佐賀大学教養部研究紀要第十二卷一九八〇年、その他、西村汎子・矢代和也「『中世的世界の形成』の再検討」、小山靖憲「戦後日本『中世史』研究の視点について」(以上『歴史評論』一五三号)参照。
- (10) 「『国民のための歴史学』おぼえがき」(『戦後歴史学の思想』所収)。
- (11) 同右。
- (12) 本書初版抜。
- (13) 『歴史学研究』三六二号(一九七〇年)。
- (14) 網野氏の悪党論がもっとも包括的に論じられているのは小学館版『日本の歴史』10卷(蒙古襲来)であろう。
- (15) 石母田正「封建制成立の特質について」(東京大学出版会刊『中世的世界の形成』所収)。
- (16) 黒田日出男「中世的河川交通の展開と神人・寄人」(『日本中世開発史の研究』所収)。
- (17) 戦後領主制論をもっとも旺盛かつ体系的に研究・深化させたのはおそらく鈴木国弘氏であろう(『在地領主制』中世史選書2、△雄山閣▽(昭和五五年)。ここで氏は、領主制理論の発展過程を全面的にあとづけ、そのうえで「族縁共同体」「荘園国衙領制」「地頭領主制」等について新たな地平を切り拓いた。
- (18) 注(15)に同じ。
- (19) 本書初版序。
- (20) 「戦後中世史研究の思想と方法」(『日本中世封建社会論』所収)。
- (21) 「マルク・ブロックの死」『歴史と民族の発見』(一九五二年)所収。
- (岩波書店 岩波文庫青四三六一 一九八五年九月発行 定価七〇〇円)

表4 R & D立地点と工場との近接性の地域別分類

R & D立地点 工場立地点	北海道 ・東北		北 関 東		南 関 東			信 越		京 阪 神		中 国 ・四国		九 州		全 国		
	茨 城		北 茨 城		南 玉		東 京 区 部		東 京 都 下		神 奈 川		大 阪		兵 庫		全 国	
敷地内 比率(%)	6 (54.5)	7 (22.6)	2 (9.1)	52 (45.2)	11 (50.0)	6 (46.2)	5 (38.5)	24 (45.3)	1 (33.3)	25 (83.3)	23 (74.2)	6 (66.7)	11 (91.7)	4 (57.0)	1 (10.0)	119 (50.0)		
近 隣	1 (9.1)	4 (12.9)	— (—)	7 (6.1)	2 (5.5)	— (—)	1 (7.7)	3 (5.7)	— (—)	1 (3.3)	2 (6.5)	2 (22.2)	— (—)	3 (4.3)	1 (10.0)	19 (8.0)		
な し	4 (36.4)	18 (58.1)	18 (81.8)	54 (47.0)	9 (4.5)	7 (53.8)	7 (53.8)	25 (47.2)	1 (33.3)	3 (10.0)	5 (16.1)	1 (11.1)	1 (8.3)	— (—)	6 (60.0)	91 (38.2)		
その他とも計 比 率	11 (100)	31 (100)	22 (100)	115 (100)	22 (100)	13 (100)	13 (100)	53 (100)	3 (100)	30 (100)	31 (100)	9 (100)	12 (100)	7 (100)	10 (100)	238 (100)		

表5 研究分野別のR & D立地地域

R & D立地点 研究分野	北海道 ・東北		北 関 東		南 関 東			信 越		京 阪 神		中 国 ・四国		九 州		全 国		
	茨 城		北 茨 城		南 玉		東 京 区 部		東 京 都 下		神 奈 川		大 阪		兵 庫		全 国	
バイオテクノロジー 比 率(%)	5 (45.5)	15 (48.4)	12 (54.5)	19 (16.5)	4 (18.2)	2 (15.4)	2 (15.4)	6 (11.3)	— (—)	6 (20.0)	7 (22.6)	— (—)	2 (16.7)	3 (42.9)	3 (30.0)	58 (24.4)		
テクノロジー 比 率	4 (36.4)	7 (22.6)	6 (27.3)	51 (44.3)	10 (45.5)	4 (30.8)	4 (30.8)	30 (56.6)	2 (66.7)	11 (36.7)	15 (48.4)	6 (66.7)	6 (50.0)	— (—)	5 (50.0)	95 (39.9)		
新 薬 材 比 率	2 (18.2)	13 (41.9)	10 (45.5)	36 (31.3)	7 (31.8)	3 (23.1)	5 (38.5)	16 (30.2)	— (—)	6 (20.0)	11 (35.5)	2 (22.2)	5 (41.7)	3 (42.9)	2 (20.0)	73 (30.7)		
その他とも計 比 率	11 (100)	31 (100)	22 (100)	115 (100)	22 (100)	13 (100)	13 (100)	53 (100)	3 (100)	30 (100)	31 (100)	9 (100)	12 (100)	7 (100)	10 (100)	238 (100)		

注：同一研究施設で複数の研究分野を扱う場合があるため、比率の合計は100以上になる。

表 2 R & D立地点と本社との位置関係

R & D立地点 本社所在地	北海道 ・東北		北 関 東		南 関 東		東 海		京 阪		中 国 ・四国		九 州		全 国			
	茨 城		埼 玉		東京区部		東京部下		神奈川		信 越		東 海		京 阪		神 兵 庫	
	同 県 内 比率(%)	本社内 比率	1 (3.2)	42 (36.5)	3 (13.6)	11 (84.6)	11 (84.6)	11 (30.2)	16 (30.2)	8 (66.7)	18 (58.1)	8 (88.9)	5 (71.4)	3 (30.0)	3 (36.6)	8 (66.7)	3 (13.0)	3 (36.6)
比 率	3 (27.3)	3 (27.3)	1 (3.2)	42 (36.5)	3 (13.6)	11 (84.6)	11 (30.2)	16 (30.2)	8 (66.7)	18 (58.1)	8 (88.9)	5 (71.4)	3 (30.0)	3 (36.6)	8 (66.7)	3 (13.0)	3 (36.6)	
外 比 率	8 (72.7)	29 (93.5)	21 (67.7)	71 (61.7)	19 (86.4)	2 (15.4)	2 (6.0)	35 (66.0)	17 (56.7)	13 (41.9)	1 (11.1)	2 (28.6)	6 (60.0)	6 (62.6)	4 (33.3)	4 (14.9)	149 (62.6)	
そ 他 比 率	11 (10.0)	31 (10.0)	22 (10.0)	115 (10.0)	22 (10.0)	13 (10.0)	13 (10.0)	53 (10.0)	30 (10.0)	31 (10.0)	9 (10.0)	7 (10.0)	10 (10.0)	10 (10.0)	12 (10.0)	7 (10.0)	238 (10.0)	

注) 次の各社については登記上の本社所在地ではなく、事実上の本社機能が立地する東京を本社所在地として計上した。
雪印乳業、日産自動車、リョーヒ、富士通、東芝、松下通信工業、東洋曹達工業

表 3 関東地域、京阪神地域に本社のある企業のR & D立地点の地域別分布

R & D立地点 本社所在地	北海道 ・東北		北 関 東		南 関 東		東 海		京 阪		中 国 ・四国		九 州		全 国			
	茨 城		埼 玉		東京区部		東京部下		神奈川		信 越		東 海		京 阪		神 兵 庫	
	同 県 内 比率(%)	本社内 比率	7 (63.6)	98 (85.2)	18 (81.8)	11 (84.6)	11 (84.6)	11 (30.2)	47 (88.7)	6 (19.4)	2 (6.7)	2 (28.6)	3 (30.0)	3 (36.6)	2 (6.7)	3 (36.6)	2 (6.7)	3 (36.6)
比 率	7 (63.6) <td>7 (63.6) <td>21 (67.7) <td>98 (85.2) <td>18 (81.8) <td>11 (84.6) <td>11 (30.2) <td>47 (88.7) <td>6 (19.4) <td>2 (6.7) <td>2 (28.6) <td>3 (30.0) <td>3 (36.6) <td>2 (6.7) <td>3 (36.6) <td>2 (6.7) <td>3 (36.6) </td></td></td></td></td></td></td></td></td></td></td></td></td></td></td></td>	7 (63.6) <td>21 (67.7) <td>98 (85.2) <td>18 (81.8) <td>11 (84.6) <td>11 (30.2) <td>47 (88.7) <td>6 (19.4) <td>2 (6.7) <td>2 (28.6) <td>3 (30.0) <td>3 (36.6) <td>2 (6.7) <td>3 (36.6) <td>2 (6.7) <td>3 (36.6) </td></td></td></td></td></td></td></td></td></td></td></td></td></td></td>	21 (67.7) <td>98 (85.2) <td>18 (81.8) <td>11 (84.6) <td>11 (30.2) <td>47 (88.7) <td>6 (19.4) <td>2 (6.7) <td>2 (28.6) <td>3 (30.0) <td>3 (36.6) <td>2 (6.7) <td>3 (36.6) <td>2 (6.7) <td>3 (36.6) </td></td></td></td></td></td></td></td></td></td></td></td></td></td>	98 (85.2) <td>18 (81.8) <td>11 (84.6) <td>11 (30.2) <td>47 (88.7) <td>6 (19.4) <td>2 (6.7) <td>2 (28.6) <td>3 (30.0) <td>3 (36.6) <td>2 (6.7) <td>3 (36.6) <td>2 (6.7) <td>3 (36.6) </td></td></td></td></td></td></td></td></td></td></td></td></td>	18 (81.8) <td>11 (84.6) <td>11 (30.2) <td>47 (88.7) <td>6 (19.4) <td>2 (6.7) <td>2 (28.6) <td>3 (30.0) <td>3 (36.6) <td>2 (6.7) <td>3 (36.6) <td>2 (6.7) <td>3 (36.6) </td></td></td></td></td></td></td></td></td></td></td></td>	11 (84.6) <td>11 (30.2) <td>47 (88.7) <td>6 (19.4) <td>2 (6.7) <td>2 (28.6) <td>3 (30.0) <td>3 (36.6) <td>2 (6.7) <td>3 (36.6) <td>2 (6.7) <td>3 (36.6) </td></td></td></td></td></td></td></td></td></td></td>	11 (30.2) <td>47 (88.7) <td>6 (19.4) <td>2 (6.7) <td>2 (28.6) <td>3 (30.0) <td>3 (36.6) <td>2 (6.7) <td>3 (36.6) <td>2 (6.7) <td>3 (36.6) </td></td></td></td></td></td></td></td></td></td>	47 (88.7) <td>6 (19.4) <td>2 (6.7) <td>2 (28.6) <td>3 (30.0) <td>3 (36.6) <td>2 (6.7) <td>3 (36.6) <td>2 (6.7) <td>3 (36.6) </td></td></td></td></td></td></td></td></td>	6 (19.4) <td>2 (6.7) <td>2 (28.6) <td>3 (30.0) <td>3 (36.6) <td>2 (6.7) <td>3 (36.6) <td>2 (6.7) <td>3 (36.6) </td></td></td></td></td></td></td></td>	2 (6.7) <td>2 (28.6) <td>3 (30.0) <td>3 (36.6) <td>2 (6.7) <td>3 (36.6) <td>2 (6.7) <td>3 (36.6) </td></td></td></td></td></td></td>	2 (28.6) <td>3 (30.0) <td>3 (36.6) <td>2 (6.7) <td>3 (36.6) <td>2 (6.7) <td>3 (36.6) </td></td></td></td></td></td>	3 (30.0) <td>3 (36.6) <td>2 (6.7) <td>3 (36.6) <td>2 (6.7) <td>3 (36.6) </td></td></td></td></td>	3 (36.6) <td>2 (6.7) <td>3 (36.6) <td>2 (6.7) <td>3 (36.6) </td></td></td></td>	2 (6.7) <td>3 (36.6) <td>2 (6.7) <td>3 (36.6) </td></td></td>	3 (36.6) <td>2 (6.7) <td>3 (36.6) </td></td>	2 (6.7) <td>3 (36.6) </td>	3 (36.6)	
外 比 率	1 (9.1)	29 (93.5)	7 (22.6)	9 (7.8)	2 (9.1)	1 (7.7)	2 (5.4)	2 (3.8)	1 (3.3)	25 (80.6)	10 (83.3)	1 (10.0)	3 (30.0)	3 (36.6)	10 (83.3)	3 (30.0)	46 (19.3)	
そ 他 比 率	11 (10.0)	31 (10.0)	22 (10.0)	115 (10.0)	22 (10.0)	13 (10.0)	13 (10.0)	53 (10.0)	30 (10.0)	31 (10.0)	9 (10.0)	7 (10.0)	10 (10.0)	10 (10.0)	12 (10.0)	7 (10.0)	238 (10.0)	

表1 R & D 立地の地域別分布
(1983年1月～1986年7月の判明分)

地域名	北海道・東北		北関東		南関東		東関東		信越	東海	京阪	神		中国・四国	九州	全国
	立地数	比率(%)	交城	北	埼玉	東京区部	東京都下	神奈川				大阪	兵庫			
立地数	11		31	22	115	22	13	53	3	30	31	9	72	7	10	238
比率(%)	(4.6)		(13.0)	(9.2)	(48.3)	(9.2)	(5.5)	(22.3)	(1.3)	(12.6)	(13.0)	(3.8)	(5.0)	(2.9)	(4.2)	(100)

注：地域区分は以下の通り。

○北海道・東北
北海道、青森、山形
宮城、福島
○北関東
群馬、栃木、茨城

○南関東
千葉、埼玉、東京
神奈川、静岡(東部)、山梨
○東海
静岡(西部)、愛知、三重、岐阜

○信越
長野、新潟

○京阪神
福井、滋賀、京都
大阪、奈良、和歌山、兵庫

○中国・四国
岡山、広島、山口、香川

○九州
福岡、佐賀、熊本、鹿児島

岡山県、広島県、山口県、香川県

企業名	本社	資本金	施設名	所在地	工場	主な研究分野	B	T	M	他	延床面積	研究員	投資	注、その他
林原生物化学研究所	岡山	0.1	細胞研究 (実験棟)	岡山市	近	生理活性物質、発酵	○						60	
三井造船	東京	373	リサーチ	玉野市	内	耐熱合金、ニューセラミクス			○		950		7	玉野 内
常石造船	沼隈町	1.8	総合技術	福山市	近	水処理、食品				○	600			
中国塗料	広島	2.8	化成品	大竹市	近	船舶塗料				○			30	
出光石油化学工業	東京	2.0	字部	徳山市	内	ファイバーグラス			○		(4階建て)			
宇野興産	宇部	4.15	バイオ・酵素	宇部市	内	バイオ、新素材			○			50		研究棟新設
加ト吉	観音寺	4.4	バイオサイエンス研究室	観音寺市	内	健康食品、調味料			○			6		
九州 各県														
九州松下電器	福岡	7.2	新開発	福岡市	内	総合家電				○	10,000	200	20	1990年に研究員500名
協立	篠栗町	0.2	協立技術	篠栗町	近	IC工場用の空調機器			○		(敷) 7,000		3.5	面積は本社も含む
日本化学発光	福岡	0.4	技術	古賀町	予	バイオケミカル			○		1,000			佐賀県神埼郡
大塚製薬	東京	6.0	スポーツ栄養	東背振村	予	栄養食品、スポーツ医学				○	3,300			
大阪チタニウム製造	尼崎	2.5	ウエハハー開発	伊万里市	予	超超LSI用ウエハー			○			70		
立石電機	京都	8.5	(ミニ研)	江北町	予	LSI試作			○			80		
パナファーム・ラボラトリーズ	東京	2	鹿児島技術	熊本県下	予	メカトロニクス、バイオセンサ			○			100		日鉱、宇部、日油脂の合併
シババンク	東京	1.2	鹿児島技術	鹿児島市	予	医薬、バイオ			○					
ネミック・ラムダ	東京	2.5	開発	鹿屋市	予	IC検査機器			○		(建) 1,700	10		

凡 例

企業名	(上) は全国8証券取引所上場企業。
本社	登記上の本社所在地を市町村名で表示。
資本金	単位 = 億円
施設名	(研) は研究所、(セ) はセンターの略。 () 内は仮称等。
工場	各施設と工場との位置関係を表示。 内 = 工場内、近 = 工場近接 予 = 工場立地予定、- = 工場なし
主な研究分野	B = バイオ・テクノロジ、T = テクノロニクス M = 新素材、を指示。
延床面積	(敷) は敷地面積、(建) は建物面積の略。
研究員	単位 = 人で表示。
投資	投資額を単位 = 億円

*いずれも、空らんは不明であることを示す。

資 料

- 『日経産業新聞』日本経済新聞社 (1983年1月~1986年7月)
- 『1986年版一会社総覧』日本経済新聞社 (1986年)
- 『1987年版一会社総覧』日本経済新聞社 (1986年)
- 通産省編: 『1985年版一全国工場通覧』日刊工業新聞社 (1986年)
- 総務省統計局: 『事業所名鑑一昭和57年版』(1983年)
- 帝国データバンク: 『第61版一帝国銀行会社要録』帝国データバンク (1980年)
- 全国試験研究機関名鑑編集委員会: 『全国試験研究機関名鑑 (1985~1986年度版)』ラティス (1985年)
- 『会社四季報一昭和60年第2集』東洋経済新報社 (1985年)

福井県、滋賀県、京都府

企業名	本社	資本金	施設名	所在地	工場	主な研究分野				研究員	投資	注、その他	
						B	T	M	他				
小野薬品工業	大阪	17.1	福井安全性(研)	大阪	—	新素材、バイオ、エンジニアリング	○	○	○	○	21	50	
東洋紡績	大阪	3.34	総合(研)	大津市	内	新素材、バイオ	○	○	○	○	400		
東レ	東京	5.99	総合技術(セ)	〃	内	化粧品	○	○	○	○	500	100	
ノエビア	大阪	9	中央(研)	八日市市	内	診断用医薬	○	○	○	○	35		
オリエンタル酵母工業	東京	1.2	バイオ(研)	長浜市	—	印刷紙、感光材料	○	○	○	○			
三菱製紙	東京	1.34	商品開発室	京都市	内	画像処理	○	○	○	○	10	0.5	本社内
岩崎技研工業	京都	0.8	人工知能研究室	京都市									

大阪府、奈良県、和歌山県

住友化学工業	大阪	7.86	大阪(研)	大阪市	内	光電材料					300	9	
三田工業	大阪	1.0	技術研究棟	〃	近	OA機器	○	○	○	○	30	30	本社内
松下電器産業	門真	8.92	半導体研究(セ)	門真市	内	半導体製造過程、デバイス	○	○	○	○	220	200	本社内
ブラズマ・ウェルド	東大阪	0.7	研究開発棟	東大阪	内	レーザー加工	○	○	○	○	360	1	本社内
松下冷機	東大阪	7.8	技術(セ)	東大阪	内	精密加工、空調技術	○	○	○	○	84	20	本社内
三洋電機	守口	6.13	応用技術(研)	守口市	内	エネルギー、OA機器	○	○	○	○	100	30	
ミノルタカメラ	大阪	1.27	中央(研)	高槻市	近	光学、エレクトロニクス	○	○	○	○	200		
コナミ工業	神戸	5.2	(新研)	豊中市	内	ゲームソフト					7		
竹中工務店	大阪	5.00	技術(研)大阪支所	美原町	—	地盤、材料、環境					5		
森精機製作所	大和郡山	3.7	研究開発(セ)	大和郡山市	—	工作機械					150		本社内
シャープ	大阪	5.06	IC技術(セ)	天理市	内	超超L.S.I.、R.A.M.、ゲートアレイ	○	○	○	○	45		
本州化学工業	東京	5	(研)	和歌山市	内	ファイブケミカル					40	3	

兵庫県

久保田鉄工	大阪	6.73	技術開発(研)	尼崎市	内	大規模灌漑、ヒートポンプ	○	○	○	○	160	35	実験棟 3,440 m ² を含む
三菱電機	東京	1,09.5	材料(研)	〃	内	電子部品材料	○	○	○	○	150	30	研究棟新設
レオ技研	神戸	0.2	(研)	神戸市	内	レーザー加工	○	○	○	○	700	2	
アジックス	神戸	1.15	スポーツ工学(研)	〃	—	バイオメカニクス、素材	○	○	○	○	130		本社(ポートアライランド)内
日本システム開発	宝塚	0.7	システム技術(研)	宝塚市	内	マイコン	○	○	○	○	10	0.5	本社内
川崎重工	神戸	6.65	バイオ研究室	明石市	内	発酵プラント	○	○	○	○			技術(研)内に新設
〃	〃	〃	新素子	〃	内	ロボット用センサー	○	○	○	○			
〃	〃	〃	宇宙技術	〃	内	航空宇宙技術	○	○	○	○			
ネスル	神戸	3.50	製品開発(研)	緑町	内	健康・栄養食品	○	○	○	○	6		淡路島内
オークラ輸送機	加古川	2.2	メカトロニクス(研)	加古川市	内	物流・組み立てロボット	○	○	○	○	100	4	本社内
大和真空工業所	加古川	1.25	中央(研)	〃	内	クォーツ、静電表示器	○	○	○	○	40	10	
日本触媒化学工業	大阪	6.7	触媒(研)	姫路市	内	触媒	○	○	○	○	80		

静岡県 (西部)

企業名	本社	資本金	施設名	工場所在地	主な研究分野	B	T	M	他	延床面積	研究員	投資	注、その他
日本自動変速機	富士	3.2	総合研究開発	富士市	内		○			4,000	200	30	本社内
フジ製糖	清水	1.1	バイオ	芝川町	近	○				(敷) 6,600	100	17	
サッポロビール	東京	1.41	中央(研)、応用開発(研)	焼津市	内	○				3,200	120	11	
矢崎総業	東京	9	電子技術	榛原町	内		○			5,300	15	6	
ソニーC.P	東京	3.5	静岡プログラクツ(セ)	大井川町	内			○		(建) 4,000	14	12	
伊藤園	東京	3	(新研)	相良町	内			○		食品	800	4	
ヘキストジャパン	東京	1.0	応用技術ラボ	大東町	予			○		フェトレジスト			
東共	東京	2.13	安全性	袋井市	一	○				実験動物の開発		14	
富士機工	東京	1.3	試験	新居町	内			○		(建) 1,600	1.5		

愛知県

共立産業原料	名古屋	1.5	メカトロニクス開発(セ)	名古屋	内			○		(敷) 2,000			
三菱重工業	東京	1.471	メカトロニクス開発(セ)	名古屋	内			○				80	
(財) ファインセラミクスセンター	名古屋	—		豊田	内			○		9,000		50	
台糖ファイザー	東京	9.4	第3研究棟	武豊町	内			○		5,500		3	
神鋼電機	東京	7.1	研究開発	豊橋市	内			○		1,700		10	
〃	〃	〃	電子技術	豊橋市	内			○		4,100		10	
白木金属工業	横浜	3.6	技術開発	豊川市	内			○		4,620		10	
リコーエレメックス	名古屋	1.2	研究開発棟	岡崎市	内			○		3,300		6	パイロットプラント併設
ノリタケ・カンパニー	名古屋	6.1	技術開発	三好町	内			○					
豊田合成	春日	4.0	技術	稲沢市	内			○					
アイシン精器	刈谷	1.01	技術本館	刈谷市	内			○		23,500	1,300	50	本社隣接
中央炭鉄	名古屋	2.2	技術開発	三好町	内			○		3,150	30	3	
東海ゴム工業	小牧	3.9	テクニカル技術(セ)	小牧市	内			○		(地上4階)	100	14	本社内
ポッカ・コーポレーション	名古屋	5	中央	師勝町	内	○				2,818	40		

三重県

東洋曹達工業	東京	1.85	樹脂	四日市市	内			○			86		
伯東化学	東京	0.9	中央	〃	内			○		1,600		3	
セントラル硝子	東京	8.7	松阪開発	松阪市	内			○		25,000	100	80	
三和化学研究所	名古屋	1	三重	北勢町	一	○				4,200			

岐阜県

カヤバ工業	東京	8.1	技術開発	可児市	内			○		6,000	160	5	
フェザー安全剃刀	大阪	1	フェザー総合(研)	関市	内			○		1,800			
リコーエレメックス	名古屋	1.2	(研究室)	恵那市	内			○					

企業名	本社	資本金	施設名	所在地	工場	主な研究分野	B	T	M	他	延床面積 (数)	研究員	投資	注、その他
東洋電通工業	新潟陽	194	東京研究	越前市	—	バイオ、ファインケミカル					2,300			1990年に研究員1,000名
日本IBM	東京	750	大和	大和市	近	コンピュータハード					46,000	1,500		
西松建設	東京	127	技術	〃	—	大型構造物、原子炉					4,400	44		
日本電子技術	相模原	0.1	(研)	相模原市	内	画像処理、通信制御					600	30	1.8	
日本シュルンベルジェ	東京	2	(研)	〃	内	石油探査技術、光学					12,000	160		研究員は1990年に500名
旭化成	大阪	667	エレクトロニクス総合	厚木市	内	L S I、医療機器					(数) 33,000	140	40	
栗田工業	東京	45	総合	〃	—	水処理技術					10,000	160	45	
キャンオン	東京	302	中央	〃	—	光学、電子材料、人工知能					13,000	300	100	
リコー	東京	268	生産技術	〃	内	OA機器					5,000	50	20	
富士通研究所	東京	30	厚木	〃	—	ファインエレクトロニクス					24,500	520	110	
東陽テクニカ	川崎	5	電子技術	〃	—	電子計測器					5,450	80	14	
高砂熱学工業	東京	253	総合	〃	—	空調技術					1,678	30	5	
デュプロ製造	東京	1.2	技術	〃	内	エレクトロニクス					5,364	12	12	
伯東	東京	2.6	技術	伊勢原市	—	ライン自動化装置					5,000	75	7.5	
日産車体	平塚	69	総合車両実験	秦野市	内	エレクトロニクス、新素材					6,000	44	16	
東洋ラジエーター	東京	34	実験	〃	内	ラジエーター改良					900	5	5	技術(研)内
アマノ	横浜	3.4		中井町	内	タイムレコーダー					13,000	90		
東陽機器	北九州	136	商品開発部	茅ヶ崎市	内	ニューセラミクス								本社内
小松電子金属	平塚	29	技術	平塚市	—	太陽電池、ガリウムリン							150	
小松製作所	東京	415	技術(研)、電気(研)	〃	—	太陽電池、ロボット					23,300	360	1.7	
石野ガスケット	東京	0.5	気象	小田原市	内	ガスケット								
明治乳業	東京	124	ヘルスサイエンス(研)	〃	近	バイオ実用化					11,000	70		
日本曹達	東京	42	(新研)	〃	—	医薬品、食品添加物					7,787			ファインケミカル(研)内
テルモ	東京	141	技術開発	(七)	—	医薬、人工臓器、ME、新素材								1987年着工予定

静岡県(東部) 山梨県

中外製薬	東京	125	(新研)	御殿場市	—	バイオ医薬					13,200	100	32	
協和醗酵工業	東京	244	医薬(研)	長泉町	内	医薬品の合成、製剤					4,900	10	12	静岡県 本社内
ファンナック	東野	216	基礎	忍野村	内	加工システム								
富士通	川崎	1,005	技術開発	昭和町	内	光通信用半導体								富士通山梨エレクトロニクス内
雪印乳業	札幌	120	ワイン	(研)	—	ワイン								
長野県、新潟県														
オリンパス光学工業	東京	141	半導体技術	辰野町	内	カスタムIC開発・検査								
フェニックス	東京	0.9	(研)	新発田市	—	スポーツウェア生産システム					1,000	50		
小松造機	東京	3	総合	西山町	—	建機のフィールドテスト					2,200		10	フィールド37,000㎡

企 業 名	本 社	資 本 金	施 設 名	所 在 地	工 場	主 な 研 究 分 野				延 床 面 積	研 究 員	投 資	注 記	そ の 他
						B	T	M	他					
呉羽化学工業	東 京	99	新材料	(研)	—	—	レーザ、ニューセラ、高分子	○	○	40	2.6	本社内		
東京電子産業	東 京	1.3	技術	(セ)	日野市	内	ライン自動化装置	○	○	1,876	100	面積・投資額は東京支店とも		
任天堂	京 都	9.8	開発	(セ)	—	—	ニューメディア	○	○	5,000				
アキレス	東 京	9.5	デザイン	(セ)	—	—	スポーツ用品	○	○					
神奈川県														
イトムン・エンジニアリング	東 京	0.1	技術	(セ)	川崎市	—	セラミクス微粉化	○	○	250	2	本社内		
新電工	川 崎	0.3	研究開発	(セ)	〃	内	電子計測機器	○	○	500	7	本社内		
川崎電線	川 崎	0.9	企画開発部	(研)	〃	内	光ファイバー、新素材	○	○	528	6	本社内		
リスボン製菓	川 崎	0.5	中央	(研)	〃	内	バイオ、醸業	○	○	(数) 2,000	2	本社内		
ユビテル工業	東 京	4	(研)	(研)	〃	内	物理・工学基礎	○	○		9	2	総合(研)内	
東洋製菓	東 京	1.5	技術	(研)	〃	近	工業用ガス	○	○	21,000	300	本社内		
東 芝	東 京	1,393	超LSI研究棟	(研)	〃	内	超LSI	○	○	17,000	35	本社内		
富士通・ゼネラル	川 崎	67	研究棟	(セ)	〃	内	エレクトロニクス	○	○	9,900	50	面積・投資額は工場とも		
小野測器	東 京	6.2	技術	(セ)	横浜市	内	電子計測器	○	○	(数) 16,500	15	本社内		
塩水港精糖	横 浜	17	(研)	(研)	〃	内	マイクロデキストリン	○	○	(数) 430	3	増設		
ウシオ電機	東 京	10.4	生産技術(研)精兵	(セ)	〃	—	ICシュミレーション、光学	○	○	2,400	50	研究員200~300人の計画		
新日本空調	東 京	9	工学	(セ)	〃	—	原子力施設用空調	○	○	(数) 37,000	12			
マツダ	広 島	5.26	横浜	(研)	〃	内	エレクトロニクス、人間工学	○	○	2,000	15			
麒麟麦酒	東 京	4.80	テクニカル	(セ)	〃	内	ビール	○	○	(数) 8,500	120			
森永製菓	東 京	1.41	総合	(研)	〃	内	食品	○	○	(数) 10,000	100			
村田製作所	長 岡 京	20.4	開発	(セ)	〃	内	電子部品	○	○	7,400	250	佐江戸工場内		
松下通信工業	横 浜	7.8	技術研究棟	(セ)	〃	内	エレクトロニクス	○	○	14,000	400	本社内		
古河電気工業	東 京	2.85	中央	(研)	〃	内	電子材料	○	○	9,000	200			
日本発条	横 浜	8.4	日発グループ中央(研)	(研)	〃	内	基礎分野	○	○	2,300	400			
東 芝	川 崎	1,393	オーディオ・ビデオ技術部	(研)	〃	内	音響・映像	○	○	18,000	1.6	港北ニュータウン内		
エム・ジー・エル	横 浜	0.9	技術	(研)	〃	—	精密鋳造金型	○	○	(数) 2,600	100			
リコー	東 京	2.88	中央	(研)	〃	—	電子材料、人工知能、光学	○	○	14,000				
フュレスト	西 ド イ ツ	(研)	(研)	(研)	〃	—	空気圧機構	○	○	(数) 9,700				
日本コダック	東 京	(研)	(研)	(研)	〃	—	OA機器	○	○	3,250				
ソディック	横 浜	1.1	(研)	(研)	〃	—	放電加工、複合材料	○	○	17,000	180			
トーヨーコ	横 浜	4.7	(研)	(研)	〃	—	クリーンルーム、省エネ	○	○	24,000	500			
デュボン・ジャパン	横 浜	テクニカル	(セ)	(セ)	〃	—	電子部品	○	○	33,000	40	本社内。面積等は工場とも。		
日本ビクター	横 浜	1.18	久里浜総合開発	(セ)	横須賀市	内	磁性材料、電子部品	○	○		100			
池田物産	横 濱	2.9	総合技術開発	(セ)	横 濱 市	内	シートの人間工学研究	○	○		40			

企業名	本社	資本金	施設名	所在地	工場	主な研究分野	B	T	M	他	延床面積	研究員	投資	注、その他
フロイント粉体研究所	東松山	0.9	技術開発	東松山市	近	製菓・食品機械						12		
小松川工機	東京	1	生化学	三郷市	内	バイオ	○					8	1	
安川電機製作所	北九州	10.9	技術	入間市	内	メカトロ、ロボット	○							
吉富製薬	大阪	9.6	東京	〃	—	医薬、生化学、遺伝子	○				5,600			
セントラル硝子	東京	8.7	東京	川越市	—	医薬、機能性材料					2,700		7	新研究棟
日産自動車	横浜	1.1	電子機器実験棟	〃	内	ミサイルシステム	○				1,774		12	
ホーヤ	東京	5.2	児童開発	児玉町	内	コンタクトレンズ			○		5,000		17	
酒井重工業	東京	1.6	技術	栗橋町	—	土木機械			○		4,600		10	
高純度化学研究所	坂戸	0.5	新材料	川島町	内	バイオナケミカル、新素材				○	2,475		10	
三井工業	大阪	1.0	関東	大里村	内	OA機器				○			15	
東京 都(区 部)														
大井電気工業	東京	6	中央	品川区	内	エンブラ、ロボット	○				33,000		120	本社内
三共	東京	2.1	バイオサイエンス(研)	〃	内	バイオ	○				430		2.5	
KOA	伊都	4.5	東京	渋谷区	—	磁気センサ、ハードディスク						20		
花王	東京	2.3	知識情報科学	墨田区	内	VAN, I.N.S, P.D				○		60		
王子製紙	東京	2.6	商品	江東区	—						5,176		70	16
藤倉電線	東京	1.5	技術	〃	内	OA機器				○	3,500		400	8
リョービ	広島	5.8		北 区	—	ダイカスト成型					7,200		80	
エスビー食品	東京	1.5	バイオテクノロジー(研)	松福区	—	遺伝子、細胞培養	○				1,750			
高砂鉄工	東京	1.5	(新研)	〃	内	チタン・ニッケル高合金			○					本社内
タムラ製作所	東京	6.5	中央	練馬区	内	新素材、電子部品			○				15	本社内
K D D	東京	3.3	東京(研)第2	〃	—	通信工学				○	9,000			
理想科学工業	東京	1	理想科学	世田谷区	—	事務機				○	920		1.6	
京セラ	京都	3.4	東京中央	〃	—	エレクトロニクス、光学				○				
東京 都(区部以外)														
日立製作所	東京	1.4	基礎	国分寺市	—	バイオチップ、人工知能	○					50	30	
セコム	東京	1.0	テクニカル	三鷹市	—	ニューメディア				○	9,250			
ヤクルト本社	東京	4.5	中央	国立市	—	生理活性物質、酵素	○				7,100		30	増設
日本製鋼所	東京	8.5	(新研)	府中市	内	新素材、電子制御				○		60		
キュービー	東京	4.8	(研)	〃	近	バイオ、ファインケミカル				○	5,500			
共和電業	東京	1.3	技術	調府市	内	人工衛星用センサー				○	3,300		10	本社内
富士通	川崎	1.0	多摩工場	稲城市	内	OA機器				○				研究開発工場に再編
ダン産業	狛江	0.3		東村山市	内	クリーンルーム				○	165			
立石電機	京都	8.5	東京通信	町田市	—	デジタルPBX、LAN				○	5,000		30	

企業名	本社	資本金	施設名	所在地	工場	主な研究分野	B	T	N	他	延床面積	研究員	投資	注、その他
株式会社工業	大阪	130	筑波(研)	豊里町	—	バイオ	○				10,000			第2期工事
パシフィック・コンサルタンツ	東京	4	総合(研)	(筑波)	—	河川改修水理分析					18,000	2		
日本油脂	東京	108	ライフサイエンス(研)	〃	—	微生物、新素材、酵素	○				1,500	30	10	
日本合成ゴム	東京	105	(新研)	〃	子	電子材料、光ファイバ、医薬	○				40,000	60		
日本板硝子	大阪	181	筑波(研)	豊里町	—	光ファイバ、エレクトロニクス	○				5,800	70	14	
戸田建設	大阪	97	筑波技術(研)	(筑波)	—	原子炉解体ロボットなど	○				6,100	80	50	
ダイセル化学工業	大阪	171	新技術(研)	〃	子	バイオ、C1化学	○				26,000	150	100	
日本モンサント	東京	0.3	生命科学(研)	〃	—	農業	○				170,000			
丹精社	東京	7.5	中央技術(セ)	北海道市	内	内政上の技術					2,818			面積は工場とも
花王	東京	232	鹿島(研)	神栖町	内	酵素、たんぱく質、油脂	○				4,500	40	10	研究員は3年以内に100名
日揮	東京	71	大洗(研)	大洗町	—	原子力エンジニアリング					7,650		20	
千葉県														
出光興産	東京	20	営業(研)	市原市	内	ヒートポンプ、コジュネレーション							10	燃焼研究棟の新設
アプライド・マテリアルズ・ジャパン	東京	0.8	総合技術(研)	成田市	予	半導体製造装置	○				3,200		19	
シャープ	大阪	503	東京(研)	柏市	—	エレクトロニクス	○				6,595	60	23	研究員は3年後に150名
京セラ	京都	340	京セラソーラー(セ)	佐倉市	—	太陽光発電システム					3,000		20	
日新製鋼	東京	409	新材料(研)	市川市	内	複合材料								研究員は市川(研)と兼任
東洋酸素化学	東京	0.05	(新研)	浦安市	内	バイオ、食品	○					6		本社も同場所へ移転予定
三井石油化学工業	東京	148	(農薬試験場)	袖ヶ浦町	近	高機能材料、バイオ	○				150,000		100	
ヘキスト・ジャパン	東京	13	(千葉試験所)	成東町	—	西独本社製品のテスト	○				15,000		5	
ニューエツ	富山	10	千葉試験所	神崎町	—	電磁波シールド素材					660	3	3	
埼玉県														
信越ポリマー	東京	42	技術(セ)	大宮市	内	電子材料、シリコン加工					6,400		10	
三菱鉱業セメント	東京	201	大宮(研)	〃	近	ニューセラミクス					33,000		25	
トアエイヨー	東京	3	中央(研)	〃	—	医薬	○				5,000			
大正製薬	東京	150	生物工学研究室(新研)	〃	内	微生物	○							
新東工業	名古屋	26	技術(セ)	浦和市	—	成型加工、新素材					700		3	
アイワ	東京	38	技術(セ)	川口市	—	音響・映像	○				1,280			
進和テック	東京	3	技術(セ)	〃	—	空気フィルター、レーザー加工	○				900		5	
安川商事	東京	1	粉体エンジニアリング(セ)	〃	—	粉体貯蔵・運搬	○					10		
サンケン電気	新座	8.4	半導体技術(セ)	新座市	内	半導体					6,000		30	本社内
日本データセネラル	東京	8.4	開発(セ)	行田市	内	コンピュータ周辺機器	○				6,000	100		
K D D	東京	339	第2(研)	上福岡市	—	VAN、交換機	○				9,000			
山陽国策パルプ	東京	142	東松山コンクリート技術研	東松山市	内	コンクリート混和剤	○				700	8	2	

資料 R & D 立地 一 覧

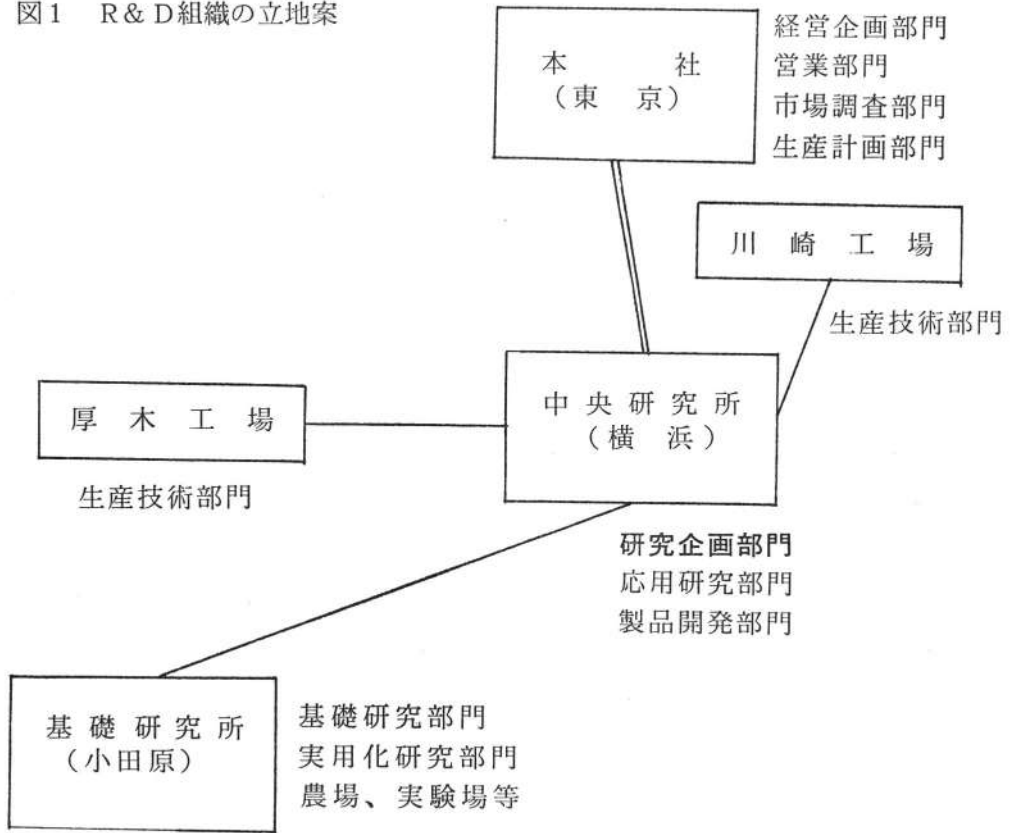
(1983年1月～1986年7月の判明分)

北海道	企業名	本社	資本金	施設名	所在地	工場	主な研究分野			研究員	投資	注、その他
							B	T	M			
	ノボ・インダストリー	東京	126	受精卵移植 (研)	石狩町	内		遺伝子組み換え、酵素			面積は工場とも	
	雪印乳業	札幌			長沼町	—		バイオ	100	0.5	雪印種苗中央研究農場内	
東北												
	住友化学工業	大阪	786	宝塚総合(研)三沢分室	三沢市	—		寒冷地植物バイオ		3.3	本社内	
	松科製作所	天童	0.8	(研究棟)	天童市	内		超精密金属加工、半導体製造	4		山形新聞・相模などの合併	
	バイオ科学研究所	山形	2	(社名に同じ)	山形市	—		バイオ	100	50	研究員250名へ増員予定	
	国産電気	東京	75	開発 (セ)	泉市	—		無線通信、画像処理			本社内	
	米広酒造	会津若松	0.3	バイオテクノロジー(研)	会津若松市	内		バイオ			面積は工場とも	
	信越石英	東京	4	技術 (研)	郡山市	内		光ファイバー	3300	3		
	アルパイン	東京	10	技術 (研)	いわき市	内		オーテック製品開発	2600	10		
	アルパイン	東京	10	総合研究開発 (セ)	いわき市	近		エレクトロニクス	190,000			
	メルカ・ジャパン	東京	13	—	いわき市	内		液晶	3,000	30	投資額は工場とも	
群馬県・栃木県												
	麒麟麦酒	東京	480	開発化学 (研)	前橋市	近		医薬品、酵素	5,200		新研究棟	
	信越化学工業	東京	152	電子材料技術 (研)	安中市	内		半導体材料、光ファイバー	1,800	4	新研究棟	
	住友ベークライト	東京	102	宇都宮応用 (研)	宇都宮市	内		半導体封止材、コート樹脂	2,504	30		
	村田発条	宇都宮	0.8	技術 (セ)	宇都宮市	内		スプリング	460	30	本社内	
	花王	東京	232	加工 (研)	市貝町	内		粉・液・固体の加工技術	地上6階		面積は工場とも	
	東京理化学工業	東京	1	(研究施設)	那須町	内		分析機	(敷) 28,000	5		
	富士フイルター工業	東京	0.8	技術開発 (セ)	氏家町	近		フィルター素材	3,200	4.5		
	雪印乳業	札幌	126	生命科学 (研)	石橋町	近		バイオ、医薬	600			
	麒麟麦酒	東京	480	原料 (研)	喜連川町	近		バイオマス、有用植物	3,000	12		
茨城県												
	川崎重工業	神戸	1,466	調査部分室	(筑 茨)	—		バイオ、新素材、宇宙関連			情報収集機能	
	エーザイ	東京	125	筑 茨 (研)	〃	—		有機合成化学		125	新研究棟	
	アップジョン	米國	\$ 10,000	(研究所)	〃	—		医薬品		120	研究員は10年後1,000名へ	
	住友化学工業	大阪	786	総合研究 (セ)	大穂町	—		バイオ基礎分野	(敷)100,000	200	研究交流を重視	
	スタンレー電気	東京	71	技術 (研)	(筑 茨)	—		発光材料	1,780	5		
	三洋電機	守口	625	筑 茨 (研)	谷田部町	—		免液、ライフサイエンス	(敷) 33,000	100		
	三共	東京	212	(新 研)	(筑 茨)	—						
	神戸製鋼所	神戸	1,014	筑 茨 事務所	〃	—		フィルム素材、樹脂	(敷) 33,000		研究交流機能	
	呉羽化学工業	東京	99	加工 (研)	(筑 茨)	—		メカトロ技術	(敷) 10,000			
	メイテック	名古屋	6.3	技術 (研)	〃	—		受粉即凍結、低温用FRP	(敷) 330	10		
	はくさん	札幌	2.8	低温技術開発 (セ)	谷田部町	—						

生産技術部門は各工場に置くことになる。

以上は、本稿での検討を具体化した一例として構想したものである。R & D の場合、工場のように経済的合理性を徹底させた立地決定をするのではなく、研究員（とその家族）のライフスタイルも考慮し、人的資源を最大限に活用することのできる立地を考える必要があるだろう。

図1 R & D組織の立地案



る。

基礎研究から品質保証までの肥大化したR & D組織を企業の経営戦略と一体的に運営する上で、R & D全体をマネジメントする部門（研究企画部門）の重要性が増す。中央研究所は本社、市場に近接して立地させ、研究企画、応用研究、製品開発の中核的3部門を收容する。ここでは、本社から1時間前後で移動でき、工場にも近接している「情報化都市=インテリジェント・シティ」、横浜市の都心臨海造成地であるMM21地区を選定した。

基礎研究所は中央研究所の管理下で、もっぱら基礎・実用化部門を扱うため、本社・工場との近接性はあまり問題にはならない。むしろ大学などの公的研究機関との近接性が重視される。また、本社、中研、基礎研の3つが同一方向に配置され、鉄道にせよ自動車にせよ、乗り換えなどしなくても相互間の移動ができるように配慮することも大切だ。ここでは、本社（東京）、中研（横浜）の延長線上で小田原・足柄地域を選んだ。東京との連絡には東海道線のほか、小田急線、新幹線が使える、自動車の便も良く、日常的な東京出張にも何ら問題はない。

他の要素との関連で、分野によっては一概に郊外部への立地ばかりが望ましいとは限らない。市場はほとんど都市にあり、多くの大学も都市にある。国際情報もまず都市に入って来る。その意味でも、また次に述べる研究員確保の観点からも、むしろ都市部へのR&D立地を考える必要がある。その場合には用地の確保が問題になるが、2つの解決策が考えられる。1つは工場再開発である。近年、実質的な生産活動は地方やNICSへ移転する傾向があり、都市部には空いた工場が増えている。ここに一部生産機能を残して熟練技能工を温存しつつ、1章で述べたような新しいタイプのR&D工場に再開発することができよう。もう1つは、東京湾、大阪湾岸埋め立て地へのR&D立地である。工場立地規制により新たに生産機能を設けることはできないが、現在郊外に立地しているタイプのものを都市部に立地できる可能性がある。郊外の丘陵地に比べれば交通の便も良い。また、郊外部の自然保護の観点からも望ましい。

v)については複雑な問題がある。R&Dで研究に従事する研究員は学歴も高く、本人および家族のライフスタイルに適合する地域に居住し勤務することを重視する。考慮すべき要素としてまず住宅事情がある。仕事の性質上通勤時間が長くなり、かつ良質のものを確保できる地域でなければならない。また、家族の教育の点で、信頼できる水準の学校教育が行われているか、地域の公立校に信頼が置けない場合でも、然るべき私学へ無理なく通学できる地域内に居住することを求めるだろう。以上の観点からは、東京、大阪の各大都市圏から大きく離れることは望ましくない。

また、研究員本人および家族の余暇活動を保障するという点でもまた彼等の都会的ライフスタイルを考慮することが必要だろう。仕事の生産性の点でも、人里離れた山の中で孤立して研究に没頭するよう仕向けることが必ずしも実績を挙げることにはつながらないし、自然だけが人間に安らぎを与える訳でもない。この観点から、R&Dは大都市圏外であっても、地方都市に立地させるなど都市から遠くない地点を選ぶことが望ましい。

以上のように、R&Dはその各段階に応じて内的要素、外的要素の両方を考慮して立地させなければならない。

IV. まとめ——R&D立地の今後のあり方

今後わが国でもR&Dの充実が進むにつれ肥大化にともなう弊害が発生するおそれがある。そのような事態を予防するためには、R&D自体の明確な組織化、合理的なマネジメントが必要になろう。そして、その組織方針にもとづき明確な根拠の裏付けを持ってR&D各部門の立地決定をすることが望ましい。以下、具体例を用いて説明す

製品開発部門は既に応用技術の確立したいくつかの新技術を取捨選択し、市場動向、原価、生産ラインの状況に沿った新製品を決定する。このため、営業、市場調査、生産管理などの本社各部門はもちろん、実際に生産にあたる工場との密接な連絡がとれる立地条件を満たさねばならない。

生産技術開発部門は純粋に工場の問題である。不良品率の低減、所要時間短縮など、生産コストの低下と品質維持との接点を追究するのであり、本社との近接性はあまり問題にならない。半面、生産を開始した後で製品の改良を必要とすることは少なくないので、特に新製品の生産技術開発部門は前段階のR & D部門に近接して立地することが望ましい。

最後に品質保証部門だが、これには2種類ある。1つは企業が自主的に行うもので、耐久力試験、変質試験などがある。もう1つは顧客の苦情にもとづいて行われるものである。いずれも、その内容が生産工程に原因があるものならば生産技術開発部門、それ以外のものは製品開発部門において扱われるため、当部門単独の立地は考えられない。

2. 外的立地要素

次に、外的立地要素を整理する。

- i) 市場動向の把握……市場地への近接
- ii) 学界・業界の研究水準の把握……大学、R & Dの集積地への近接
- iii) 国際情報の把握……東京周辺への立地
- iv) 用地の確保……郊外への立地
- v) 研究員の確保……大都市圏内への立地

i) については言うまでもない。特に製品開発分野のR & Dでは常に市場動向に接することのできる立地が望ましい。

ii) は、各企業のR & Dの規模・人材が限られている以上、個別R & D内の自己完結的な研究開発はあり得ない、という点から重要である。また、異業種交流によって新たな成果を挙げる可能性も重視しなければならない。しかし、R & Dが企業経営の戦略的部門に深く関わっている点を考えると、R & D間の研究交流に過大な期待を持つことはできないと考えられる。

iii) を立地決定要素として挙げる企業は多くない。研究員の国際化の実現がより重要かと思う。

iv) は大きな問題である。安価・広大で緑豊かな立地点を求めらるならば、都市部の外に立地するのが望ましく、神奈川県厚木市などに大規模な例がみられる。しかし、

業が他分野進出を実現するためのR&Dを新設している。この場合、地域経済維持の観点から既存工場を用いての新分野展開が特に求められよう。

九州地域……半導体関連のものが少しづつ立地し始めている。北海道と同様に農産加工業のバイオテクノロジーへの新展開、伊万里などでの窯業のファイセラミクスへの展開など、可能性は大きい地域であると考えられる。

Ⅲ. R&Dの立地決定要素

前章での現状分析をふまえ、ここでは若干理論的に整理する。

1. 内的立地要素

R&Dの立地を決定する場合に考慮すべき要素には、外的なものとの内的なものがあると考えられる。ここではまず内的立地要素について検討する。

R&Dは企業組織の一部であるから、企業内の他部門との関係の結び方を考慮して立地決定をしなければならない。

そこで、以下にR&Dをめぐる内的システムの流れを整理してみよう。



総ての企業でi～viの全部が揃っている訳ではないし、また相当の大企業以外では各段階が混在しているが、それぞれについて立地の観点から検討しよう。

基礎研究部門は、長期的視野に立ち、具体的な用途を当面は度外視した研究を行うところで、日本企業の弱点はこの部門の貧弱さにあったといわれる。近年はようやく整えられつつあり、市場や工場との関連が薄いので郊外部に立地する傾向がある。

実用化研究部門は、基礎研究によって発見された現象を安定的に実現するための研究を行う部門で、広くは基礎研究に含まれるために立地傾向も同様である。

応用研究部門は、実用化の手法が確立したアイデアを用いて、それがどのような製品に応用できるかを検討する部門である。基本的な製品イメージはこの段階で決定するため、当面の企業経営戦略とも大きく関わって重要な位置を占める。このため、この段階では工場との近接性はあまり問題とならないが、本社との近接性は重視されよう。

所」，群馬県の麒麟麦酒「開発化学研究所」，栃木県の雪印乳業「生命化学研究所」，麒麟麦酒「原料研究所」，岡山県の林原生物化学研究所「細胞研究センター」，香川県の加ト吉「バイオサイエンス研究室」はいずれも食品製造が本業の企業によるものである。従って，これらR&Dの立地した地域は低開発地域ではあっても，地域の農業，農産加工がバイオテクノロジーと結びついて新しい展開を示す可能性を持っていると考えられる。

テクトロニクス分野のR&Dの比率が高いのは神奈川，大阪，兵庫で，いずれも従来からある加工組立工業の集積の上に成り立っているR&Dであると性格づけできる。また，九州地域ではこの分野が50%を占めている点が注目される。

新素材分野は茨城，兵庫および中国・四国地域で比率が高い。茨城ではバイオテクノロジーと結びつけて研究をするところが多く，兵庫ではテクトロニクスと結びつけているところが多い。また，この分野は応用範囲が広いことから，事業分野の多角化と総合化の両面から参入する企業が目立ち，兵庫の久保田鉄工「技術開発研究所」，岡山の三井造船「玉野研究所実験棟」，宇部興産「宇部研究所」などが挙げられる。

5. 地域的特色

以上の検討をふまえて，地域ごとの特色をまとめてみよう。

北海道・東北地域……北部ではバイオテクノロジー，南部へ行くにつれてテクトロニクスや新素材のR&Dが多く立地しており，東北地方南部では京浜工業地帯の外縁部と似た傾向を示している。

北関東地域……茨城を中心に大企業の比較的規模の大きいR&Dが多い。栃木，群馬では工場との結びつきが強いが，茨城では工場とは無関係に基礎研究を担当するR&Dが多い。

南関東地域……埼玉と神奈川で工場と強く結びついたものが多い。しかし神奈川では最近茨城に立地するものと似たタイプのR&D立地が増加する傾向にある。また，南関東は全体にバイオテクノロジー分野の占める比率が小さい。

東海地域……工場と強く結びついており，既存分野の活性化が中心。R&Dが単独で新規に立地する例はほとんどないが，自動車関連企業の多角化指向によって新しい展開に進む可能性がある。

京阪神地域……繊維企業が大規模なR&Dを立地させたのが目立ち，関西系電機メーカーも積極的にR&Dを立地させている。このため東海地域に比べて活気が感じられる。

中国・四国地域……テクトロニクス分野のものは皆無。深刻な不況下にある造船企

向が認められ、半面大阪を始めとした京阪神地域への関東系企業のR&D立地は消極的であり、あっても工場との結びつきを前提としているように考えられる。

3. 工場との近接性

すでに若干検討したように、R&Dは工場との結びつきを持っており、その傾向は今後も増して行くように思われる。そこで、R&D立地点と工場との近接性について地域別に整理したのが表4である。これによれば、全国的には工場敷地内および工場近隣への立地比率が58.0%で半分以上を占めており、R&Dと工場との結びつきの強さを裏付けている。しかしここでも地域による傾向の違いがあり、東海地域、京阪神地域では特に工場との近接性が高い。前節での検討をふまえれば、特に京阪神地域に立地したR&Dは本社か工場への近接性が立地の背景にあることが考えられ、R&D単独での立地が非常に少ない、と性格づけることができる。

工場との近接性を持たないR&Dの立地比率は茨城で極めて高く(81.8%)全国平均(38.2%)の倍以上に達している。また、東京では区部、都下ともに53.8%であるが、東京の場合には工場よりも本社との近接性を重視すべきだろう。

以上、本節と前節の検討を総合すると、R&Dの立地決定に与える要素としては本社および工場との近接性が基本的に考慮されるとともに、茨城に代表されるような特異な立地条件を持つ地域へはこれとは無関係にR&D単独での立地が行われ得る、と考えられよう。

また、筆者は茨城への立地を関東地域への多様な情報集積にもとづくものと当初は考えていたが、その意味からは最も適した立地点である南関東地域への京阪神系企業は少なく、当初の予想が正しくないことが示された。しかし、茨城のR&Dの立地は少なく立地したR&Dの機能を検討すると、情報収集、研究交流を重視したものが少なくとも3ヶ所あり、技術情報に限定すればその集積は大きいのではないかと考えられる。したがって、必ずしも関東地方でなくとも、技術情報の集積を実現させればR&Dの単独立地に適した立地条件を形成することも可能であると考えられる。

4. 研究分野別の立地動向

R&Dの主要な研究分野ごとに地域別の立地動向を整理したのが表5である。これによれば、全国的にはテクニクス(またはメカトロニクスとも言う)と称される加工組立分野のものが39.9%で最も多く、次いで新素材(30.7%)、バイオテクノロジー(24.4%)の各分野が続いている。

バイオテクノロジーの分野は北関東以北および中国・四国地域で比率が高い。北海道の雪印乳業「受精卵移植研究所」、福島県の末広酒造「バイオテクノロジー研究

して小さい数ではないとしても、神奈川県との差は相当大きいと言わねばならない。さらに、埼玉県がやはり9.2%で茨城県と同じ比率を占めている点は注目されてよいだろう。

2. 本社所在地との関連

第I章で述べたように、企業にとってR&Dの重要性が高まり、企業の経営戦略と密接な関わりを持つようになると、一般的にはR&Dと本社とが近接している方が有利になる。半面、本社所在地がR&D立地に適した立地条件を持たない場合には遠隔地にR&Dが立地することもあり得る。以上のような観点からR&D立地点と本社所在地との位置関係を整理したのが表2、表3である。

まず表2を検討しよう。本社所在地と同一の都道府県内に立地したR&Dは、全国的にみると36.6%にすぎず、本社から離れた地点への立地数の方が多い。しかし地域によってこの両者の比率には大きなちがいがあがる。東京に本社を置く企業が極めて多いことから、東京都内に立地したR&Dのうち、都内に本社のあるものの占める比率は80%をこえているし、大阪では同様に90%近い。しかも大阪では本社内への立地比率が44.4%と全国平均(13.0%)を大きく上回っており、本社への近接性が重視されていることが示されている。しかし、大阪では府外に本社を置く企業のR&D立地は1例(11.1%)にすぎず、京阪神地域全体でみてもその比率は41.9%で全国平均(62.6%)をかなり下回っている。逆に、県外企業が占める比率が高いのは茨城県を中心とする北関東(93.5%)および埼玉県(86.4%)である。以上の事実から、北関東および埼玉県では本社への近接性を多少犠牲にしても補って余るR&D立地に適した立地条件を持っており、逆に大阪を始めとした京阪神地域では本社への近接性以外に秀れた立地条件を特に持たない、という状況が考えられる。

そこでさらに詳しく検討するために、各地域ごとに関東地域と京阪神地域に本社を置く企業のR&D立地数をそれぞれ抜き出して整理したのが表3である。これによれば、関東、京阪神ともにそれぞれの本社所在地と同地域内にR&Dを立地させる例が非常に多いのは当然としても、茨城県で京阪神系企業R&Dの立地比率が31.8%と全国平均(19.3%)をかなり上回っている点が注目される。半面、大阪への関東系企業のR&Dの立地は皆無で、しかも京阪神地域全体でも6例のうち5例が既存の工場内への立地であって、R&D単独での立地はほとんどない。逆に、茨城県に立地した京阪神系企業のR&D7例のうち工場内にあるものは皆無で、工場立地予定が1例あるのみとなっている。

つまり、茨城県は本社および工場から遠隔であっても積極的にR&Dが立地する傾

動作が必要で、これは人間がするほかはない。従って、ロボットの性能が向上して微妙・厳密な動作をこなす可能性が大きくなれば、それだけ高度の技能を体現する熟練工の必要性もまた高まる。もちろん、どれほどロボットの性能が向上しても熟練工に頼らねばならない領域や、人手による方が経営的に有利な部門も存在する。

3) 「工場立地動向調査」は指定統計ではないために網羅的でなく、また一般には入手困難でもあるので利用価値は低い。

4) 例えば、製造業企業のR&Dを分離して設立した専門子会社、コンサルタント等がある。また、機械商社などが独自にR&Dを持つとする傾向もある。

5) 半導体デザインセンターをR&Dと位置づける例が見られるが、それは実態に即していないと思われる。その理由は、半導体デザインセンターは、既に製品として完成した素子が顧客の要望に即した動作をするように、バリエーションを設計しているにすぎず、半導体素子そのものを開発している訳ではないため。

II. R&Dの立地の地域的特色

本章ではR&Dの立地動向をいくつかの観点から整理し、その実態を分析し、あわせて地域的特色についても検討する。

1. R&D立地の地域的分布

R&Dの立地数を全国を9地域に分けて示したのが表1である。これによれば、地域的には南関東への立地数が115で48.3%を占めており、圧倒的に多いことがわかる。次いで北関東と京阪神がともに31でそれぞれ13%となっている。つまり関東地方だけで60%以上を占めている。近年、半導体工場が集中的に立地したために「シリコン・アイランド」と呼ばれるようになった九州も、そのハイテク・イメージとは裏腹に、R&D立地に関しては極めて低調である。また、阪神工業地帯、中京工業地帯をかかえる京阪神地域、東海地域でさえ13%程度を占めるにすぎないことから、R&D立地はこれまで考えられて来た工業立地とはかなり異なる立地要素によって行われていることが予想される。

表1では立地数の多かった一部の都府県について内訳数値を示した。それによれば、神奈川県が22.3%を占め、他県を大きく上回っている点が目立つ。また、研究学園都市で名高い筑波地区のある茨城県は9.2%を占めるにすぎず、全国的に見れば決

解決する作業が日常化し、重要な役割を持つようになる。このため、生産現場とR&Dとの交流の頻度が増すとともに、両部門を橋渡しする能力を持った労働者が工場の中核となろう。

以上述べたような条件を実現することのできない部門、企業、地域は長期的には製造業から淘汰されることになる。

2. R & D立地調査の必要性

前節で検討した内容を前提すれば、今後の工業地域はR & D機能を備えていることが不可欠の条件となるであろうことは明らかである。R & D立地に適した立地条件を満たした地域でなければ工場立地は実現しなくなる。人件費や地価が安い、広大な用地がある、租税減免政策をとっている、といったような、ただ単に生産コストを低減する条件しか持たない地域の製造業は空洞化する。

したがって、工業立地研究にあたっては工場の立地分析だけでは十分でなく、R & Dを対象を限定した立地分析もおこなう必要性が生じている。また、地域経済振興の立場からは、R & D立地に適した立地条件を備えることが重要になる。このため、R & D立地動向分析の意義は極めて大きいと言わねばならない。

3. 調査方法

R & Dの立地が問題とされるようになったのはごく最近であるため、名鑑、統計類は全く不備である。例えば、通商産業省が毎年行っている「工場立地動向調査」でもR & D立地の調査を盛り込んだのは1985年が初めてである³⁾。このため、筆者は日経産業新聞に掲載されたR & D関連記事のうち、R & Dの完成・着工・計画発表を報じるものを抜き出して基本資料を作成し、これを中核に他のデータで補強・訂正を行った。調査対象は、1983年1月から1985年7月までに日経産業新聞で報じられたものである。ほとんどが日本の製造業企業のR & Dだが、ごく少数、外国企業、非企業（財団法人等）、非製造業⁴⁾のR & Dを含んでいる。半面、製造業企業の内部組織にあっても、自社製品の顧客へのサービスが主な業務であるもの（ソフトウェアハウスなど）や、半導体デザインセンターは除外した⁵⁾。

1) **research and development** の略。

2) 工場が完全にロボット化されると、ロボットを操作・管理する人員さえいればよく、熟練工の存在価値が全く消滅する、という見解は正しくない。ロボットに動作を覚えこませる（コンピューターのプログラムを作る）ためには、必ず手本となる

してきたわが国も最早その段階を脱して自力で独創的技術を開発する必要に迫られている。その理由は以下のように考えられる。わが国の製品が大量に世界各国に輸出され、その結果対外貿易摩擦が深刻となるに従い、欧米諸国の企業は日本の企業を強大な競争相手とみなすようになった。このため、これまでのように欧米企業からの一方的な技術移転を期待することが困難になった。他方、東南アジアを中心とする新興工業国・地域群（NICS）の工業化がようやく軌道に乗り始め、これら諸国の製品が価格面ではもちろん、品質面でも日本製品と競合するようになってきた。このため、日本企業は NICS 製品との間で品質面での差別化をする必要が生じている。もちろん、NICS 製品に対抗する方法として、価格面の競争力をつけるということも考えられるわけだが、これには2つの問題点があり、実現し難い。1つは、NICS 製品の価格競争力の源泉は日本の $\frac{1}{2}$ ~ $\frac{1}{4}$ でしかない人件費の低さにあり、日本企業がこれに正面から対抗した場合には日本の労働者の生活水準を相当切り下げねばならず、現実的でない。もう1つは、世界的な経済大国の地位にある日本は NICS 諸国の経済発展を援助すべき立場にあり、ましてや NICS 製品と同じ物を NICS 諸国よりも安く売って NICS 諸国の存立と成長を危ぶませるような企業行動をとるとすれば、現在以上の国際的批判を受けざるを得ない。従って、NICS 諸国で生産可能な製品分野は積極的に技術移転・生産移転をおこない、日本ではさらに高品質の製品分野の生産を進め、NICS との競合を避けつつ更に経済成長を続けることが求められている。

要するに、日本企業はこれからの国際経済の中で、欧米企業との完全に対等な競争、NICS 企業の育成と技術援助、を同時に果たしてゆく責任を負っている。従って日本が製造業から撤退してゆく（かつての英国、最近の米国のように）のでなければ、必然的に R & D の充実を通じた独創的製品の開発に活路を見出す外ない。

以上の検討から今後の日本における製造業の未来像を描くとすれば、概略次のようなものとなる。まず、人件費水準に最も敏感な労働集約的部門は大幅に縮小され、ロボット化される。そして、高度な熟練を要する部門が一部に残る²⁾。しかも、製造業における熟練の内容が、従来の職人的なものではなくなる。これからの熟練とは、常に科学技術の発達の最前線と結びついた形でなければ存在し得なくなる。つまり、個々の熟練工は従来の意味の工具ではなく、工場も単なる生産の場ではなく、それ自体が R & D の機能を持つようになる。工場の人員構成も R & D にたざさわる労働者の比率が高まり、直接生産に従事する労働者も厳密な品質管理や、試行生産などで頻繁に変化する作業内容に柔軟に対応できる能力を持つようになる。少品種大量生産よりも多品種少量生産の傾向が強まるため、試行錯誤的にきめこまかく製品の問題点を発見・

近年の製造業における研究開発部門の 立地動向

和田 一 誠

I 本調査の意義と方法

1. 国際分業の進展とR&Dの充実
2. R&D立地調査の必要性
3. 調査方法

II R&Dの立地動向と地域的特色

1. R&D立地の地域的分布
2. 本社所在地との関連
3. 工場との近接性
4. 研究分野別の立地動向
5. 地域的特色

III R&Dの立地決定要素

1. 内的立地要素
2. 外的立地要素

IV まとめ——R&D立地の今後のあり方

I. 本調査の意義と方法

本調査は、わが国の製造業企業の研究開発部門（以下、R&D¹⁾と略す。）の立地動向を、1983年から1985年前半にわたって分析するものである。

1. 国際分業の進展とR&Dの充実

わが国の企業は近年急速にR&Dの充実を図っている。その背景には国際経済の中でわが国の地位の変化がある。明治期以来一貫して欧米諸国からの技術導入に依存

引用文献

- 皆川紘一 (1968・69) : 相模川山間部のローム層と第四紀地史 I・II. 第四紀研究, 7, p.101—108. 8, p.1—9.
- 岡 重文・島津光男・宇野沢昭・桂島 茂・垣見俊弘 (1979) : 藤沢地域の地質. 地域地質研究報告 (5万分の1図幅), 地質調査所, 111p.
- 相模原市地形・地質調査会 (1986) : 相模原の地形・地質, 調査報告書 (第3報), 96p.
- 塩島由道・吉村光敏 (1972) : 道志川の河岸段丘. 日本地理学会予稿集, no.2, p.40—41.
- 徳田光治 (1976) : 上野原盆地における段丘地形の2・3の問題点. 駒沢大学大学院地理学研究, no.6, p.1—15.
- 戸谷 洋 (1961) : 相模野北西部の地形に関するいくつかの問題. 辻村太郎先生古稀記念論文集, p.107—118.
- 宇野沢昭 (1984) : 2万5千分の1相模平野北部周辺地域環境地質図説明書. 特殊地質図 (23—1), 地質調査所, 39p.
- 米澤 宏 (1981) : 相模川中流域・道志川流域の河岸段丘. 関東の四紀, no. 8, p.21—32.
- 米澤 宏 (1985) : 段丘礫よりみた相模川の河成段丘. 獨協中学校・高等学校研究紀要, no.8, p.21—33.

台地に限られることなどから、この構成層は、現中津川方向から、例えば大崩壊に伴なり土石流のような急激な岩屑の供給によってもたらされた可能性が大きい。

田名原Ⅱ面構成層の礫径は、ほとんど変化せず、淘汰度もよい。これは、この段丘が、田名原Ⅰ面の侵食段丘であることに大きく起因していると考えられる。つまり、田名原Ⅱ面構成層は、山間部で新たに生産された岩屑ではなく、田名原Ⅰ面構成層に起源をもつ、再移動性の堆積物であるからである。したがって、田名原Ⅰ面構成層に規定されて、粒径も小さく、淘汰度もよいと考えられる。

陽原Ⅰ面構成層は、礫径の減衰率が大きく淘汰度も悪い。かつ、扇頂部で推定される礫径も大きい。これらの事実は、山間部をかなりの掃流力のもとで流下してきた岩屑が、扇状地部での急激な掃流力の減退によって堆積したことを意味していると考えられる。掃流力が減退する原因の1つとして、扇状地部の河床勾配が急に緩やかになることが考えられるが、陽原Ⅰ面の段丘面勾配は他に比べて急である。他の段丘構成層に比べて、礫径が大きいという事実は、他の段丘構成層に比べて、扇状地に至るまでの掃流力が大きかったと考えなければならない。掃流力に関与する要素としては、前述した勾配・水深・水流の密度をあげることができる。山間部では、陽原Ⅰ面構成層中に認められる古富士泥流が溢流して、谷壁斜面の風成テフラ中に挟在する関係が数ヶ所でみられる。したがって、少なくとも古富士泥流流下時には、山間部での水深はかなり深くなったと予想される。また、構成層中に富士火山起源の玄武岩溶岩礫を多く含むこと、礫と礫の間を充填するマトリックスにスコリア粒を多く含むことなどから、総合的に考察すると、この時期には、山間部から、巨礫を含む、水流密度の高い土石流・火山泥流が何回か流下してきたと予想される。これは、富士山に氷帽がつき、大規模水蒸気爆発ないしは、乾燥岩なだれなどが頻発したことによるのかもしれない。

段丘堆積物の調査には、平面的に把えにくい、露頭条件により測定できる地点が限定されるなど様々な制約がある。しかし、段丘堆積物が堆積時の様々な情報を内包していることから、今後は、方法論も含めより定量・定性的に検討を加えていかなければならないと考えている。

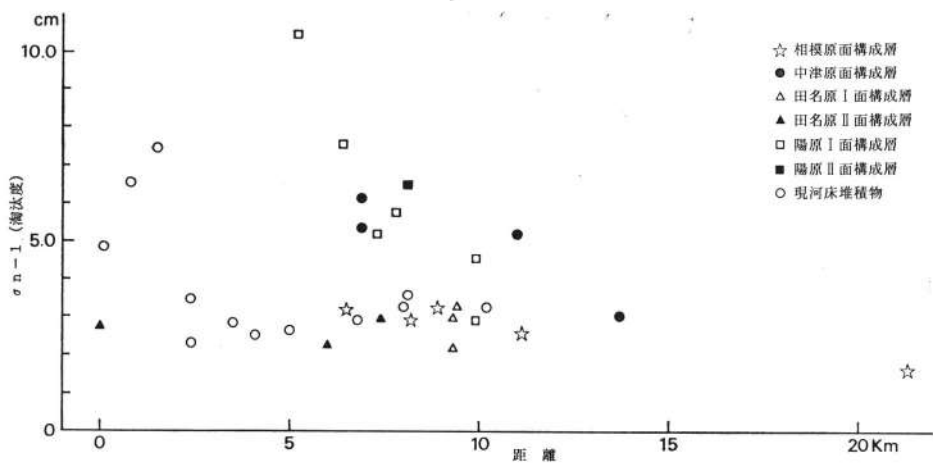


図4 各段丘面構成層および現河床堆積物の淘汰度と距離の関係

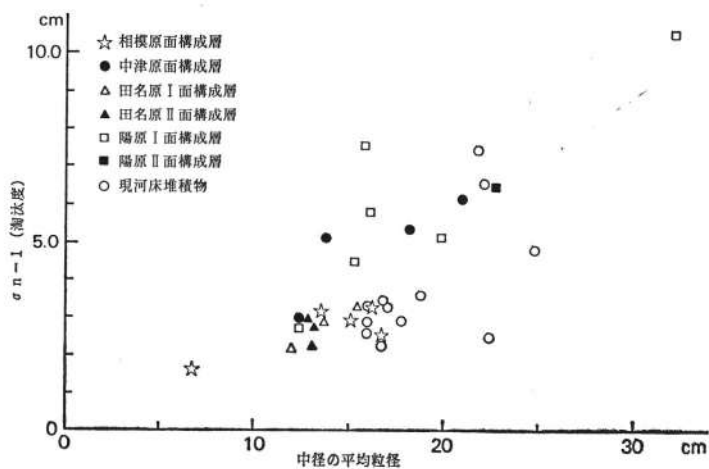


図5 各段丘面構成層および現河床堆積物の平均粒径と淘汰度との関係

4. まとめ

平均礫径と流下距離，淘汰度と流下距離および堆積物の特徴などから，各段丘面構成層堆積時の様子を推定してみよう。

相模原面構成層の堆積時は，図2～5などから判断すると現在の河況に類似した状態であったと考えられる。

中津原面構成層は，礫径の減衰率も比較的大きく，かつ，淘汰度が悪い。また，相模原面・田名原Ⅰ面などと比べて段丘面が急勾配であること，さらに，分布が中津原

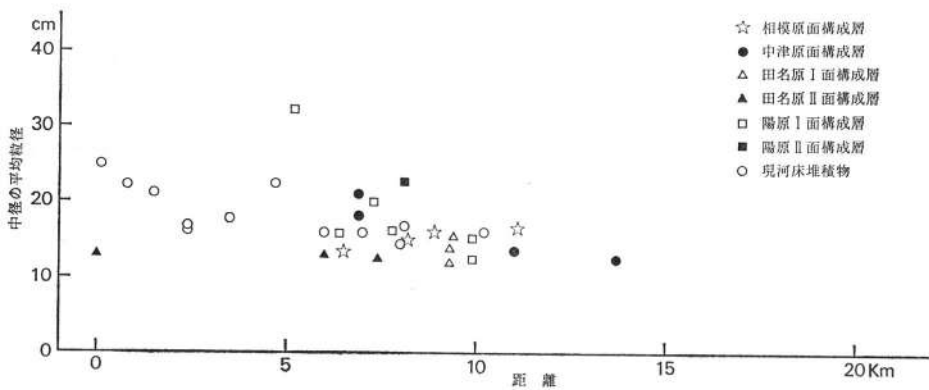


図2 各段丘面構成層および現河床堆積物の平均粒径と距離との関係

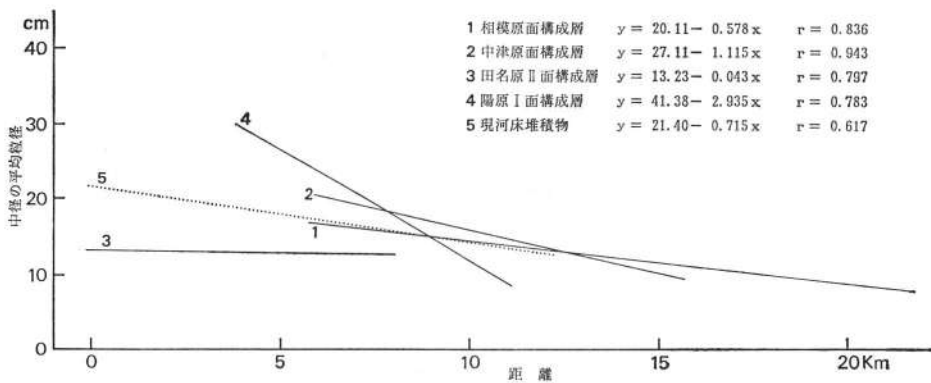


図3 各段丘面構成層および現河床堆積物の平均粒径と距離との関係を示す回帰直線

汰度の数値が5以上になるのは、中津原面構成層(3サンプル)、陽原Ⅰ面構成層(4サンプル)、陽原Ⅱ面構成層(1サンプル)、現河床堆積物(2サンプル)の計10サンプルである。ほかは、5以下であり、特に淘汰度2~4が多い。淘汰度の数値が大きいということは、礫径が不揃いであることの表われである。したがって、中津原面構成層と陽原Ⅰ面構成層の両者は、扇状地部にでてから7~10kmまでは、礫径は不揃いであり、流下するごとに急激にふるいわけがよくなることを示している。

図5は、平均粒径と淘汰度の関係を示している。概して、平均粒径の大きなものが、淘汰度も悪い傾向にあるようにみえる。しかし、平均粒径はほぼ同じでも淘汰度の悪いグループがある。中津原面構成層と陽原Ⅰ面構成層は淘汰度の悪いグループに属する。

表2 計測・計算結果一覧表

露頭 No	地 層	原点か らの距 離(km)	最大粒 径(cm)	平均粒 径(cm)	σ_{n-1} (淘汰度)
1	相模原面構成層	6.5	20.0	13.5	3.14
2	相模原面構成層	8.2	20.0	15.1	2.89
3	相模原面構成層	8.9	25.0	16.2	3.24
4	相模原面構成層	11.1	22.0	16.7	2.55
5	相模原面構成層	21.3	10.0	6.7	1.67
6a	中津原面構成層	6.9	32.0	21.0	6.13
6b	中津原面構成層	6.9	27.0	18.2	5.35
7	中津原面構成層	11.0	30.0	13.9	5.18
8	中津原面構成層	13.7	20.0	12.4	2.98
9a	田名原Ⅰ面構成層	9.3	19.5	13.8	2.99
9b	田名原Ⅰ面構成層	9.3	15.5	12.0	2.20
10	田名原Ⅰ面構成層	9.4	24.0	15.5	3.27
11	田名原Ⅱ面構成層	0.0	20.5	13.2	2.76
12	田名原Ⅱ面構成層	6.0	17.0	13.1	2.26
13	田名原Ⅱ面構成層	7.4	21.0	12.8	2.94
14	陽原Ⅰ面構成層	5.2	51.0	32.2	10.49
15	陽原Ⅰ面構成層	6.4	40.0	15.9	7.53
16	陽原Ⅰ面構成層	7.3	35.0	19.9	5.16
17	陽原Ⅰ面構成層	7.8	35.0	16.3	5.76
18a	陽原Ⅰ面構成層	9.9	26.0	15.3	4.53
18b	陽原Ⅰ面構成層	9.9	18.0	12.4	2.87
19	陽原Ⅱ面構成層	8.1	33.0	22.7	6.46
20	現河床堆積物	0.1	37.0	24.8	4.84
21	現河床堆積物	0.8	37.0	22.1	6.54
22	現河床堆積物	1.5	43.0	21.2	7.44
23a	現河床堆積物	2.4	24.5	16.8	3.47
23b	現河床堆積物	2.4	21.5	16.4	2.29
24	現河床堆積物	3.5	24.0	17.8	2.83
25	現河床堆積物	4.1	26.5	22.4	2.51
26	現河床堆積物	5.0	23.0	15.9	2.62
27	現河床堆積物	6.8	21.5	15.9	2.91
28	現河床堆積物	8.0	25.5	17.0	3.26
29	現河床堆積物	8.1	27.5	18.8	3.57
30	現河床堆積物	10.2	21.0	16.1	3.25

流にむけて減小する傾向にある。これは、山間部を流下してきた岩層が扇状地部に出てからの急激な掃流力の減衰によって、大きなものから順次堆積していくことを示している。

つぎに、数kmの範囲にわたって、数ヶ所で礫径を計測できた相模原面・中津原面・田名原Ⅱ面・陽原Ⅰ面および現河床の堆積物の礫径の変化についてみてみよう。図3は、原点からの距離と平均粒径の関係を構成層ごとに回帰直線で示したものである。回帰直線の傾きは礫径の流下距離に対する減衰率を示している。相模原面構成層と現河床堆積物の礫径は、ほぼ同様な減衰率を示すと同時に、礫径もほぼ同じ値を示している。田名原Ⅱ面構成層は、ほとんど礫径を減じない。一方、陽原Ⅰ面の構成層の礫径減衰率は他に比較して大きく、扇頂部から下流にむけて急激に礫径を減小させる。想定される扇頂部での平均礫径は、41cmに達し、他に比べて、はるかに大きい。中津原面構成層でも、礫径の減衰率は、相模原面構成層や現河床堆積物に比較してやや大きい値を示す。

図4は、横軸に距離、縦軸に中径の淘汰度(σ_{n-1})をとり、流下距離とふるいわけの度合を示したものである。全体的にみた場合、流下距離が増すごとに淘汰度(ふるいわけ)はよくなる。これは、流下の過程で(ふるいわけ)作用が進み、礫径が揃ってくることを示している。淘

地質調査会、1986など)。

久保沢から広がる扇状地部には、大別して5段の河成段丘が発達する(図1)。形成時期の古いほうからあげれば、相模原面群・中津原面群・田名原面群・陽原面群・完新世段丘面群の順となる(表1)。以下に、各段丘面の形成期・堆積物の特徴などを簡単に記載する。

相模原面群は、約6~5.5万年前に段丘化した最も面積の広い河成段丘である。段丘面の平均勾配は6.5‰で、現存する段丘面の最大幅は約4kmである。扇状地部での段丘面構成層の層厚は5~7mであり、富士火山起源の玄武岩溶岩礫は含まれていない。

中津原面群は、中津原台地に広く分布している。約3万数千年前に段丘化した。段丘面の平均勾配は11.7‰でやや急勾配である。中津原面構成層の層厚は約7mである。相模川左岸の構成層中には、富士火山起源の玄武岩溶岩礫が認められる。

田名原面群は、山間部・扇状地部ともに連続的に発達する。段丘形成期の違いによって田名原Ⅰ面とⅡ面とに細分される。田名原面群の主体をなす田名原Ⅰ面構成層の層厚は、扇状地部では、4~6mである。段丘面の平均勾配は7.0‰である。段丘化の時期は、約2.6~2.8万年前と考えられる。田名原Ⅱ面構成層は、田名原Ⅰ面構成層を侵食する薄礫層からなり、約2万年前に段丘化した。田名原Ⅱ面の平均勾配は7.1‰である。

陽原面群は、陽原Ⅰ面とⅡ面に細分される。陽原Ⅰ面構成層の層厚は1~4mと薄く、富士火山起源の玄武岩溶岩礫を多量に含んでいる。また、古富士泥流と呼ばれる火山泥流堆積物も認められる。段丘面の勾配は平均7.6‰である。段丘化の時期は約1.5万年前と考えられる。陽原Ⅱ面の段丘構成層は2~3mと薄く、発達が悪い。段丘面の平均勾配は12‰と急勾配である。テフラから判断される段丘化の時期は約1.5~1.2万年前である。

完新世段丘面群は、数段の河成段丘からなる。段丘構成層の層厚は2~4mと薄い。段丘化の時期は1万年前以降である。

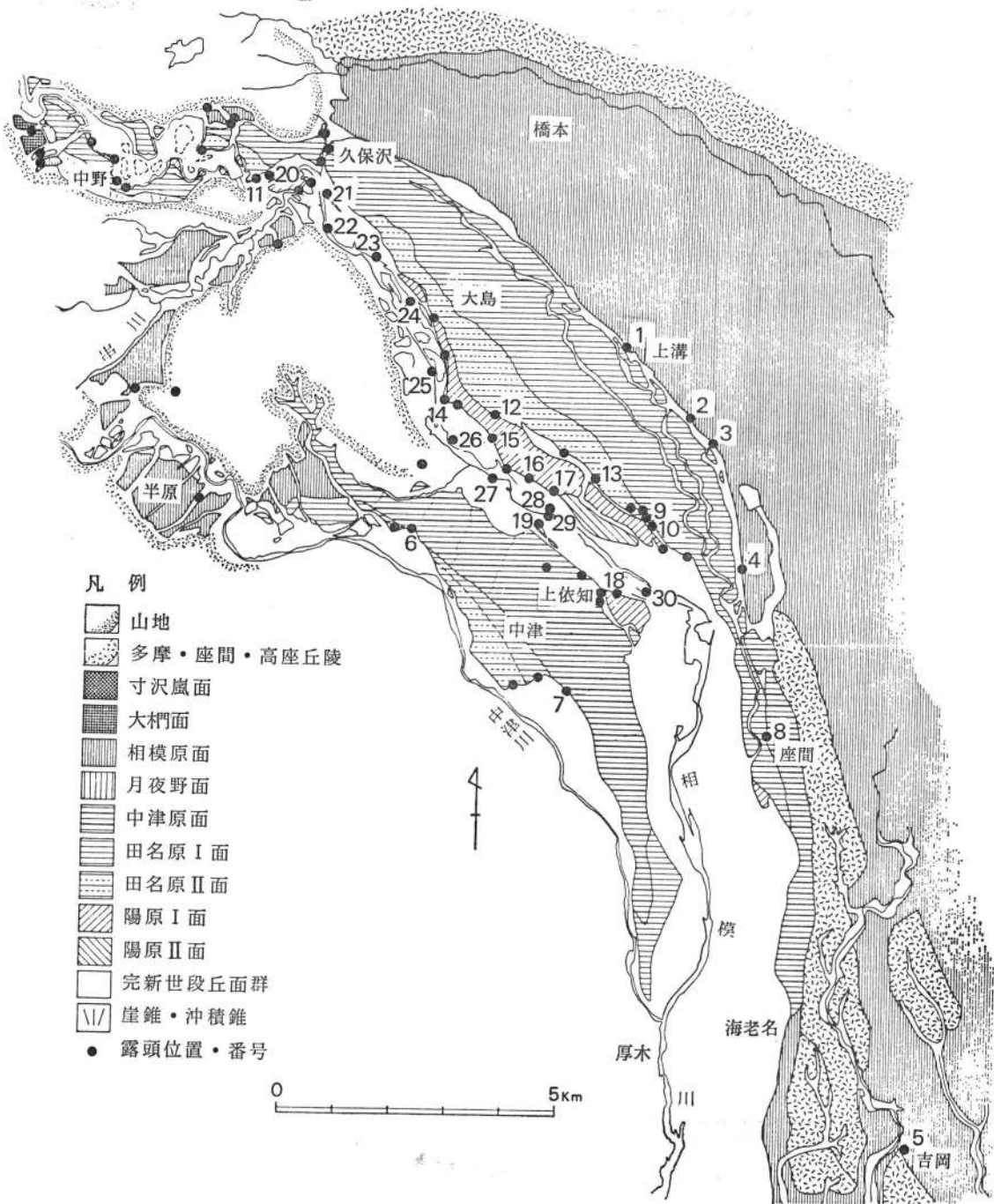
3. 段丘礫の礫径の変化

礫径の測定は、2m×2mの方形枠の中に存在する礫のうち大きいほうから15個を抽出し、長径・中径・短径を計測した。計測した結果のうち中径を用い、15個の平均粒径・標準偏差(σ_{n-1} :淘汰度に相当する)を求めた。計測・計算結果の一部を表2に示す。

図2は、横軸に原点(露頭No.11、ほぼ扇頂部に相当する)からの距離、縦軸に平均粒径を示してある。平均粒径は、全体的には当然のことながら、上流(原点)から下

表 1 編年表

絶対年代 ×10 ⁴ Y.BP.	地質時代		テフ ラ		段丘面・地層	火山活動	
			ローム	鍵層			
1	第 四 紀	完新世	完新世ローム	FB	完新世段丘面群	新富士火山 古富士火山 富士火山 箱根火山	
2.1-2.2		更 後 期	新 期 ローム層	AT	陽原面群		中央火口丘期 軽石流期 新期外輪山期
4.9				S ₂ S	田名原面群		
				BCVA	中津原面		
				TP	月夜野面		
				6.6	OP		
7-9		吉沢ローム層	Pm-I				大柵面
			14.5	多摩ローム層	SuP-II		寸沢嵐面
40		中部					
69	下部						
200	第 三 紀	鮮新世			中津層	古期外輪山期	
700					中新世		西桂層群 (桂川礫岩層)
2600					漸新世		丹沢層群
					始新世		小仏層群
					暁新世		
6400	白亜紀						



- 凡 例
- 山地
 - 多摩・座間・高座丘陵
 - 寸沢嵐面
 - 大柵面
 - 相模原面
 - 月夜野面
 - 中津原面
 - 田名原Ⅰ面
 - 田名原Ⅱ面
 - 陽原Ⅰ面
 - 陽原Ⅱ面
 - 完新世段丘面群
 - 崖錐・沖積錐
 - 露頭位置・番号

図1 段丘面分類図

段丘礫からみた相模川の河成段丘（その2）

米澤 宏

1. はじめに

河成段丘を構成する地層は、段丘礫層・段丘堆積物・段丘面構成層などと呼ばれる。この段丘を構成する地層は、かつての河床の堆積物であり、堆積時の河川の状態を知るうえでの重要な情報を内包している。したがって、河成段丘の形成期・発達史を明らかにすると同時に、段丘面構成層に着目して、調査・研究を進めることは、該当河川がどのような変遷史をたどってきたかを知るうえで重要である。

本稿では、相模川流域に発達する段丘面の構成層および現河床堆積物の礫径（礫の大きさ）の変化から推定される河川営力の変遷について報告し、形成過程の一端を明らかにしたいと思う。

河川の流水が河床におよぼす剪断力を掃流力という。掃流力が大きくなると河床の岩屑粒子が移動を開始する。この時の掃流力を限界掃流力という。掃流力は、水深・河川勾配・流水の密度に比例して増大する。

したがって、山間部で生産された岩屑のうち、粗粒な岩屑は、通常の河流では移動せず、洪水・土石流（山津波）・土砂流・火山泥流や岩なだれなど掃流力を著しく増大させる現象が発生したときに移動すると考えられる。

山間部は、侵食・運搬・堆積の場であり、支流の合流・狭窄部・盆地の存在など掃流力に影響を与える要因が複雑である。したがって、岩屑の配分も複雑となる。それに対して、扇状地部は、山間部の河川に比較して、河床勾配は緩かとなり水深も浅くなるため、掃流力が急激に減衰し、岩屑の堆積域となる。また、掃流力に影響を与える要因が単純化されるため、山間部に比べて、岩屑の配分もより単純化され、礫径の変化を定量的・定性的に把えやすいと考えられる。

2. 相模川の河成段丘

相模川流域は、河成段丘の発達がよく、テフラ（降下火山碎屑物）を用いた詳細な地形学的研究が数多くなされている（戸谷，1961；皆川，1968・69；塩島・吉村，1972；徳田，1976；岡ほか，1979；米澤，1981・85；宇野沢，1984；相模原市地形・

- 2 ダンの詩のテキストは現代綴りの A. J. Smith の編集したペンギン版を用いた。
- 3 Elegy 5: "His Picture", 1. 2.
- 4 もうひとつの異文は 'Except' が 'Perchance' になっている。
- 5 Mario Praz, *The Flaming Heart*, (Gloucester: Peter Smith, 1966), pp. 264-5.
- 6 Emile Legouis and Louis Cazamian, *A History of English Literature*, (London: Dent, 1971), p. 360.
- 7 Praz, p. 269.
- 8 Ernest H. Wilkins, "A General Survey of Renaissance Petrarchism," *Comparative Literature*, 4 (1950), 330.
- 9 Patricia Thomson, "Wyatt and the School of Serafino," *Comparative Literature*, 8 (1961), 293.
- 10 John M. Berdan, "A Definition of Petrarchismo," *PMLA*, 24 (1909), 702-3.
- 11 ペトラルカの『カンツォニエレ』のテキストは Petrarca, *Canzoniere*, 2nd ed. (Milano: Garzanti, 1976) を使用。
- 12 Leonard Forster, *The Icy Fire*, (Cambridge: Cambridge U. P., 1969), p.65 に引用。Forster は「これはみな凝った冗談といえるものだ。ペトラルキストを自負する詩人なら自分の心が彼の恋人のところにあることを一瞬たりとも忘れるだろうか」と言っている。
- 13 *Troilus and Criseyde*, I, 58-60.
- 14 J. W. Lever, *The Elizabethan Love Sonnet*, (London: Methuen, 1956), p.24 にペトラルカの女性の精神的崇高を歌ったものが、単に女性の外面的うつくしさに変えられていることが指摘されている。
- 15 XIV. *Collected Poems of Sir Thomsa Wyatt*, ed. Kenneth Muir and Patricia Thomson, (Liverpool: Liverpool University Press, 1969) による。以下この番号に従う。これはセラフィノの *Strambotti*, 151 をそのまま訳したものの。
- 16 LXXXVI. これもセラフィノをもとにしているが、このイメージは原典にはない。
- 17 CCXXXII. これもペトラルカの CXXXV の自由な翻訳である。
- 18 *Lirici Antichi*, (Venezia; 1784) に所収されているソネット。
- 19 LXIII. これはワイアットの独創とおもわれる。
- 20 たとえば Spenser, *Amoretti*, 73, Shakespeare, Sonnet 109 と 133, Drayton, *Idea*, 23, Constable, *Diana*, 9 (ただしこの番号は *The Oxford Book of Sixteenth Century Verse* のもの) などである。
- 21 *Astrophel and Stella* 中の "Highway, since you my chief Parnassus be" と "O dear life, when shall it be" を見よ。
- 22 XLVIII. マロの詩もワイアット詩集の註に載っているもの。
- 23 Lever, p. 29. p. 10 も見よ。
- 24 Lever, p. 29.
- 25 Thomson, p. 303 の引用による。
- 26 Donald L. Guss, "Donne's Petrarchism," *Journal of English and Germanic Philology*, 64 (1965), 17-28.; rpt. *Essential Articles for the Study of John Donne's Poetry*, ed. J. R. Roberts, (Hamden: Shoe String Press, 1975), pp. 151-4.
- 27 Praz, p. 195.
- 28 Guss, p. 153.

だ。しかし、ダンのイメージには現実のものでないものに奇妙に現実的な感覚を感じる。それこそ「形而上的イメージ」と呼ばれるものである。それは観念の世界に取り込まれた感覚世界なのである。エリオットの有名なことばのように観念と感覚が融合しあっているというのではない。すなわち観念的なものと感覚的なものが、両性類的に存在しているのではなく、観念世界というすくなくとも構築された世界の中に、物が具体性をもったまま取り込まれているのである。物は観念世界をあらわすための具体的な形なのである。これを表す例は、心の交換のイメージよりも、ほかのダンのイメージのほうが適切であるが、女性の不実をあらわす表現としての既製の心の交換というコンシートを、具体性を付与してそれをひとつの表現の形として形成しているのである。

ペトラルキズムの一コンシートからイメージ論に移ってしまったが、心のコンシートの扱い方を見てゆくうちにダンにおいてその終焉あるいは末路を見る思いがするのであるが、同時に「形而上詩」という新たな詩的イメージの生成がここに行われていることを我々はみるのである。そして心の交換というあまりに観念的なイメージは、ダンの極端に具体化するというパロディ化によってその生命を失い、以後恋愛詩から姿を消す。それはダンの後数十年で、カートライト (Cartwright) のつぎの詩に表されているのである。

Tell me no more of Minds embracing Minds,
And hearts exchange'd for hearts;
That Spirits Spirits meet, as Winds do winds,
And mix their subt^lest parts;
That two unbodi'd Essences may kiss,
And then like Angels, twist and feel one Bliss.

心と心が抱き合い、心臓と心臓を
取り換えるなんてもうたくさん
風と風がするように精と精が一緒になり、
微妙な部分を混ぜあわすとか、
ふたつの身体をもたない本質が接触し
天使のようにひとつの至福を引き出し感ずるのだというのは。

註

- 1 この詩は George Puttenham の *The Arte of English Poesie* (1589) に引用されているものだが、シドニーの *Arcadia* に別のヴァージョンがある。

破片の残留という現実にいるのである。「形見」では心の交換が有り得べき事実として背後にある。そしてそれが有りうるとして、ではもしこの場合恋人が不実な女であったらどういうことが起こるか、ということに想像力を働かせたのである。したがって、この想像力はある状況を多少なりとも全体的に見通すものでなければならない。ガスはこれを「劇的想像力」と呼んでいるが、²⁸それは単に劇化する想像力というよりも、そこにいたる以前の現実意識にあふれた想像力を前提にしているのである。それは蚤のなかで自分の血と恋人の血が混ざることが想像できる想像力であり、胎児の生成をも想像できるものである。

Adam and Eve had mingled bloods, and now
Like chemics' equal fires, her temperate womb
Had stew'd and formed it: and part did become
A spongy liver, that did richly allow,
Like a free conduit, on a high hill's brow,
Life-keeping moisture unto every part,
Part hardened itself to a thicker heart,
Whose busy furnaces life's spirits do impart.

アダムとイヴは各々の血を混ぜ、今
錬金術師の同等の火のように、彼女の子宮は
それをぐつぐつと作りあげていった。

一部は海綿状の肝臓になり、高い丘の側面にある水道管のように
命を維持する湿り気をすべての部分に存分に到らせ、
また一部は固くなってもっと目の詰まった心臓となり、
その忙しい炉は生命の精を送ったのである。

ダンに見られるように、詩のイメージはほんの数十年前とは異なった様相を示しはじめていた。それは着実にあるフィジカルなものにたいする意識がはいることになっている。しかしそれはまだ多分に観念的なものからの発想をまぬかれない。それは観念世界のなかに物の意識が周辺からはいることになっているような感じである。ペトラルカのイメージに具体性を文字どおりに求めるものはないだろう。あるいはセラフィーノやテパルデオにイメージの現実感を感じるものはないだろう。ワイアットやシドニーの心のコンシートに感覚的なものを感じるものはないはず

さらに相手が不実の心の持ち主であったら、という仮定から導きだされたコンシートの
なのである。しかもシドニーの詩と違って、ダンの場合は心が臓器ともども交換され
ている。これもコンシートに現実的な具体性を与えることから当然出て来る帰結であ
る。このように、想像上の現実には、具体的な描写—疑似リアリスティックな描写—を
与えるというのは、ダン以前には見られないものであった。そういう意味では、「毒
気」(The Damp)は、ペトラルキズムの常套的コンシート、恋人の姿が自分の心の中
にある、というのをを用いて感覚的にもさらに喚起力のある表現をしている。

When I am dead, and doctors know not why
And my friends' curiosity
Will have me cut up to survey each part,
When they shall find your picture in my heart,
You think a sudden damp of love
will through all their senses move,
And work on them as me, and so prefer
Your murder, to the name of massacre.

私が死んで、医者が原因がわからず、
友人達の好奇心が身体を調べるために
私を解剖させたとする、
そして、彼らが私の心にあなたの絵姿を見い出したら、
愛の毒気がさっと彼らの五感を走り
私と同じ効果を起こすとあなたは考え
そこで殺害から大量殺戮と言う
いいかたにするのだ。

以上の例でわかるようにダンはイタリアのペトラルキスト達の手法を極端にいたる
まで徹底させるのであるが、その際に彼らよりもより一層現実全体への意識が働いて
いる。イタリアの詩人達はペトラルカのイメージから派生的に出てくるもうひとつの
イメージに移行するに過ぎない。ところがダンはペトラルキズムのコンシートを恋人
との関係を表現していく、裏にある事実設定としてもちいるのである。「壊れし心」で
は心がガラスのように壊される、というのを事実と設定し、そこから心の空洞状態と

ではそれ以上に「私」が分裂しているのである。そうして心を送ろうとおもって、胸を裂くとそこには心がない。「壊れし心」と同じように我々は心は恋人のところにいったのだと考える。ところがよく見てみると何かそこにあるのである。

Yet I found something like a heart,
But colours it, and corners had,
It was not good, it was not bad,
It was entire to none, and few had part.
As good as could be made by art
It seemed ;and therefore for our losses sad,
I meant to send this heart instead of mine,
But oh, no man could hold it, for 'twas thine.

だが私は何か心のようなものを見つけた、
しかしそれは色が着いて、角があった。
それはよくもなかったが、悪くもなかった、
誰にもそれ全体が捧げられたことはないし
部分的にもそれにあづかった人もわずかだ。
それはつくり物として最高のものようであった。
だから私達が失ったもののために
私の心のかわりにこれを送ろうとおもったのだ。
ああ、だが誰もそれを持っていることはできなかった、
なぜならそれはあなたのだったから。

心の交換は生じていたのだが、恋人の心はちょっと見ただけでは心には見えなかったのだ。そしてその心の様子が半ば揶揄的に述べられる。もうこの辺で読者は結末をうすうす気づかされるのである。ただ詩人はそれをつかもうとする時まで気づかないふりをしているわけである。冗談といってもいい詩だがしかし巧妙さにおいてセラフィノをはるかに凌駕している。

心の交換は普通心がかよいあっているのを表現するのに用いられるのだが、というのもペトルキスト達はこちらが心を与えても、相手が与えてくれないから苦悩するわけなのであるが、ここでは恋人は心を与えてくれていたにもかかわらずそれは彼女の不実な心そのものだったというのである。これも心の交換が起こるものと仮定し、

When I died last, and, dear, I die

As often as from thee I go

この前死んだとき、というのもあなたから
離れるたびに私は死ぬのだが

これはちょうどデカルトの「我おもう故に我あり」というのを、ヴァレリーが「我時におもう、故に我時に存在する」と書き変えたようなものである。そうして詩人は死ぬのだから何かを形見にのこすと言ったのをおもい出す。そこで彼自身が遺言執行人であると同時に形見にならなければならないという。

I heard me say, 'Tell her anon,

That my self', that is you, not I,

'Did kill me,' and when I felt me die,

I bid me send my heart, when I was gone;

But alas could there find none,

When I had ripped me, and searched where hearts should lie

It killed me again, that I who still was true,

In life, in my last will should cozen you.

私は自分がいうのを聞いた、「すぐ彼女に言ってくれ

私自身が（というのはあなたのことであって、私ではないのだが）

私を殺したのだ」と、そして自分が死ぬのを感じたとき、

死んでしまったら心をおくるように自分に言ったのだ。

しかし自分を裂いて心があるべきところをさがしたが

そこにはなにもなかったのだ。

生きていた間忠節であった私が、最後の遺言で

あなたを欺くことになるとおもって、さらに死ぬおもいだった。

ここでは自分が三つ存在するのである。すなわち、死にかけている自分、その命令を受けている自分、そして自分自身である恋人である。「あなたはあなたのもではなく私のもの、私は私のもではなく、あなたのもの」という謎解きのようないいかたは当時よく見られ、²⁷ 恋人が自分である、という言い方はめずらしくないが、ここ

じ心のコンシートを用いた「伝言」では、コンシートの巧緻化は見られず、むしろ恋人の不実を表現するものとしてアンチ・ペトラルキスト的態度があらわれているのである。この詩の場合も心が恋人のもとにあるというのがまず前提されている。そこで詩人は心を返してくれというのだが、もし、眼や心が恋人のもとで不実や虚偽を学んだならば、かえさなくともよい、と言う、「というのも、そうならばそれは自分のではないから」と。しかし詩人はもう一度言い変えて、やはり返してくれ、という。それというのも、

That I may know, and see thy lies,
And may laugh and joy, when thou
Art in anguish
And dost languish
For some one
That will none,
Or prove as false as thou art now.

あなたの嘘を知り、また見るために。
そしてあなたが心をもたない、あるいは
あなたと同じように
不実であるだけかのために
苦しんでそうして
痩せていく時に
笑いそして喜べるように。

ここには返ってきた眼と心は復讐の道具となるのである。勿論眼が無ければ恋人の不実を眼にすることはできないし、また心がなければ喜ぶことはできないからである。同じような復讐的態度を扱ったものとして、「幽霊」(The Apparition)があるが、これも、ガスによればペトラルキズムのコンシートをダン流につくりかえたものである。²⁶ このようにペトラルキズムのコンシートはアンチ・ペトラルキズムのコンシートに変形されてしまうのである。

しかしイタリア的なウィットィンズムとアンチ・ペトラルキストの態度が最もよくあらわれているのが「形見」(The Legacy)という詩である。最初から、恋人と離れると心が飛んでいって、疑似的死の状態になるという言い方をパロディにし、その言い方の馬鹿馬鹿しさをあきらかにする。

私の裡で心を粉々にした一撃を
愛の神がしたのだろうか。

ダンはおそらくこれを知っていたのだろうが、彼はこのコンサートを、ちょうどイタリアのペトラルキスト達がペトラルカのイメージを具体化したように、具体化するの
である。すなわち、心がガラスのように壊れたということを事実とすれば、心のあつ
たところに空洞ができるばかりでなく、当然その破片が残っているはずなのである。

Yet nothing can to nothing fall,
Nor any place be empty quite,
Therefore I think my breast hath all
Those pieces still, though they be not unite;
And now as broken glasses show
A hundred lesser faces, so
My rags of heart can like, wish, and adore,
But after one such love, can love no more
だが何物も無に帰しはしないし、
どんな場所も真空ではありえない
だから私の胸にはまだ破片が全部残っているとおもう、
ひとつにはなっていないとしても
そして今、壊れた鏡が
無数の小さな顔をうつすように
私の心の破片は好きになったり、願ったり崇めたりするが、
このような恋のあとではもはや愛することはできないのだ。

ダンの想像力はセラフィーノやほかのペトラルキストたちよりもはるかに仮定の現実
の細部を見通す力が優れており、具体性に富んでいる。しかしさらに最後の四行で疑
似現実的描写から「形而上的イメージ」一すなわち具体的なものの外形的あるいは機
能的特徴とある精神的内容との相関的類似に基づいた比喩一に至るのである。

「壊れし心」では通常の心のコンサートとおもわせて、別のもうひとつのペトラル
キズムのコンサートを利用した。ここではまだアンチ・ペトラルキスト的態度はない
が、ペトラルキズムのコンサートを利用する手法はすでに完成されている。一方、同

Mine would have taught thy heart to show
More pity unto me: but Love, alas,
At one first blow did shiver it as glass.

もしそうでなければ、私が初めてあなたを見たとき、
私の心に何が起こったといえるのか。
部屋にはいる時私には心があった、
だが出るときにはもう心がなかった。
もしそれがあなたのところに行ったのなら
それはあなたにもっと私を憐れむように
教えただろう、しかし、愛の神は、
最初の一撃で私の心を
ガラスのように粉々にしたのだ。

この聯の第二、三行だけを読めばペトルキズムを知る者なら、誰でも心が恋人のもとに飛んでいく例のコンシートか、とおもわせられる。しかもそれを「部屋にはいる時私には心があった、／だが出るときにはもう心がなかった」というふうにするで事実を報告するような口調を用いる。しかし我々の期待は裏切られる。事實は愛が心を砕いてしまったというのである。これがどうして心がなくなった、という言い方になるのかといえ、心がガラスのように壊れたということは、本来それが占めていた場所が空洞になったということである。それは心が抜けてた感覚と同じといえるだろう。だからここでは心がガラスのように壊れたというのを比喻でなく事実と仮定しているのである。

しかしこの心がガラスのように壊れるというのはセラフィーノにも見いだせるのである。セラフィーノでは、壊れやすい鏡が恋人のうつくしさをうつしたままで壊れないのに驚く、というのも

．．． quando la uidio quel primo giorno

Subito me senti nel pecto un strale

Non sò s'el colpo lo facesse amore

Che mi fe drento in mille parte il core.²⁵

私が彼女を最初にみた日に
突如胸に矢を感じたのだ

のである。そしてそこから相手の心を自分も持っているという発想につながったのであろう。リーヴァーはワイアットのつぎの詩をペトラルキズムの態度との決裂をしめているという。²⁴ その最後の二行にワイアットは言う

But let it passe and think it is of kinde,
That often change doth please a womans minde. (CXLV)
しかしほっておこう、それが性質だと思おう、
変わることが女にとって喜びだというのは

我々はすでにダンに非常に近いところに来ているのがわかるのである。

3

十六世紀も後半になるとペトラルキズムへの反動がみられるが、ダンはそのもっとも痛烈な攻撃を行ったといえるであろう。ダンが採った方法はペトラルキズムの常套的コンシートをパロディ化することである。このパロディ化においてダンほど徹底的でまた巧緻を極めたものは他には見られないのである。ダンにおいてはペトラルキズムのコンシートはペルラルキズムの女性賛美の対極を表現するものと変わる。勿論その先駆はワイアットにあったものであるが、ダンはペトラルキズムのパロディ化にペトラルキズムの手法を踏襲しそれを徹底させ、それ故にその手法の馬鹿馬鹿しさが露わになるという方法を用いたのである。すなわち、ある比喻を文字通りに外的現実と仮定するその方法をさらに徹底させるのである。

「壊れし心」(The Broken Heart) ではまだペトラルキズム的な主題を扱っているが、ペトラルキズムのコンシートそのものは巧緻にされている。第一聯では、愛は一瞬のものであることを説き、第二聯では、愛は心を飲み尽くすものであり、何の抵抗もできないものだとのべ、そして第三聯で次のように言う。

If 'twere not so, what did become
Of my heart, when I first saw thee?
I brought a heart into the room,
But from the room, I carried none with me;
If it had gone to thee, I know

And right as thou lyst so order me.
But some would saye in their opinion
Revoulsed is thy good intention;
Then may I well blame thy cruelte,
Yf it be so.

But myself I say on this fasshion,
I have her hert in my possession,
And of it self there cannot, perdy,
By no meanes love an herteles body;
And, on my faith, good is the reason
Yf it be so. (XVIII)²²

もしもあなたのそばから離されて、
わたしがあなたをあきらめることがあったとしても
わたしの心と愛情は
完璧なあなたのもとにいつもあるし
あなたの望むとおりにまことをしめす
だがあなたの気持ちはすっかり変わったと
そういう風にいうものがある。
あなたの残酷さを責めてもいいわけだ、
もしそうならば。

しかし同じ風にいうならば
わたしも彼女の心をここに持っているのだ、
そして心のない肉体は決して愛することはできないのだ。
まことにそれは十分理由のあることだ、
もしそうならば。

ワイアットの詩には、マロのにはない女性にたいする不信が見える。ペトラルキズムの常套では女性はあくまで美しく貞淑である。ワイアットはイギリスの愛の喜びは季節のようにきまぐれであるという伝統にしたがっているのである。²³ しかし、この態度がペトラルキズムの女性絶対視から離れて、女性との相対的立場を築いたといえる

それが不思議にしても、もっと不思議なことだ、
密かな作用によって一度の接吻で
あなたの唇に蜜と毒を見だし、
そしてそのかわりに私が心を置いてくるというのは。

もうここには単純な女性賛美はない。こちらが心を与えるのに、相手は喜びと苦悩の両方を与えるのである。

そうして意識が女性と対等になったとき心の交換のコンシートが生じる。ワイアットはジャン・マロ (Jean Marot) の詩を翻訳しながら後半を書き換えてしまうのだ。マロの詩の前半は男が恋人のもとを去るにあたって、彼の肉体が彼女のもとを離れても心を忠誠のしるしとして残して置くというのである。そして後半

Si Faulx rapport qui les amantz blasonne
Te vient disant que j'ayme aultre personne,
Tu respondras: Meschant, point ne le croy,
Car j'ay son cueur; & corps sans cueur, de foy
Ne peult aymer; la raison y est bonne
S'il est ainsi.

もしわたしが他のものを愛していると、
恋人達を嘲笑うその話が届いたならば、
あなたは答えるだろう、馬鹿なこと、
そんなこと信じないわ、わたしのところに
彼の心があるのだもの、心のない肉体は
ほんとうに愛することなんてできないわ
もしそうなら十分理由のあることよ。

マロの詩では、男の心は女のもとにあるのだから、男は他の女を愛せない、というように、一方的に女の方に心があるのだが、ワイアットの翻訳ではこれが次のように変えられるのである。ワイアットのは全文を挙げよう。

Yf it be so that I forsake the,
As banysshed from thy company,
Yet my hert, my mynde and myn affection
Shall still remain in thy perfection;

All this cannot make me restore my pray.
To robbe your good, I wis, is not my mynde,
Nor causeles your fair hand did I display.
Let love be judge, or els whome next we meyt,
That may boeth here what you and I can say.
She toke from me an hert and I a glove from her:
Let vs se nowe, if th'one be wourth th'othre. (XLVIII)

このような脅し文句や無駄な溜息をどうして必要としよう。
こんなことで私の奪われたものが取りもどせるわけではない。
あなたのものを盗もうなどという考えもないし、
意味もなくあなたのうつくしい手を露にしたのでもない。
愛の神か、次に会う者を判定者にしよう
あなたの言い分も私の言い分も聞いてくれるものを。
彼女はわたしの心を取り、わたしは彼女の手袋を取ったのだが、
わたしの心は手袋に値するのだろうかを。

セラフィーノでは最後の決定は恋人に聞きたいというのであるが、ワイアットはこれを第三者に委ねるのである。同じ趣向をワイアットのオリジナルとおもわれる詩ではつぎのように女性の与えるものがはるかに質を変える。

Nature, that gave the bee so feet a grace
To fynd hony of so wondrous fashion
Hath taught the spider owte of the same place
To fetche poyson, by straynge alteration.
Tho this be straynge, it is a straynger cace
With oon kysse by secret operation
Boeth these at ons, in those your lippes to fynde,
In change wherof, I leve my heart behinde. (LXVIII)

素晴らしい蜜をみつけるのにそんなにも
ふさわしい恵みを蜂に与えた自然は
蜘蛛に不思議な変質によって同じ場所から毒を出すことをおしえる。

Hertles, alas, what man

May long endure?¹⁹

これ以上の酷い死があるだろうか、
私の喜び、幸福、楽しみ、至福が
見えなくなってしまった時の死よりも。

.....

というものも私は生きているように見えるが

私の心は去ってしまったのだ。

だから私を守るものとしてなく

はかなくものがれようと

するのだが、

死に向かっているのだ。

心がなくて誰が長く

生きていられよう。

これらの例でわかる通りワイアットのイメージは内面の表現として使われており、イタリアのペトラルキストたちの外面に向かう傾向はみられないのである。そういう意味ではワイアットの翻訳のほうが、もとのものよりも詩になっているものが多い。しかしコンサートそのものを巧緻にするというのはワイアットには見られないのである。

心の交換のコンサートを除けば、以上ワイアットがもちいたような表現はペトラルキズムの常套的表現としてはかの多くのイギリス詩人に見られるものである。²⁰ところが不思議なことに心の交換のコンサートは見当たらないようなのである。シドニーに、はじめに引用したのと同巧の言いまわしが見られるのみである。²¹心の交換はシドニーで突如現れたのであろうか。しかし交換という点では、心の交換でなくとも心と恋人の何か持ち物との交換ははやくにあらわれている。これはセラフィーノの詩にあるのだが、ワイアットがこれをそれほど原文を崩さずに訳しているのをそれを挙げる。

What nedeth these thretning words and asted wynde?

フィーノの語法をそのままうつしたようなものも多く見られる。たとえば、「それを苦しめるために私の心をあなたに与えたのではなく、(‘My heart I gave the, not to do it payn)』¹⁵とか「あなたは私の心をあなたのところに持っているので(‘Syns that thou hast/My hert in thy demayne’)』¹⁶とか、あるいは逆に例の恋人のほうが奪うというものもある。

She is the Rok, the shippe ame I.
That Rok my dedelie ffoo
That drawithe me there, where I muste die
And Robbithe my harte me ffroo.¹⁷

彼女は岩, わたしは船
岩はわたしの天敵
死を免れぬ所に引き寄せ
わたしの心を取り去る

心を失うことは魂を失うのと同じであるからそれは疑似的死の状態になる。セラフィーノにも「あなたは私の魂も心も持っているので私は死んでいるようなものだ」¹⁸というのがあるが、ワイアットの次の詩はそれを心理的苦悩としてうたっているのである。

What deth is worse then this
When my delight
My wele, my joye, my blys,
Is from my sight?
.....

For though I seme alyve,
My hert is hens
Thus botles for to stryve
Oute of presens
Of my defens
Towerd my deth I dryve.

どうしたらよいのだ。」「取り戻せ、命を
持たぬものは死ぬことができないのだ。」¹²

ここでは心が恋人のもとに行ってしまったということが、死のうとおもっても死ねないというパラドックスを成り立たせる事実として前提されているのである。

この心のイメージから、当然の帰結として、もし愛される者も愛しかえすとすれば、心の交換が生ずることになるわけである。しかしそのためには、ペトラルカのような一方的な女性崇拜では起り得ないであろう。イタリアのペトラルキスト達はペトラルカの精神を崇めるといふ形式だけはまもっている。そうすると心の交換があらわれるのはもっと現実的な恋愛が見られるところということになるが、それがどこに最初にあらわれるか、確定することは不可能かもしれない。というのも、ペトラルキズムの語法はそれぞれの詩人がそれぞれの詩人を模倣しながらまた模倣されていく伝統であるから、記録に残っていないものを模倣あるいは借用したことがおおいにありうることだからである。しかしイギリスにおいては、心の交換は早くもワイアット (Sir Thomas Wyatt) にあらわれるのである。そこで眼をイギリスに転じよう。

2

イギリスにおけるペトラルカの最初のあらわれはチャーサーであるが、¹³ 『カンツォニエレ』の第八十二歌を翻訳したものであって、彼をペトラルキストと呼ぶわけにはいかない。イギリスで最初のペトラルキストと言われているのはサー・トマス・ワイアット (Sir Thomas Wyatt) であるが、彼の場合もその詩は大部分ペトラルカやセラフィーノその他のペトラルキスト達の翻訳あるいは翻案なのである。しかしその翻訳のなかにワイアットの独創性をみようとすることもできる。というのも翻訳の過程でペトラルカ的な女性賛美の精神がイギリス流の女性不信へと変えられていくのである。¹⁴ そういう意味ではペトラルキズムの精神はイギリス人気質とはなじまないのかもしれない。したがってペトラルキズムはイギリスに入って随分その質を変えることになる。

ここでイギリスにおけるペトラルキズムを論ずるわけにはいかないので、我々が追っている心のコンサートを通してのみこの面を考えてみることにする。今言ったようにワイアットの恋愛詩はほとんど翻訳であるから、そのイメージにはペトラルカやセラ

そこに私の心がある。そして私から心を奪った人も。
ここには私の姿があるだけだ。

あるいはこちらから心を差し出すということもある。

Mille fiate, o dolce mia guerrera,
per aver co' begli occhi vostri pace
v'aggio proferto il cor. . . .

(XXI)

何度となく、おお優しき敵よ、
その美しき瞳と休戦せんがため、
心をさしだしたことが……

こういう風にペトラルカのイメージは簡単な詩的比喩であって、特にそれが特徴的
なコンサートとはいえないものである。ところが心が恋人のもとにあるというのがセ
ラフィーノになればつぎのような詩になってしまうのである。

Morte! - - Che uòi? - - Te bramo. - -Ecco mi apresso.
- - Prendemi! - -A che? - - Che manchi el mio dolore.
Non posso. - - Ohimé! non puoi? - - Non per adesso.
- - Perché? - - Però che in te no tegna il core.
- - Che è facto? - - Hor non sai, stolto, oue l'hai messo?
- - Ah, ah. - - Che c'è? - - Si, so. Ne è causa amore.
Ma che faró? - - Fátte! restituire,
Ché chi uita non ha, non può morire.

「死よ。」「何がおのぞみだ。」「おまえが欲しい。」「ここにいるぞ。」

「私を持っていけ。」「何故だ。」「苦痛を取り去るためだ。」

「それはできない。」「なんてことだ、できないのか。」「今はできないのだ。」

「何故だ。」「お前には心がないからだ。」

「どうしてそんなことが。」「愚か者め、それをどこに置いてきたかわからないの
か。」

「ああ、ああ。」「どうした。」「そうだ愛がそもそもの原因なのだ。」

眼からこのような二つの泉が生まれるので
私がいるところ雪は一時も残りはしない

目からは涙があふれ、心は恋の炎で燃えているので自分の回りの雪はみな溶けてしまうというのである。これを見るとわかるように詩的内面はまったく無視されている。この時代のイタリア文学は宮廷の文学であり、そこでは極端な知的傾向があり、詩的深みよりも当意即妙の才がもてはやされたのである。たとえば恋人の眼だけを賛美するソネットを百も書いたり、さまざまなパラドックス、たとえば愛するものよりも愛さないものが愛されるべきだ、とかいうことが論じられ（ダンもこの種のパラドックスをいくつか残しているが）、いわば詩もそのひとつの「知的ゲーム」となっていたのである。¹⁰

我々は今心の交換のコンシートを考えたいわけだが、これもペトラルカ自身に見い出せるというよりも、ペトラルキスト達が生み出したもののようである。と言うのも、ペトラルカの『カンツォニエレ』に見られる心のイメージは、恋人のもとに心が飛んでゆくとか、恋人が自分の心を奪ってしまうとか、あるいはそれ故に心が恋人のもとにあるという言い方が見られるのみである。たとえば、離れていく恋人を魂がそのままひかれて行く気持ちを表現したもの

largata al fin co l'amorose chiavi
l'anima esce del cor per seguir voi,
e con molto pensiero indi si svelle.

(*Canzoniere*, XVII)¹¹

ついに愛の鍵によって、解放放たれて、
魂が心臓を離れ、あなたを追う、
思いもおもく、そこを離れる。

この魂が恋人のもとに飛んでゆくというのが、心が恋人がもとにある、という言い方にかわるのである。ペトラルカ自身もそういう使い方をする場合がある。

ivi è 'l mio cor, e quella che 'l m'invola;
qui veder pòi l'immagine mia sola.

(CXXIX)

いいかえれば「ペルラルカの後に恋愛詩を書くのはすなわちペトラルカ風を書くことであった」のである。⁶ しかしペトラルカは非常に独自の精神の持ち主であってその精神をまねるとするのはほとんど不可能であった。「ペトラルカは始まりではなく、終わりであった。彼の『カンツォニエ』はプロヴァンスの詩人や甘美体詩人によって発明された愛の理論や求愛の様式の集大成であった。心理的あやに関するかぎり、彼は時代より先行していた。だから彼の模倣者がこの方面で新たなものを発明するのは不可能であった。細部を粉飾したり、古いシチュエーションを目新しい表現にかえるとかによってのみ、創意がうまく発揮されたのである。」⁷ イタリアのペトラルキスト達が用いた手法は、ペルラルカの使ったあるイメージを事実と仮定し、そこから派生する事実を引き出して、そこに軽妙の才を発揮するというものであった。これは十五世紀の終わりのペネディクト・ガレット (Benedicto Gareth, 通称カリテオ Chariteo) に始まる。「彼の重大で感染的な罪はペトラルカの隠喩を具体化することである。つまり本来その隠喩にはない文字通りの実在性をそれに与えたのである。」⁸ この傾向がセラフィーノ (Serafino dell'Aquila) やテバルデオ (Tebaldeo) に引き継がれていたのである。

トムソンが挙げている例を引いてこの具体例を見てみよう。『カンツォニエ』の第五十五歌に次のような詩句がある。

Qual foco non avrian già spento e morto.

L'onde che gli occhi tristi versan sempre?

絶え間ない悲しみの涙の波が

どんな火を消し去ってしまわなかっただろうか。

涙が恋の火を消し去ったと思ったころ、彼女の姿を見て再び燃え上がるという、涙と火との対立が内面の葛藤をあらわす比喩となっているのであるが、テバルデオ (Tebaldeo) はこの涙と恋の炎という「ペトラルカのイメージと二項対立を文字通りの事実として扱い、それを誇張し内面の状況ではなく外面の状況に関係づけるのである。」⁹

E si gran fiamma me arde dentro e di fora

E de gli occhi mi surgon due tal fonti.

Che non dura ove io sto la neve un hora.

内にこんなにも大きな火が私を燃やし

いうまでもない。またこの時代魂というのは肉体とは質が違うがある実体を持ったものとして考えられていた。この魂の有り場所が心臓なのである（「あなたの絵姿は私の魂が宿っている心臓に宿ります」³）。そこから魂と心理的な意味での心が同一視され、魂と同じように心も肉体から出てゆく、といういい方になるのである。そうすると‘heart’ということばはここではほとんど魂に近いスピリチュアルな実体としての心とそれが宿る場所という二通りの意味で使われている、と解さなければならない。「彼のだった」心は臓器としての心であって、そこに乙女の心がはいったので、今は中身も容れ物も彼女のものとなった訳である。

一方ダンの「愛の謎は、あなたの心が出ていってももとのところのこっているのであって、／失いながら、失っていないのである」というのも心の交換だと見れば理解できるのであり、事実三、四行目については次のような異文がある。

Except mine come when thine doth part
And in such giving it, thou savest it.⁴

あなたのが出ていく時私のがはいらなければ。

こういう与え方であなたはじぶんのを取って置くのだ。

しかしこれでははじめから種明かしをしているようなもので、ダンのパラドキシカルな言い方の面白さが失われてしまう。この後の行で心の入れ換えではなく、心の合体を主張するのであるから、はじめから二人の心を同一視するいい方によってそれを予告しているのである。

シドニーやダンの詩を見てわかるように、心の交換というのはひとつの常套的なコンシートであったようだが、これはペトラルキズムのコンシートに源を発するものである。ペトラルキズムというのは十五、六世紀においては恋愛詩の語法、イメージ、シチュエーションの全ヨーロッパ的源であったのであって、マリオ・プラーツはこのペトラルキズムの流行を次のように説明している。

彼（ペトラルカ）は新しい文学ジャンル、すなわちペトラルカ風ソネットというものを定着させた流行をヨーロッパにうみだし、ほとんどビザンチン美術の伝統のように固定した慣用法をもった広汎な一派をつくりだしたのである。数世紀の間ペトラルカ様式はヨーロッパ中で一種の恋愛詩の共通語（lingua franca）となった。そしてこの伝統は廃れ、二度と再生することはなかった。ちょうどビザンチン美術がそうであったように。⁵

わたしは彼を愛しむ、わたしの中にあるのだから。
恋人はわたしの心を、わたしは彼の心をもっている。¹
つぎにダンの詩、

Thou canst not every day give me thy heart,
If thou canst give it, then thou never gav'st it:
Love's riddles are, that though thy heart depart,
It stays at home, and thou with losing sav'st it:
But we will have a way more liberal,
Than changing hearts, to join them, so we shall
Be one, and one another's all.²

あなたは毎日私に心を与えることはできない
もしそれができるといふなら、与えていなかったということだ。
愛の謎はあなたの心が出ていってももとのところにあるのであって
失いながら失っていないことなのだ。
だが私達は心を交換するよりももっと進歩的なやり方でいこう、
つまりふたりの心を一つにするのだ。
これで私達は一つになるのであり
お互いがお互いのすべてとなるだろう。

二つの詩を比較してみると、シドニーのは心の交換が基本のイメージであり、ダンは心の合一をテーマにしているように見える。また一見シドニーの詩は単純で、ダンの詩は人をとまどわせる言い方を用いているが、前者にも実は考えさせる部分があるのである。それは第二聯の三行目の「彼はわたしの心を愛す、前は彼のだったのだから」というところである。なんでもない素朴な乙女の口調でいわれているにもかかわらず、ダンの「愛の謎はあなたの心が出ていっても元のところにあるのであって、失いながら失っていないことなのだ」というのと同じくらいとまどわせるものなのである。というのは単純に心が入れ替わるのであれば、入れ替わる前の「わたし」の心はやはり「わたし」の心であって、いま彼の心になったわけであるから、「前は彼のだった」というのはおかしいのである。あるいは入れ替わる前から「わたし」の心は「彼」のものだった、というのであれば、入れ替わったあともやはり「彼」のものであって、過去形になるはずはないのである。ではこれはどういう意味なのだろうか。

英語の 'heart' は心理的な心も意味するし、臓器としての心臓を意味することは

心の交換—あるペトラルキズムの コンシートをめぐって

滝口晴生

1

先ずつぎの二つの詩を比較して見たい。はじめのはシドニー (Sir Philip Sidney) のものであり、二番目のはジョン・ダン (John Donne) の「愛の無限」 (“Love’s Infiniteness”) の一節である。

My true love hath my heart and I have his,
By just exchange one for the other given:
I hold his dear, and mine he cannot miss,
There never was a better bargain driven.
My true love hath my heart and I have his.

His heart in me keeps him and me in one,
My heart in him his thoughts and senses guides.
He loves my heart, for once it was his own:
I cherish his, because in me it bides.
My true love hath my heart and I have his.¹

恋人はわたしの心を、わたしは彼の心をもっている
お互いどうし取り換えて。

わたしは彼の心を大切に、彼もわたしのを手離せない
これがほんとうの愛の取り引き。

恋人はわたしの心を、わたしは彼の心をもっている。

彼の心はわたしの中で彼とわたしを一つにし、
わたしの心は彼の心を司る。
彼はわたしの心を愛す、前は彼のだったのだから

- (注14) a.a.O. s. 561—562
(注15) 木村謙治著『若きゲーテ』研究(改訂版)弘文堂発刊 132頁。
(注16) a.a.O. s. 614
(注17) Goethe in Selbstzeugnissen und Bilddokumenten hg. v. Peter. Boener. Rowohlt
(RO RO RO) Verlag. 1973 s. 41—42
(注18) J. W. von Goethe; Aus meinem Leben, Dichtung u. Wahrheit, Aufbau-Verlag.
1967 s. 764
(注19) 独協中学校・高等学校「研究紀要」第9号, 柿原啓志論文(試論1 f(注1) s. 21
参照)
(注20) J.W. von Goethe; Götz von Berlichingen mit der eisernen Hand, ein Schauspiel.
Philipp Reclam Jun. Stuttgart. 1969. s. 109
(注21) a.a.O. s. 110
(注22) a.a.O. s. 111

尚、ここに挙げた(参考)ならびに(注釈)に関しては、既に発表した筆者の小論『疾風怒濤を背景とした戯曲(ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン)に展開されるゲーテの主題を中心に、試論1』<独協中学校・高等学校「研究紀要」第9号 昭和61年3月20日発行>の中で論じ得なかったものに限り記述することとした。従って筆者の稚拙なる小論をお読みいただけるものなら上記小論もご参考いただければ幸いに思う次第である。また小論を執筆するにあたって参考にさせて頂いた重要な文献の一覧は、さきの〔試論1〕に全て掲げた故、今回はこれを割愛したことも付記しておく。

同時に(i)として結びを予定していたが紙面の都合上、今回は無理と判断し、いずれの機会かに掲載することとしたい。

聞こえるのは、何も私に限ったことでもないであろう。

(昭和61年11月)

Anmerkungen : (参考) (注釈) [試論 2]

- (参1) 第4部20章から成る。その執筆期間は1811年より1831年に亘った。
- (参2) 当時、ダルムシュタット市の陸軍主計官。ゲーテ作品『ファウスト』に登場するメフィストフェレスは彼をモデルにしたものである。彼はまた“Frankfurter Gelehrten Anzeigen”及び“Deutsche Merkur”誌などの執筆者でもあった。
- (参3) “Urgötz (1771年)”は59場であった。後に完成する“Götz von Berlichingen”に於て56場ものとして改作された。
- (参4) ライプツィヒ時代、それ以来の旧知の友であり、当時はブラウンシュヴァイク公使館の書記をしていた。72年ピストル自殺を遂げるが、ゲーテはこの不幸な友を作品『ヴェルテル』のモデルとして登場させると同時に、作品の終幕における主人公の非業な最後を重複させ描写したものである。
- (参5) プレーメン公爵領より派遣された査察使節団付きの書記であった。後年ハノーヴァーの宮廷顧問官となる。『ヴェルテル』のモデルにもなった。
- (参6) 『ヴェルテル』中に登場するロッテのモデルである。73年ケストナーと結婚。
- (参7) シュトラースブルク時代、ゲーテはゲッツの自叙伝を入手し、15・16世紀のドイツ史の研究やゴチック建築への興味を示す。
- (参8) 『ファウスト初稿』(1772—1775年)、『ファウスト断片』(1778—1790年)、『ファウスト第一部』(1797—1806年)、『ファウスト第二部』(1825—1831年)の順に執筆された。『ファウスト第二部』の発表は翌年、即ち1832年、ゲーテ死去の年であった。
- (参9) 詳細に関しては不明であるが、知り合ったのは1759年。ゲーテ初恋の女性であった。
- (参10) Kätchen Schönkopf (1746—1810)。愛称 Annette とも呼ばれ、ライプツィヒのぶどう酒商であったクリスティアン・ゴットロープ・シェーンコップの愛娘である。
- (参11) 『ゲッツ』で現われるヴァイスリンゲン、『クラヴィーゴ』に登場する王室記録官クラヴィーゴを指す。
- (参12) Ulrich von Hutten (1488—1523)。人文主義者であった。
- (参13) 木村謹治著『若きゲーテ』研究(改訂版)弘文堂書房刊行(昭和13年)。
- (参14) Albrecht von Haller (1708—1777)。近代実験生理学、生物学分野の創始者であり、詩人としても啓蒙主義的作風の詩や政治小説を著した。
- (参15) 木村謹治著『若きゲーテ研究』。534頁より。

(注8) Johann Wolfgang von Goethe : Goethe Poetische Werke Autobiographische Schriften
1. Aus meinem Leben Dichtung und Wahrheit, Aufbau-Verlag, 1967. s. 528.

(注9) a.a.O. s. 576—577

(注10) a.a.O. s. 613

(注11) a.a.O. s. 763

(注12) a.a.O. s. 499

(注13) a.a.O. s. 560

第5幕13場（ハイルブローンの牢屋にて）

ゲッツ：「お前はゲッツを捜しているのか？ ゲッツはもうすでに死んでしまった。奴等は次から次へと俺を切り裂いた。まず手初めに俺の片腕を、その次には自由を、遂には財産と名前までも……」

5. Akt (Gärtchen am Turm)

Götz : Allmächtiger Gott! Wie wohl ist's einem unter deinem Himmel! Wie frei! (注21)

第5幕14場（牢屋のきわの小さな庭にて）

ゲッツ：「全能なる神よ！ 貴方様の下では何んと人間は気持ち良く過せるのでしょうか。何んと自由なのでしょう。」

Götz : Arme Frau! Ich lasse dich in einer verderbten Welt. Lerne, verlaß sie nicht. - Schließt eure Herzen sorgfältiger als eure Tore. Es kommen die Zeiten des Betrugs, es ist ihm Freiheit gegeben. Die Nichtswürdigen werden regieren mit List, und der Edle wird in ihre Netze fallen …… - Himmlische Luft - Freiheit! Freiheit! (Er stirbt.) (注22)

ゲッツ：「哀れな妻よ。私はお前をこの腐敗し切った世の中に残してゆく。レルゼ、妻を頼むぞ！ お前たちは家の門をかたくしめる以上に心の扉をしっかりと閉めねばならぬ。偽りの時代が近づいて来る。自由はその偽りに身を委ねられてしまうぞ。卑劣な連中は偽善を傘に世を統治するだろう。気高い者たちは彼等の手に陥るだろう。……素晴らしい空気だ。自由！自由！（ゲッツ死す）」

この終幕で表現されるゲッツの一語一語は我々を惹き付け、読む者にたとえようのない感動を与えてくれる。詩人の果てしない情熱が滲み出され、作品のイデーがまさしくここに完全な形として擬縮されている。ゲッツの生きた時代、ゲーテの時代、我々の今日、更に人間が生き続ける限り、人間の犯し易い誤ちや陥りやすい危険は私たちの回りに散在していよう。人間が人間そのものを無視する姿勢こそ、人間を排斥もし、人間の心を乱し、人間から自由を奪い取ってしまう。若きゲーテのテーマは、不滅であるべき人間の良心、即ち人間性の発見と解放、人間性の中に生れる誠の美と愛の讃辞であった訳である。換言すれば、人間におけるヒューマニズムの絶対性である。作品「ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン」に於て、その絶対性は『愛』そして『自由』なる言葉で具現されており、「私たち人間から決して失なわれてはならない」、と恰もゲーテ自身が我々に囁きかけ、否やむしろ声高に訴えかける忠告のような響きに

り、内面への束縛、干渉でもあり、所謂全人間性の否定と断言出来よう。疾風怒濤に燃える若き詩人ゲーテは自分がつき当たったこの事実を冷静に捉え、真向うから挑んだ訳である。従って作品の至る処に見出される『自由』なる言葉は、人間性否定の悲惨さを打破し、そうした非情さに堂々と立ち向かうべき人間本来の自然な姿として表現され描写もされているのである。自由の貴重さを知り、我々にまでそれを遵守すべき点を示唆せんとする主人公ゲッツに、ゲーテは人間そのものに全ゆるヒューマニズムを捧げ尽くし、ゲッツの臨終に於けるあの自由を叫びつつ息を引き取る姿を、写実的に描写することにより、ゲーテが求めようとするものが、単に人間性の要求にだけ終始するのではなく、同時にその人間性の独立と解放、つまり人間元来の最も美しい在り方、「人間らしさ」を呈示しようと望むものであった。ゲーテの唱える自由な姿は夢想から出ずるものではなく、また世俗の人間社会からの自己逃避でもない。何処までも個々の人間の人格を尊重し、精神の完全で健康な啓蒙発展を妨げることのない、常にヒューマニズムを礎とする自由。詩人の言葉をもう一度ここで思い出しておきたい。「自由なる言葉は、余りに美しく響くものであるから、たとえこの言葉が偽わりを意味していようと、この言葉無くして我々は生きられぬであろう」(註8) 若きゲーテの燃え上がらんとする情熱が、この部分に余すところなく集約されていると言えども決して大袈裟なことでもあるまい。ゲーテにとって自由なる響きは永遠のテーマであった。彼の論ずる精神の独立、人間性の解放はゲーテの生活及び詩作の領域だけに止まることなく、彼と同時代に生きた多くの人々、別けても祖国ドイツの若き文学同胞と全民衆に対して訴えかけられたものである。この事を裏付ける意味でも木村謹治博士の論文『若きゲーテ』(註13)に記されている一節を参考までにここに挙げておこう。「ゲーテは Urgötz の Motiv として Haller の政治小説 Usong (註14) から次の如き言葉を掲げている。

— Das Unglück ist geschehen, das Herz des Volks ist in den Kot getreten, und Keiner edeln Begierde mehr fähig. (註19) ([試論1] (f) Anmerkungen (註1) S. 21 参照) この標語が劇「ゲッツ」の中に盛られるべきイデーの表示であるべき事は、ゲッツの時代と照合すれば、容易に知られる。『民の心』即ち独逸国民の精神である。」(註15)

5. Akt (Heilbronn, im Turm)

Götz : Suchtest du den Götz? Der ist lang hin. Sie haben mich nach und nach verstümmelt, meine Hand, Güter und guten Namen.

(註20)

Hoffnung sich durchzog, sich in vaterländischem und allgemein menschlicherem Sinne ernstlich auszubilden. Zu dieser Zeit war denn überhaupt die Richtung nach der Epoche zwischen dem fünfzehnten und sechzehnten Jahrhundert eröffnet und lebendig. Die Werke Ulrichs von Hutten kamen mir in die Hände, und es schien wundersam genug, daß in unsern neuern Tagen sich das Ähnliche, was dort hervorgetreten, hier gleichfalls wieder zu manifestieren schien. (註18)

「だが反面、すでに30歳近い多くの人々が私を捜し出しては訪れて来たものであった。彼等の要求や欲望の根底には、祖国を思い一般的には比較的人間性豊かな意識で真剣に自己を形成しようとする至福に満ちたる願望が脈々と流れ通じていたのだ。この頃人々の目は悉くが、明らかに活気にあふれた様子である15・16世紀間に位置した時代に向けられていた。ウルリッヒ・フォン・フッテン (Ulrich von Hutten) (参13) の作品が私の手に入った。私たちの目に、その当時生じた出来事と似通った事象が今日また同じように再現されているかのように映ったことは、何とも不思議でならなかった。」前記の内容からもゲーテだけではなく他の多くの若い詩人ですらも、次第に自己の内的衝動を詩作に託し傾注しようとする傾向が高まりゆく様子が十分に窺える。作品梗概[試論1]でも論じた如く、ゲーテの時代は、作品の背景を成しているゲッツ暗黒時世とは甚だしい社会性の相異が存在しており、特に社会的文化面では比較するには及ばぬ程そのレベルも改善されていた。強いて言及するならば、ゲッツの時代は戦国の世であり、要するに下剋上を象徴する乱世であった訳である。さりとてゲーテの時代も未だ小国分立主義が基盤となりこの体制は崩されぬまま、一大国家の成立には至らなかったものの、民衆の生活は一応落ち着きを取り戻し比較的穏やかな安らいだものとなっていた。ただゲーテは自叙伝の中でたびたびドイツの法制度、施政、或は司法制度の在り方や方法論など種々の未熟さや旧態依然とした古き慣例などに固執する国政を辛辣に批判をしているのではあるが、これらの批判としてその対象になるべきそのものが、必ずしもゲーテの論ずる、所謂過去の再現そのものに直接結びつくとも思えない。なる程作品ゲッツでは背景や素材の効果として当時の社会状況や法の矛盾、政治形体とその実践、ひいては宗教事情までもゲッツの当時とゲーテ時代とを対比させようと企て意識的に取り上げ、道義的観点から批判性を持ち論じてはいる。だが作品に於ける様々な社会状況は、寧ろ単なる作品・戯曲の装飾の如きものに過ぎず、いわば副次的な意味でしかなかった。では詩人にとって、自分の時代に於ての武人ゲッツ時代とのいわゆる時間的(歴史的)類似性の再現とは一体何であったのだろうか。語るまでも無く、それは人間に強いられる苛酷なまでの精神的抑圧であ

の一基盤として決して無視出来ぬ、また欠くことのできないものがある。即ち筆者が総括的に論じようと努めようとしている『自由』なる言葉の重要性である。勿論のこと『自由』と『愛』が共に詩人の作品ゲッツの最大のイデーであったことは疑問の余地の無いところではあるが、作品中に於ては殊にこの二つの理念が終幕に至るまでことごとく一貫して唱えられ、絶えず問いただされている点も注目値する。まさしくゲーテにとっては全ゆるものからの解放、つまり『人間的自由』の希求であった。既に論じたように、詩人が戯曲を詩作するに及んだには諸々の外的現象とシュトルム・ウント・ドラングから生成された詩人の内的要因が最大のモチーフであった。彼は自己の持ち得る全てを詩作にあてがう必要性を認識し、それに準ずる如く創作を実践したわけである。この時期の若き詩人の様子を具にかいま見ることの出来る一文をここに引用しておこう。

……Welchen Eindruck der dreiundzwanzigjährige Goethe im persönlichen Umgang machte, hält ein zeitgenössischer Bericht fest : Er ist kein unbeträchtlicher Mensch. Er hat sehr viel Talente, ist ein wahres Genie und ein Mensch von Charakter: besitzt eine außerordentlich lebhaftere Einbildungskraft, daher er sich meistens in Bildern und Gleichnissen ausdrückt …Er ist in allen seinen Affekten heftig, hat jedoch oft viel Gewalt über sich. Seine Denkungsart ist edel, von Vorurteilen so viel als möglich frei, handelt er, wie es ihm einfällt, ohne sich darum zu bekümmern, ob es andern gefällt, ob es Mode ist, ob es die Lebensart erlaubt. Aller Zwang ist ihm verhaßt. ……(注17)「個人的な交際においては、23歳のゲーテに対する印象を同時代の一人は次のように語っている。彼はたいへんな人物だ。彼は素晴らしい才能を有しており、正真正銘の天才であり、特性そのものに委ねられた人間である。彼はおよそ絵画やその類のものの中に出現する程の特別な生き生きした想像力を持っている。彼は激しく感動もし、しばしば自分をも凌ぐほどの能力を有していた。彼の思惟方法は気高く、先入観なども持たず果して他人の気に入るものか否か、またそれが流行に適しているか否か、或は礼儀に適うかどうかなどについては一切気に掛けることもなく自分の思うがままに行動している。いかなる束縛や圧迫なども彼にしてみれば煩わしいものに過ぎないのである。」詩人に関してこのように記述されている様に、ゲーテは絶えず内的感情の解放を求め続けた詩人である。「詩と真実」の中でもゲーテは自分を次のように論じている。……aber dagegen waren manche, die, schon in die Dreißig gelangt, mich aufsuchten, besuchten und in deren Wollen und Bestreben eine freudige

いような感動を与える。シルクのペールに覆われたような乙女マリーアに漂う愛こそ、詩人が希求し捉えようと努めていた人間の内面的、つまり本質的美しさであった。この美しさとは人間の真の心であり愛でもあり、人間性そのものなのである。前述したように詩人は、この理念をよりの確に表現する意味で妖婦アーデルハイトを作中に登場させたに他ならない。彼女の姿は、政略的野心家で偽心に満ち溢れ、愛に飢え私利私欲のみに邁進する余り、忠実なる下僕のみならず、愛する夫をも死に至らしめる極悪な女として描かれるが、必ずしも全面的に彼女を否定し得ぬ点もあり、殊に総ての男たちを無意識のうちに魅了する実に不思議な魔力を秘めた女性として作品では重要な役割も演じている。

…… und besonders gegen das Ende, riß mich eine wundersame Leidenschaft unbewußt hin. Ich hatte mich, indem ich Adelheid liebenswürdig zu schildern trachtete, selbst in sie verliebt, …… (注16) 「……このようにして戯曲も終幕を迎える頃になると、特に或る種の不思議な激情らしきものが知らず知らず自分の内部で私を引き裂いてしまった。私はアーデルハイトを愛するべき姿として描こうと志向する一方で私自身がかえって彼女に惚れ込んでしまう結果となった。……」とゲーテも記述している如く、彼ですら詩的幻想の中で危く彼女の魔力の虜と化しつつあったと考えるべきであろう。だが彼女のかもし出す魅惑が、どれ程に美しく詩人に反映されようと、彼は終局的にアーデルハイトなる女性像を否定する必然性を認識し得た訳である。即ち、アーデルハイトに象徴される愛の姿とは、極端に言えば余りに世俗的に過ぎないものであり、そのような愛はもはや詩人の心を慰めるなど到底考えられぬことでもあった。彼女の美に魅せられ誘惑されついにはその犠牲となった二人の男たちが求めようと目論んだものこそ、ここにしてようやく解き明かされた魔女アーデルハイトの姿そのものであった。作品ゲッツのマリーアに象徴される愛の姿形こそ、人間本来の持つべき内面的美意識の基本でもあり、元来人々の有する人間性、つまりヒューマニズムのルネッサンス的回復祈願を意味するのに対し、アーデルハイトに映し出された愛憎は人間の表面的ものの現われに他ならず、偽心や奸策、裏切りや束縛など様々な状況下で犇めき喘ぎあう世俗的人間社会の恥部なる部分を、悉く詩的技法を駆使し具現化したものである。詩作を通じ彼が求め続ける愛とは、ヒューマニズムに潜在する真の人間性の発見を要求するものであり、欠落しつつある人間社会での人間愛、加えて人間愛の恒久的探索に他ならないのである。

『愛』をも包括する可能性を有する詩人ゲーテの、その巨大なヒューマニズムの理念

die beiden schlechten Figuren, die ihre Liebhaber spielen, möchten wohl Resultate solcher reuigen Betrachtungen gewesen sein. (註14) 「だがフリーデリケの立場を否応無しに考えてしまうことから生ずる苦痛が、私を不安へと追いやろうとする時、自分なりにあの古い流儀に従い、私はふたたび詩作に助けを求めるのだった。自分を苦しめる如き懺悔によって私はどうにか精神的謝罪にふさわしい姿でありたいと考え、もう一度本来の詩的告白という手段を続けたのだ。》ゲッツ・フォフ・ベルリヒンゲン《と》クラヴィーゴ (Clavigo 1774年作)《に登場する二人のマリーアと彼女らの恋人役を演ずる二人の悪い人物(註11)は、恐らくや後悔の念から出た結果なのでもあろう。」

物理的・精神的体験を通じて徐々に自分の姿・フォルムを形成してゆく若き詩人の人格はその後の彼の膨大な詩作活動にどれ程功を奏したか、あるいは多くの作品に与えた影響は測り知れないものであることも自明である。たとえ未だ詩人の内的悔恨の念は消え去らぬともそれを克服し、俊敏に詩作の様々な素材として体験から得た理念を詩作に描写した点などは、詩人の生に対する強靱さを物語っているようにも思え、何とも心憎いばかりである。

作品ゲッツの中で、麗しき娘フリーデリケの魂を美德の全てとして詩人はそのまま劇の素材として用いたことは上述の通りであるが、更に柔順・優麗・純真など美德をもって、全ゆる人間の醜さをも美しき心の余りに、何ら疑うことすら知らぬ乙女マリーアの姿をして描いた動機は、以上の論述で十分に説明し得たものと考えられる。なる程作品に描写されるマリーアは、多少なりとも美化され過ぎている嫌いも無きにしても非ずではあるものの、マリーアはあくまで詩人の生み出した女性像なのである。作品中フリーデリアの代弁者としてマリーアを配し、自らを不実な人物ヴァイスリングンにたとえ、いつ終るとも知れぬ罪の償いを徹底的に遂行させている。就中、第5幕第10場に描かれる不義者ヴァイスリングンの宿命的な死への歩みこそ、マリーア、即ちフリーデリケに捧げられた詩人の、彼の犯した不実に対する報復のクライマックスとも言えよう。「可愛さうなフリーデリケは、不実者が殺されたので、せめても心が慰むだろう。」(註15)

然し、こうは論じたものの、詩人のマリーアに託した意図したものは、ただそれだけに終止するものではなかった。要するに、詩人はマリーアをして初めて彼の生涯を貫いて追い求め続けたであろう『愛』という主題。『永遠に愛し得る女性の姿』をこそ、完璧に近い形体として描き出したのである。作品に滲み出される気高いマリーアの一言一句、一挙手一投足が愛の尊さ、愛の讚美、愛の息吹きを読む者に感じさせ、何とも言

Tiefsten verwundet, und so war die Epoche einer dusteren Reue bei dem Mangel einer gewohnten erquicklichen Liebe höchst peinlich, ja unerträglich. Aber der Mensch will leben. (注13)「彼女は絶え間なく私の心に浮び上って来るのだった。私はいつも彼女が自分に欠如しているのだと感じてはいた。加えて、私が自分自身でこのような不幸をもたらす結果をまねいてしまったにも拘わらず、そのような自分を戒め許すことが出来ない点が最も辛いことでもあった。グレートヒェン (Gretchen) (参9) は私から奪い去られ、アネッテ (Annette) (参10) は私のもとから立ち去ってしまった。だが今度こそは私自身に初めて罪があったのだ。私は最も美しき心をその深淵で傷つけてしまった。それ故言いようのない暗鬱な後悔の日々に徐々に慣れはしたものの、慰めてくれるような愛情も自分の囲りには欠如してただけに何とも表現のしようもない苦悶に満ちた耐え忍び難い時期でもあった。然し人間とは生きたいという願望をたえず持っているものだ。」尊い愛と美しさを内に秘蔵し、更にそれら全てを詩人に授けてくれた純朴な女性に対し、自分自身のエゴイスティッシュな内的感情の欲求のままに悲痛で余りに残酷無情、決して癒すことなど出来ようもない程の心理的深傷を負わせる結果となった我らが詩人ゲーテ。相手の苦しみを十分に理解し、苦悩し悔恨しつづけ自らの誤ちを素直に認め、深々と頭をたれる詩人。全ゆる内的な葛藤の末、最後に詩人の口から吐き出された言葉、即ち、「然し人間とはあくまで生きようと願っている」の一言こそ疾風怒濤の中で毅然と立ち向うゲーテを象徴するものであろう。作品中でもたびたび主張され訴えかけられているこの理念はゲーテの全人格的姿から溢れ出るヒューマニズムのあらわれと解せよう。ゲッツに於ても詩人はこの理念を充分脳裏に焼き付けた上で、一語一語を噛みしめながら永却不滅な人間性、つまり詩人のみならずこの世に生きる万民に欠くことの出来ぬヒューマニズムに内在する『愛の姿』を追究しているのであろう。計らずも斯様な主題が詩人のこうした悲惨な体験から生まれたという事も実に奇妙であると同時に皮肉なことでもある。

しかしながら詩人は単に生きようと欲する事に止まらず、あくまで生きるべきであり、生きねばならなかったのもある。この彼一流の哲学は彼をしてゲッツ詩作へと駆り立てた最大の要因でもあった。……Aber zur Zeit, als der Schmerz über Friederikens Lage mich beängstigte, suchte ich nach meiner alten Art abermals Hilfe bei der Dichtkunst. Ich setzte die hergebrachte poetische Beichte wieder fort, um durch diese selbstquälerische Büssung einer innern Absolution würdig zu werden. Die beiden Marien in “Götz von Berlichingen” und “Clavigo” und

する。…… Allein das schlimmste war, daß jener Wahn, indem er floh, eine wahre Betrachtung über den Zustand zurückließ, in welchem sich immer junge Leute befinden, deren frühzeitige Neigungen sich keinen dauerhaft-en Erfolg versprechen dürfen. So wenig war mir geholfen, den Irrtum los zu sein, daß Verstand und Überlegung mir nur noch schlimmer in diesem Falle mitspielten. Meine Leidenschaft wuchs, je mehr ich den Wert des trefflichen Mädchens kennenlernte, und die Zeit rückte heran, da ich soviel Liebes und Gutes vielleicht auf immer verlieren sollte. (注12)「最悪なことにあの ような妄想は次第に消えつつあったものの、若者たちの性急とも言える愛情は何んら 持続性をもたらすようなよい結果など期待すら出来ない。この点をどうしても無視せ ずにはおれず必然的に考え込んでしまうのだった。自分の犯した過ちから如何に逃れ ようとも、私自身を助けるどころか、寧ろ悟性や熟慮する行為すら、かえって自分を 苦境へと追い詰める結果となった。私の内に燃える情熱はこの秀れた娘の真価を認識 すればする程に高揚するのだった。だが私が獲得しえた斯様な多くの愛情や素晴らし きものを永久に失わざるを得ぬ時は刻一刻と迫ってもいた」。こうした詩人の言から も彼のフリーデリケに捧げんとした純真且つ素朴な情は十分に我々に伝わって来る。 たとえ二人の愛情がいかにも早すぎたものであるにせよ、ゲーテはフリーデリケの中に 自分の求めんとする美的現象を見い出していたことは疑う余地の無いところでもあ る。では何故に詩人は自分の理想となる愛の姿を、愛の本質をより一層高い次元の中 でみきわめようとしたのであろうか。彼の目指していた愛の姿は、現象面で生ずる 男女間の激情のみに委ねられてしまうことを恐れ、既成の法則に呪縛されることを拒 み、自分の内的部分が仰圧などによって受身的に一点に陥ることを嫌悪し、全ゆる束 縛を排撃するに足る充分な自己の内面からほとぼしり出る常なる主体的欲求に託した ものでもあり、永却不変な愛の姿を有している。さりとして如何に崇高で卓越した精 神を願望する疾風怒濤の旗手ゲーテであろうと、あのフリーデリケ体験で犯した不 実な行為から彼を襲う自責の念に日々さいなまれ、苦悩から容易に逃れることは出来 なかった。フリーデリケに映し出される女性像を詩人の心から奪いとることなど到底 不可能なことでもあった。ゲーテは忘れ難き彼女の姿をたえず詩作の中に探し求め続 けていたのだ。…… Sie war mir ganz gegenwärtig: stets empfand ich, daß sie mir fehlte, und was das schlimmste war, ich konnte mir mein eignes Unglück nicht verzeihen. Gretchen hatte man mir genommen, Annette mich verlassen, hier war ich zum erstenmal schuldig: ich hatte das schönste Herz in seinem

娘フリーデリケと知り合い牧歌的風土の中で自然の雄大さと美観を十分に堪能し、詩人と一人の素朴で敬虔な女性との間に生れた愛は感情の昂揚の儘に二人を強く結びつけるかのようであった。だが当時の詩人の内に潜む詩的・精神的疾風怒濤の強烈な衝激は彼に僅かなる安らぎすら与えることも無く、この素朴な愛ですら束の間の出来事でしかなく二人の信愛を全て打ち崩してしまう結末となった。皮肉なことにゲーテは、この愛の破局的結末（フリーデリケにとってそれは愛の犠牲をも意味していたのであろうが）、この体験によって初めて詩人の生涯を通しての詩人たるべき（即ちゲーテ的）姿・ゲシュタルトが驚愕するが如く明白に確立されたのである。馬に跨がり今にも出立しようとする青年ゲーテの脇に寄り、目に止め処無く流れる涙を浮かせ、黙したままで見送ったあのフリーデリケの姿を、彼は險に焼きつけ生涯幾重となく思いおこし、彼女を偲んだに違ひ無かろう。フリーデリケにとっては不実の男に終わった我れらがゲーテは、戯曲ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲンに於るマリーアの像に、或は彼が死の前年に著わした『ファウスト・第2部』(Faust, Der Tragödie zweiter Teil 1831) (参8)の最後に描写されるグレートヒェンにその姿を借りて、余りに純朴なる汚れを知らぬ乙女フリーデリケの清い聖女としての姿、その実像を浮き出させたものと考えるのが妥当と言えよう。端的に論ずるなら、過ち多き青年に往々にして起り得ることであろうこと、即ち傍若無人とでも言えようゲーテの犯した過大な不実に対する罪深さの認識、更に悪行を自戒し、詩人として謙虚にそれを償おうと努める彼独特の精神的全貌が、熱血漢であるがゆえか、極めて明確に具体性を有し、如実に詩的方法論の上に展開されてもいよう。この世には枚挙に遑が無い程に愛を題材とした詩人は多いものの、彼ほどに愛の実践を糧にその愛の深淵へと探り入り、また愛の現実的、且つ夢想的実体を把握し、会得し、冷酷でこれらの得難き愛の全てを犠牲にしてまで、可逆的に新たに煌煌と燃え上がり灼熱するような詩人の情を芸術創造へと推移させ、大業を成し得た詩人は後にも先にも彼をおいては恐らく居まい。ゲーテにとって愛とは如何なる意味をもつものであったのだろうか。詩人の数多き恋愛経験を鑑みると彼の愛の対象、女性観とは、単に外面的世俗にとかくみられる身分階層などに比重を置かず、人間の内なる部分から湧き出る精神の充実した個の結実そのものであった。これこそ女性そのものの姿、女性にのみ天賦された美の概念との接点であったに相違ない。就中その美たるものは無論世俗的現象面だけを捉える千変万化に浮遊する輕輕なるものではなく、決して豹変することのない永却不滅な人間の内的美意識そのものなのである。愛しきフリーデリケとの間に生れた恋、やがて詩人の独断専行の結果迎える必然性に満ちた愛の終焉に関してゲーテは更に次のように述べていることも実に注目し値

ツの擁する理念、即ちイデーを筆者が甘受するが儘に捉えつつ、この詩人の理念とする本質を可能な限り掘り下げてみようという気持で試論に臨んでいるとお考え頂ければ有り難い。従って斯様な身勝手な自分の粗悪なる論考は、ともすれば極めて単純且つ一面的、更には非論理的だとの批判を受けようことも当然かも知れぬ。だが弁解する訳ではないが、偉大な我れらが詩人ゲーテも私自身を悟すが如く論じているように文学とは決して創り出そうとして創り出せるものでは無く、おのずと生み出るものである。詩才ゲーテの極めつきの言ではなからうか。無論のこと詩作するに前提となる積極性のみならず、文学を、あるいは詩を受動的な姿勢で受け取る両面に於て、文学作品たるものは単に教義の如く与えられるものではない。寧ろ自由な感性のままにそれを受け入れ、個人の大きな財産として昇華されるべきものであろう。端的に論ずれば、文学とは如何なる制約も無くば、条件など全くもって不要とすら言えよう。文学的世界観はともすれば短絡的には詩作活動という現象面から詩人も読み手も単に自己満足、即ちマスターベーションの役目を果たすに過ぎず、多くはその域に陥る可能性が多いことも否めないが、反面この詩的領域にこそ多面的生活空間の中で多種多様な外的・内的事象にことごとく抑圧され汲汲と生きざるを得ない多くの我々凡人には、このうつ積を黙認し、生き続けながらも内的感情の発露を思う存分見い出させ、吐き出させ得る唯一のパラダイスと言えるのかも知れない。

戯曲ゲッツの中で具現化される第一のヒューマニズムの形態こそ『愛』であると言えよう。作品中に描写され、その全体を統括する詩人独自の主題とも考えるべき、また人間誰れしものが信ずべき愛の形体そのものであり、この余りに簡単に理解されがちな、逆に誤解され易い言葉『愛』が恒久的に響く真理を可能なまでに詩人は探らんとしている故に、筆者も注目し論旨の目的とした由縁である。詩人は、劇中にその素材として大きな役目を担わせる主人公ゲッツの愛妹マリーアの全容に絶えず愛を主題とするものを集中させている。つまり、マリーアの姿をこそかりて愛なる言葉の持つ意味。人間相互でのその具体的姿・ゲシュタルトを実証し、最も対比し得るもの、即ち憎悪するに匹敵すべき対象、俗に言うシンメトリーとして妖艶なる女性アーデルハイトを意識的にそこに配している。このまさしく相反する二人の女性に課せられたもの、否や作中のこの両者たとえられる愛の姿とは一体如何なるものであろうか。ゲーテ的愛の形体を把握すべく、彼の内的部分へ接近するには再度あの愛しき片田舎の娘フリーデリケ・ブリオンなる存在を思い出す必要がある。詩人は70年10月、シュトラスブルクの学生としてたびたび訪れることとなった田舎町ゼーゼンハイムで、牧師の

戯曲に於る必要条件であった既存の概念、即ち「時」「場所」「統一」の三大原則を無視したことも窺える。

詩人は帝国の暗黒時代における支配階級層の腐敗し切った墮落の状況、利権に纏わる陰謀など俗悪非道な許し難き全体像を作品に具現化させたと言えよう。このことこそ過ぎ去りしドイツ帝国の陰惨な時代に在った実在の人物ゲッツと、18世紀半ばを若き青年として生き、青春を謳歌しつつ自由奔放に詩作に没頭する文学青年ゲーテとが、あたかも盟友であるが如く共に抱いた諸悪に対しての必然なる挑戦であったと共に、不滅であるべき人間性の哲学的追究を主眼とした創作への目的意識でもあった。絶えず文学の中に個人の自由な姿を求め続ける詩人ゲーテにとって、まさしく疾風怒濤の戦いでもあり、ヒューマンイズムの意義と特性を一人間として摂取しようとする詩人特有の渴望、否や永遠なる精神を探索する信念に他ならない。ゲーテにしてみれば、支配階級の腐敗墮落ぶりを作品に意識的に辛辣に描写することにより、時世の思ひ余る上流社会層の倫理的衰退をイロニーの形で痛烈に批判しようと目論んだのかも知れない。同時に作品に登場する全ゆるベルゾーンが現実と理想の閾値に在り、世の風潮に委ねるが如く人間の本質的虚弱さを抉り出している。人間の持つ獣のような動物的本質や愛欲、知あるが故に生ずる裏切りや征服欲、支配欲などありと全ゆる欲望が英智に支配されぬまま、日和見的人間の恥部そのものが悉く批判追究され、極めて写實的に描写されていることは、この作品を読む諸氏が一樣に感ぜられるところでもあり、興味を示されることを疑わない。

次の章では、作品ゲッツの最大なる主題「ヒューマンイズム」について洞察しつつ論及してみたい。

(h) ゲーテ的ヒューマンイズムの具現化とは

……その試み≫愛<< と >>自由<< を中心に

これまで主として作品ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲンが創作されるに至った経緯、並びに詩人の詩作に注がれた情熱、またその素因となったものなどについて触れ論じて来た訳であるが、筆者としてはここで詩人が作品を通して我々読者に訴えようとしている種々なる主張、即ちゲーテ自身に内在する問題意識そのものを更に明確にすべく若干ながら追究を試みる。然し筆者の意図する作品洞察とは、浅学なる故に、所謂評論家として述べる作品論、はたまた戯曲・舞台効果などといった専門的領域にまで到達するものではなく、寧ろ素朴な観点で読者の純粋な意識を根底に、作品ゲッ

たいへん都合のよい立場にいたのだ。従来の文学的技巧はいささか損う結果になってしまったが、知識量を有益に活用させる独自の手法で、汚れ無き皇帝を念頭に据え、その他幾多の階層を保有してきた古き神聖ローマ帝国ドイツの種々の社会関係が描き出され、一般に法秩序が失われた状況下でただ一私人として決して合法的とは言えないまでも、自分の信念のもとに正道を歩み正しい行動を目指し、それが故に可逆的にも非常に惨めな状況へと陥らざるを得ない一人の騎士が描かれた。……極端な程にゲッツ自身に都合よく自叙伝の中にしるされたゲッツの意志・(遺志)にできる限り適うようにと思いつつこの作品は叙述されたのだった。」ゲーテ時代とも言えよう18・19世紀ドイツに於ては、階級的差別問題や人民間の意識は民主的国家統一を夢みる人々の中に芽生えてきつつはあったものの、ゲーテを通じて、殊に作品ゲッツに於てはデモクラティズムの問題意識については殆んど、否や皆無と言ってもよからう程、主題として論及されてはいない。端的に言えばゲーテ自身、詩人としてこの点に関してはそれほど比重を置くに必要無いものと考えていたのかも知れぬ。歴史的観点からこの時代の階級意識を鑑みても如実に理解し得ることであるが、今日の我々の時代とゲーテ時代では民衆の意識の大きな差異が生ずるのも当然であろうし、社会状況に生成する種々の価値観の相異に隔世の感があるのも人間としてその流動する歴史を有する以上自明のことと言えよう。だがそのように言い切るだけで納得出来る問題でもなからう。周知のようにゲーテの生まれ育った家系環境は、彼の生涯を通じて物理的にも精神的にも極めて恵まれた状態であった。彼は目の当たりにするこうした階級的問題の有する矛盾を知りはしたものの、不可思議にも詩作においてこうした命題には敢て直接的に関与しようとはしなかった点は滑稽でもある。ともあれゲッツ上に現われる人間の様々な葛藤、勢力抗争の様子は、当時の各地方を掌握せんとする領主や貴族、更には教会同志の野望、果ては皇帝と教皇との間で繰りひろげられる権力闘争など、所謂中世支配階級の朽ちた社会を皮肉るが如く、殆んどがここに焦点が当てられている点は興味深い。部分的には小市民、農民や流浪の民ジプシーの姿をかりて人物を登場させているものの、その劇中での役割や描写の点では下層階級である民に依る市民的革命闘争を問題提起するには至らず、わずか一場に映し出される農民戦争の図でさえ単に動乱・意味無き反逆として取り扱われているに過ぎず筆者としても苦笑してしまう。然しながら反面こう論ずることも出来よう。つまり史実に基礎を成す作品だが故に、その背景が極端に広範な域にひろがる結果を招き、結局時間的な集約が困難となり、捉えにくくなった。換言すれば作品ゲッツの有する題材がいかに大きなものであり、重厚なものであったかを物語っている訳でもあり、詩人としても創作に当っては

deswegs verfolgte, ohne weder rückwärts noch rechts noch links zu sehn, und in etwa sechs Wochen hatte ich das Vergnügen, das Manuskript geheftet zu erblicken. (注10)「実直なゲッツ・フォン・ベルリヒンゲンがみずから記した彼の生涯は、私を歴史的空間へと追い込むこととなった。私の想像力は著しく拡大し、私の戯曲の形式はありと全ゆる既存の舞台の域をも超越してしまい、ますます活発に、また生々しい出来事に接近しようとした。……この動機（即ち妹コルネリアが作品の執筆を勧めたこと）によって、私は或る朝、前以って何んら草案や計画などたてること無く筆をとり始めていた。……愛する妹コルネリア（Cornelia Goethe 1750-1777）は私の忍耐力など信用してはいないが、とまで言ったのである。この彼女の言は、ますます私を発奮させることとなり、次の日も、またその翌日も、といった具合に書き続ける結果となった。日々書き下した原稿を朗読するたびに希望が脹れあがり、殊に素材は既に自分自身のものになっていたものだから、全ゆるものが私にとって一步また一步と、いよいよ生き生きしたものに成っていたのである。斯様な具合に、特に中断されることも無く、うしろを振り返ることもなく、右に左に脇目も振らず、ただただまっしぐらに追い求めていた作品の創作に没頭するだけであった。約6週間のうちに、既に草稿を綴じて眺められるまでの満足感をも充分に得られたのだ。」

作品ゲッツの提言する諸問題に関してさらに論及を進めるに当って決して無視し得ぬ点について触れておきたい。即ちこの作品を創作するゲーテ、若き青年期にある詩人の社会的立場の確認であり、ゲーテの上層社会階級及び下層社会階級への観点・見解は如何なるものであったのか。この点について詩人は次の如く卒直に記述している。…… In dieser Zeit war meine Stellung gegen die obern Stände sehr günstig. ……Durch “Götz von Berlichingen” aber war ich gegen die obern Stände sehr gut gestellt; was auch an Schicklichkeiten bisheriger Literatur mochte verletzt sein, so war doch auf eine kenntnisreiche und tüchtige Weise das altdeutsche Verhältnis, den unverletzbaren Kaiser an der Spitze, mit manchen andern und ein Ritter dargestellt, der im allgemein gesetzlosen Zustande als einzelner Privatmann wo nicht gesetzlich, doch rechtlich zu handeln dachte und dadurch in sehr schlimme Lagen gerät …… aber doch immer in dem Sinne vorgeführt, wie der wackere, tüchtige Mann sich selbst, und also wohl zu leidlichen Gunsten, in eigener Erzählung dargestellt hatte.

(注11)「この時代の上流社会に対する私の見解はかなり好意的であったと思える。…私は詩作中であったゲッツ・フォン・ベルリヒンゲンの作品に依っても上流階級には

とであろうか、手に取る如くそれは容易に理解し得ることでもあろう。予てから、筆者自身にしても作品ゲッツに描写される極めて純真な人間としての主張に、言い尽くせぬ感動を覚え、ゲッツの姿そのものが本質的には若き詩人としてのゲーテ像と重複して映り出され、作品中に激しく、時に明晰に、恐れる程に完全な人間らしい善人像として全てのものが描かれているように思えてならなかった。言うまでもなく、作品を繙いてゆく段階では詩人が作品の中で努めて捜し求めようとしたものと筆者が作品から解釈すべき部分との間には大きな隔たりが有ろうことも否めない事実であった。然しこうした現象こそ文学特有の解釈上たえず生ずる必然性でもあり、そこにこそ文学の面白さとその恒久的奥深さとが共存しているのだ、と換言することも可能であろう。

詩人がみずからその姿を作品ゲッツに余すところ無く反映させ、劇中に登場する様々な人物（ベルゾーン）の内部に於て、作品のテーマであるべき人間性の視点とその在り方を徹底的に追究し、その毅然たる姿勢を如何なる場面においても崩さぬよう心掛けていた点は特に注目すべきところである。ともあれ作品中で絶えず一貫して唱えられる人間性の問題点、この難解な課題に直面し己れを信ずることにより一步一步解明しようと努める主人公ゲッツの姿こそ、取りも直さず詩人ゲーテが疾風怒濤の中で懸命に探り求めていたヒューマニズム溢れる人間精神の真のゲシュタルトであったことは明らかである。ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲンの中で主張される「人間本来のゲシュタルト」「愛」「自由」などの内面的問題点、並びに素材としてゲーテにとっては最も刺激となった種々の外的事情^(参7)、とを噛み合わせて彼の精神に内在する衝動の隆起にこそ詩人は身を委ねざるを得なかった。次の詩人の言からもこれを裏付けることは充分である。……Das Leben des biedern Götz von Berlichingen, von ihm selbst geschrieben, trieb mich in die historische Behandlungsart, und meine Einbildungskraft dehnte sich dergestalt aus, daß auch meine dramatische Form alle Theater greuzen überschritt und sich den lebendigen Ereignissen mehr und mehr zu nähern suchte …… Durch diesen Antrieb bestimmt, fing ich eines Morgens zu schreiben an, ohne daß ich einen Entwurf oder Plan vorher aufgesetzt hätte. ……(indem sie zweifelte, daß ich so fortfahren würde), ja sie äußerte sogar einen entschiedenen Unglauben an meine Beharrlichkeit. Dieses reizte mich nur um so mehr, ich fuhr den nächsten Tag fort, und so den dritten; die Hoffnung wuchs bei den Täglichen Mitteilungen, auch mir ward alles von Schritt zu Schritt lebendigr, indem mir ohnehin der Stoff durchaus eigen geworden; und so hielt ich mich ununterbrochen aus Werk, das ich gera-

期的展開にさらに追い討ちをかけるが如く推進貢献した文学者こそ、ドイツ啓蒙主義育ての親、即ち新文学思考の先駆者と呼ぶべき斯のゴットホルト・エフライム・レッシング (Gotthold Ephraim Lessing 1729-1781) であったことは言うまでもない。同時にこの文学的主流を担い、レッシングと共に指導的役割を果し進歩的立場に在った人物こそ言語学・民族学者 (特にドイツ民衆研究に携わる) ヘルダーであったことも忘れてはならない。特にヘルダー思想の根源的背景には独創的個性を尊重し、個人の感情を甘受し、更に高揚させ、ありとあらゆる既存の法則とも呼べよう束縛を自から打破せんとする理想主義、要するに天才の持ち得る魔力にも等しい才能そのものを畏怖の念と感じ、これを遵守した姿勢は、ドイツ文学青年たちに測り知れぬ影響を及ぼしたことは感動的でもある。当時のゲーテが日々悩み倦んでいた精神的葛藤の様相を明確に把握し得る次のような言葉が残されている。

……Was mich betraf, so fuhr ich fort, die Dichtkunst zum Ausdruck meiner Gefühle und Grillen zu benutzen …… Was aber von jener Sucht in mich eingedrungen sein mochte, davon strebte ich mich kurz nachher im “Götze von Berlichingen” zu befreien, indem ich schilderte, wie in wüsten Zeiten der wohlthätige brave Mann allenfalls an die Stelle des Gesetzes und der ausübenden Gewalt zu treten sich entschließt, aber in Verzweiflung ist, wenn er dem anerkannten, verehrten Oberhaupt zweideutig, ja abtrennig erscheint.

(注9)「私自身について申すならば、私的感情や妄想を表現するための詩作に費すべき時間的余裕が暫らく続いたのであった。……然し、こうした病癖は私個人の中へと浸透し、潜在してしまつたものと思われた。この後、即座にゲッツ・フォン・ベルリヒンゲンの中で、斯様な不快な病いから自分自身を脱却・解放してしまいたいと考え、努力を重ね、荒廃した時世にあつてもあれ程に気品にあふれ、良心に満ち、且つ勇猛果敢な姿のまま生きぬいた一人の男が止むに止まれず法律や施行権の代役を果たそうと決意するものの、諸国人民から承認され、遵守されている皇帝に計らずも不実な、否やそれどころか叛逆者とみなされ、苦悶しつつ絶望へと陥る様子を描いたのだ。」詩人のこうした回顧からも理解出来よう詩作に関連する膨大な外的事情、並びに詩人の心深くに潜む精神面での内的衝動とを、彼は創意の中に悉く集約させ、且つその総てを作品ゲッツに織り込み、恰もゲーテみずからあのゲッツの時代にでも生きてかのように想定し、作品中に現われる主人公を介して詩人の内面的欲求を切実に主張しようとしたことも疑う余地は無い。ゲーテの時代に生きて数多くの人々はもとより、まして同世代の若者たちがこの作品を手にしてどれ程に強烈な感動と歓喜を覚えたこ

nkrieg 1524-1525)であったことは言うまでもない。これら人民戦争、暴動等はまさしく動揺するその時代の社会的局面を象徴するものでもあった。斯様な未曾有とも言えよう人的悪意に支配される社会動静の中、絶えることなく、個人に迫り来る不安に脅かされる動乱の時代にあっても、一切の如何なる罪悪や偽善にも迎合することなく、まして妥協するをよしとせず常に雄々しく立ち振る舞い、真の愛、真の自由、そして真実のみを求め声高に叫びつづけながらこの時世を生き貫いた一人の完全潔癖主義者、ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲンという騎士。この史実の人物ゲッツみずからが記述した自叙伝が、当時の感性のみに支配された若き詩人ゲーテにどれ程の測り知れぬ、否や空前絶後と言えど決して過言では無かろう影響と刺激的感動を与えたことであろうことか。詩人は何んら躊躇する事無くゲッツの生きた時代を詩作の背景に添え、劇中人物に関しても前述の如く、詩人の内面から発せられる創意そのものを、設定される時代の留まることを知らぬ流れの中で作品全体にくまなく滲み出させることに努め、それを生き生きしたものと成していることも注目すべき点である。その中でも殊に主人公なる人物として、飽くまでも実在のゲッツ自体を据え置いたことから、ゲーテが彼に託さんとした詩人の夢想や、彼をして代弁せんとするゲーテの意図、或はある種の真に尊敬するに値する人物としてゲッツそのものに、身も心も捧げ尽くそうとする、いわば詩人本来の美に対する盲従性の現われとも言えるであろうものがそこには窺える。

青年ゲーテが生きた18世紀ドイツは、漸次、文芸文化の面や法律・経済等社会科学的領域、自然科学と全ゆる学問上の研究推進、或は種々の政治的改革も暫時、履行されつつあったものの近隣諸国、就中17世紀に清教徒革命・18世紀産業革命を体験した英国、やがて全ヨーロッパを震撼させることとなったフランス諸国などに比しても、未だに国家統一すら果たされず政治思想や経済機構など基盤となるべき多くの点での立ち遅れが目立ち、その必然的結果として文学界に於ても旧態依然として多くの文学者は、あの理性を尊ぶ合理的啓蒙主義にのみ傾聴安住し、みずからその殻を打ち破ろうとする兆など見られるものでもなかった。こうした一連の社会的・人間的、加えて文学的悲惨な非生産的状况下ではあったものの、ドイツにも漸く18世紀後半、若き詩人たちを中軸とした真の愛国主義、即ち本来的ドイツ精神の到来を切望し、全ゆる既存の概念を超越せんとする文学的天才性とも言える能力を讃美し、フランスの啓蒙思想家ルソー (Jean Jacques Rousseau 1712-1778) の唱えた自然への帰依を羨望する強い傾向が顕著に現われてくる。無論この哲学的思潮がシュトゥルム・ウント・ドラング文学運動へと急速な勢いで移行し、発展してゆくこととなった訳であるが、この画

に改名され、ようやくして完成をみることとなった。尚、ここに列挙した当時のゲーテ周辺にあった人物は、詩人がこの作品の素材をみずからのものとするために詩作に没頭し改作を幾度となく試み、その暁に遂に書き上げるに至るまでの、たとえそれが直接的あるいは間接的であろうとて、何かしらゲーテ及び彼の詩作活動に精神的影響を与えたことは明らかである。だが故に敢えてここにその名を記したのであるが、それ以上の個々の人物に関する叙述はさして必要なかろうと考えられるのでここでは詳述は控えることにする。

論題でもある作品ゲッツに於て詩人は、単に登場する人物、即ちペルゾーンにのみ作品の有する理念（イデー）の表出を依存しようと企てたのではなく、作品中に意味される絶対性を具現化せんがためにその必要欠くべからざるペルゾーンをまさに適材適所に配することに心掛け、また個々のペルゾーンが、与えられた空間で如何にそのペルゼーンリヒカイトを発揮したのか、つまり具体的に如何に斯様な動乱憎悪の時世を人間は生きぬいたのか、その結果として、一体各々のペルゾーンに何が生じたのか、これら全ゆる諸点に注目し、作品の元来持つべきイデーを擬縮させ、且つ当時の民衆に社会的な問題意識の喚起を促そうと努めている点も忘れてはならない。詩人にとってこのような観念は、要するに史実に基づく創作でもあったために、単に短絡的に登場人物のキャラクターを描写することのみに囚われることなく、歴史的事実をあくまでも客観的に捉え、加えて徹頭徹尾、作品に内在する精神をゲーテ自らの手で産出しようとするゲーテ一流とでも言えよう独特な創意でもあり、際限なく増長する詩人の知識欲とも言えるであろう、あたかも泉から止むことなく湧き出ずる清水の如きものであったことも明白である。この詩作上の欲求、換言すればゲーテ自身の渴望こそあの疾風怒濤に生きた数多くの若い詩人たち誰れしもが挙って探り求めようと努めていたものに他ならない。ゲーテにとってこのような創作活動に対する願望の鋒は、無意識のうちにもごく自然に中世ドイツ、即ち15・16世紀の社会的暗黒の領主統治の時代へと向けられる。この時世、荒廃した人心の醜い葛藤、ありとあらゆる欲望と罪悪が顕著な程にまた余りにも露骨に世相を象徴し、人間本来の理性感覚すら狂わせ、加えて祖国ドイツ帝国の惨さは、善良なる数多くの民衆から彼等の唯一なる自由をすら奪い取るだけでは無く、一層民人を抑圧することとなった。こうした反動から、精神的圧迫に対する人民の人間性回復、或は個人に与えられた権利を素朴に要求しようとする革新的な社会運動も至る処で起り始め、ついに16世紀初頭、数多くの人民闘争が勃発するまでに事態は至った。それらの代表的なものとして歴史上にその名を残すこととなったのが騎士戦争（Ritterkrieg 1522-1523）、並びに農民戦争（Bauer-

する、言うなれば内面的自己感情を爆発させることに依って自分自身を解放し、これを真の意図とし、自由に満ち溢れる人間そのものであらんとする個・の存在意識・のものであったとも言えよう。詩人にとってその最後となる学生生活を送ることとなった古都シュトラスブルクでの幾多の精神的現象にまつわる実体験は、まさにゲーテそのものに詩的天分を自覚させる結果とも成り、遂にはその後の状況からしてもゲーテを大詩人に至らしめる萌芽をみることもなった訳である。後に詩人と親密な師友関係を結ぶこととなったヘルダーとの宿命的な出会い、彼から受けた数多くの強烈的な精神的学問上の影響、或は良友レルゼ等との闊達な友好関係、片田舎ゼーゼンハイムがかもし出す豊かな自然を舞台に繰り広げられた純情可憐な牧師の村娘フリーデリケとの情熱的恋、やがて訪れる二人の愛の必然的終焉。このように数限り無き精神的向上を培う体験を経た後、詩人は1771年晩夏、ふたたび故郷フランクフルトの街へと帰京する。ゲーテはこの後、前出の言語学者ヘルダーの仲介を得てヨハン・ハインリッヒ・メルク (Johann Heinrich Merck 1741-1791) ^(参2) と知友の関係を結ぶこととなり、前述したように同年、即ち71年10月より年末にかけての僅か6週間のうちに戯曲『ゴットフリート・フォン・ベルリヒンゲン』(Geschichte Gottfriedens von Berlichingen, dramatisiert 1771)を一気に脱稿した。これが一般に『ゲッツ草稿』^(参3) と呼ばれるものである。翌1772年5月、ゲーテは父ヨハン・カスパー・ゲーテ (Johann Caspar Goethe 1710-1782) の命に従い、実務に基づく法律実習を主たる目的に3ヶ月の予定でヴェツラー (Wetzlar) へ赴くこととなった。この地に滞在中、多くの同僚と交友を深めるが、就中ここに特筆すべき人物としては次の如き名が挙げられよう。カール・ヴィルヘルム・イエリザレム (Karl Wilhelm Jerusalem 1747-1772) ^(参4)、ヨハン・クリスティアン・ケストゥナー (Johann Christian Kestner 1741-1800) ^(参5)、更にこの後ケストゥナーと結婚することとなったシャルロッテ・ブッフ (Charlotte Buff 1753-1828) ^(参6) 等である。ブッフは愛称ロッセとも呼ばれていることは周知のことであろう。というのも若き日のゲーテがゼーゼンハイムの村娘フリーデリケに愛を捧げたと同様に、このロッセに対しても詩人は激しく燃え熱愛し、その愛を吐露するのだが、結局は悲恋に終止する結果となった。この様子を詩人は、単に苦しさからの逃避として自己を内面的に潜伏させること無く、寧ろ極めてリアル、且つ情熱的に作品『若きヴェルテルの悩み』(Die Leiden des jungen Werthers 1774)に描き出していることからしてもゲーテの熱情は極めて激しいものであったと言えよう。1773年4月、この間、数回にわたって手直しされ、更に加筆され、構想も練り直された後、初稿ゲッツは遂に『鉄手のゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン』としてあらた

≫疾風怒濤≪を背景とした戯曲『ゲッ ツ・フォン・ベルリヒンゲン』に展開 されるゲーテ的主題を中心に

〔試論1〕に基づく〔試論2〕(作品分析を中心に)

柿原啓志

(g) 作品≫ゲッツ≪への具体的考察

……Die Hoffnung, immer vernünftiger zu werden, uns von den äußeren Dingen, ja von uns selbst immer unabhängiger zu machen, konnten wir nicht aufgeben. Das Wort Freiheit klingt so schön, daß man es nicht entbehren könnte, und wenn es einen Irrtum bezeichnete. (注8)『……一段と理性的となり、私たち自身を単に外面的事象からのみならず、自分たちを取り巻く現実的な私たち自身、即ちその実体から逸脱させ、層々向上し独立させてみたいといった或る種の願望を完全に棄て去ることなど、私たちには到底不可能なことのように思えた。『自由』という意味あいという言葉それ自体が極めて美しくまた清らかに、更には驚ろく程に印象深い響きを有していたもの故、たとえこの言葉の奥に偽りとも言えよう意味が潜んでいようとてこの『自由』なる言葉無くして私たちは存在し得なかったであろう』詩人ゲーテは存分な程に青春を謳歌した自らの若き頃を回顧しつつ、長年に亘り記述し続け、ようやく晩年にしてその完成をみるに至った自叙伝的大作『我が生涯より・詩と真実』“Aus meinem Leben, DICHTUNG UND WAHRHEIT 1833”^(参1)の中で斯様に述べている。既に〔試論1〕(独協中学校・高等学校「研究紀要」第9号 昭和61年3月20日発行)でも論じたように18世紀後半に独逸文学界に興隆した革命的文学運動≫疾風怒濤 STURM UND DRANG≪の勢いはこの時すでに文学青年ゲーテの内面に急迫し、精神的にも猛り狂わんばかりの勢いで詩人の内的自己を開眼させるものでもあった。詩人が心中に秘めつつ、且つ間断無く希求し続けていたものとは、この機に至るまで徐々に詩人の内面に累積され続けてきた自己の精神的な呪縛とも言えよう束縛から脱却し、あくまでもそこから自分を離反させることに重きを置こうと

—執筆 者—

新 井 孝 重……………社会科教諭
柿 原 啓 志……………ドイツ語科教諭
滝 口 晴 生……………英語科講師
山 鹿 誠 次……………学 校 長
米 澤 宏……………社会科教諭
和 田 一 誠……………社会科講師
(五十音順)

紀 要 委 員

安 藤 維 男 木 村 重 利
田 代 雄 一 服 部 武 司
藤 本 義 信

研 究 紀 要 第 10 号

昭和62年 4月10日 印刷

昭和62年 4月20日 発行

発行者 東京都文京区関口 3丁目 8番 1号
獨協中・高等学校 紀要委員会

編集者 服 部 武 司 (代表)

印刷所 東京都豊島区東池袋 5丁目 6番 14号
株式会社 豊島プリンティング

Review of Dokkyo Secondary High School

No. 10

1986

Contents

Articles:

- Tokyo Metropolitan Region and my Personal History of Studies
Experience of Life and GeographySeiji Yamaga... 1
- Über einen Literarischen Versuch und eine Analyse des größten
Dichters Johann wolfgang von Goethe und seines Dramas „GÖTZ VON
BERLICHINGEN.“ [zweiter Teil]
Betr : Die konkreten Analysen dieses WerkesHiroshi Kakihara...(1)
- Exchange of Hearts : An Essay on a Petrarchan Conceit.....Haruo Takiguchi...(23)
- Terraces and Terrace Deposits along the Sagami River in the Kanto
Area (2)Hiroshi Yonezawa...45)
- A Trend of the R&D's Locations in Japan 1983~1985 Kazunari Wada...(54)

Introduction & Book Review :

- Reading "The Formation of the Medieval World" (Ishimoda Shoh)
.....Takashige Arai... 13

Edited by

Dokkyo Secondary High School Review Committee

Address : Dokkyo Secondary High School

1-8 3chôme, Sekiguchi, Bunkyo-ku, Tokyo